

# 橋牟礼川遺跡

## 総括報告書



平成28年3月

鹿児島県指宿市教育委員会











# 例 言

1. 本書は、鹿児島県指宿市に所在する橋牟礼川遺跡で大正7年から平成11年度まで実施した発掘調査成果をまとめた総括報告書である。
2. 本書は、平成26年度～平成27年度において、国庫補助金・県補助金を受けて作成した。
3. 作成作業は、文化庁記念物課・鹿児島県教育委員会文化財課の指導を受けて、指宿市教育委員会社会教育課が実施した。組織は以下のとおりである。

作成主体	指宿市教育委員会		
作成責任者	指宿市教育委員会	教育長	西森 廣幸
作成担当組織員	指宿市教育委員会	教育部長	浜島 勝義
		社会教育課長	満石 知
		社会教育課参事	福ヶ迫 忠
		管理係主幹兼係長	海江田 勝博
		社会教育係主幹兼係長	内村 喜代志
		文化担当主幹	中摩 浩太郎
		文化係係長	鎌田 洋昭
		文化係主査	西牟田 淳
		文化係技師	恵島 瑛子

整理作業員 清 秀子、竹下珠代、鎌田真由美、境 由希

4. 本書に掲載した遺構・遺物の実測図は、既刊の報告書掲載図原図を再トレース、または、再編集しトレースした。未実測遺物については、新たに実測・製図を行った。
5. 大正7・8年の発掘調査出土遺物の実測・撮影に関しては、京都大学文学部考古学研究室・京都大学総合研究博物館の協力の下、指宿市教育委員会が実施し、妹尾裕介氏、小泉翔太氏の協力を得た。また、指宿式土器の一部については、鹿児島県立埋蔵文化財センター2007「上水流遺跡Ⅰ」『鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(111)』に掲載された図面原図を、同センターの協力を得て、一部編集し掲載した。
6. 本書の編集、図面作成、執筆は、渡部徹也・鎌田洋昭・恵島瑛子の協力を得て、中摩浩太郎が行った。また、指宿市考古博物館所蔵の橋牟礼川遺跡出土遺物の実測・撮影に当たっては、松崎大嗣氏の協力を得た。貝種鑑定については、中島耕作氏の協力を得た。
7. 「第8章 各学問領域からみた橋牟礼川遺跡」において、次の先生方から玉稿を賜った。  
永山修一氏(ラ・サール学園)、成尾英仁氏(武岡台高校)、杉山真二氏(古環境研究所)
8. 図中に用いられている座標値は、国土座標系第Ⅱ系に準ずる。
9. 本文中の層位名称は『橋牟礼川遺跡Ⅲ』(指宿市教育委員会1992)に準じているが、大正7・8年調査地点に関して記述した第2章に関しては、京都帝国大学考古学研究所報告第6冊の記述に準拠し、図版1の調査風景等写真はこれから転載した。また、記述の都合上既刊の報告書で『橋牟礼川遺跡Ⅲ』と異なる層位名称を引用する場合は、「」書きした。
10. 本文中の調査区表記で「国指定史跡」と表記したのは大正13年の指定範囲である(第27図参照)。
11. 掲載した遺構等の番号は、調査時点のものを用いているが、編集の都合上新たに付したものもある。
12. 遺物観察表、遺物実測図、遺構図の表記凡例は、『橋牟礼川遺跡Ⅲ』(1992、指宿市教育委員会)と『水迫遺跡Ⅰ』(2000、指宿市教育委員会)に準ずる。観察表の特殊な表記については下記のとおりである。  
土器の混和材【カ:角閃石、セ:石英、ウ:雲母、金:金雲母、白:白色粒、黒:黒色粒、赤:赤色粒、褐:褐色粒】  
調整【内:内面、外:外面、口唇:口唇部、突:突帯部、底:底面、脚内:脚台内面、脚端:脚台接地面】  
色調【内:内面、外:外面、肉:器肉】※遺物のマンセル値は、土色計SCR-1を使用し測色した。
13. 本書の作成にあたり、次の方々にご協力を賜った。記して感謝申し上げます。(敬称略・順不同)  
吉井 秀夫(京都大学考古学研究室)、村上由美子(京都大学総合研究博物館)、妹尾裕介(同左)、永山修一(ラ・サール学園)、成尾英仁(武岡台高校)、杉山真二(古環境研究所)、本田道輝(元鹿児島大学)、中村耕治(元鹿児島県立埋蔵文化財センター)、前迫亮一(鹿児島県立埋蔵文化財センター)、関明恵(同左)、黒川忠広(鹿児島県文化財課)、小泉翔太(京都大学大学院)、松崎大嗣(鹿児島大学大学院)



# 目次

第1章 遺跡の立地と環境	1	③ 須恵器	98
第2章 学史－大正時代の調査－	3	④ 石製錘飾品	98
第1節 遺跡発見の経緯	3	⑤ 石器	99
第2節 大正7、8年の発掘調査	4	⑥ 軽石加工品	99
第1項 調査の概要	4	⑦ 鉄器	100
① 遺跡の地形	4	⑧ 青銅製品	100
② 各調査地点の出土遺物と層序の概要	4	第3項 古墳時代の調査のまとめ	100
第2項 遺物	6	① 居住域と土器集中廃棄所	100
① 下層出土土器	6	② 古墳時代の住居プラン	114
② 上層出土土器	19	③ 生業 漁労と農耕	115
③ 上層出土石器	36	④ 威信財と祭祀、墓域	115
第3項 遺構	37	⑤ 7層青コラ火山灰の年代観について	116
① 貝塚	37	第4節 奈良・平安時代	118
② 土器集中廃棄所	37	第1項 遺構	118
第4項 調査成果	37	① 建物遺構	118
① 縄文土器と弥生土器の層位学的上下関係の実証	37	② 杭列	122
② 火山災害遺跡－文献記録の引用－	38	③ 道跡	128
③ 大正時代出土の指宿式土器について	38	④ 架橋痕跡	128
第3章 橋牟川遺跡の調査履歴	49	⑤ 土坑墓	128
第4章 橋牟礼川遺跡の層序	52	⑥ 土坑	129
第1節 橋牟礼川遺跡標準層位と各層序の概要	52	⑦ 馬骨埋納土坑	129
第5章 昭和・平成における橋牟礼川遺跡の調査成果	55	⑧ 牛骨廃棄遺構	129
第1節 縄文時代	55	⑨ 貝塚	131
第1項 遺構	55	第2項 遺物	132
① ピット群	55	① 須恵器	132
第2項 遺物	55	② 土師器	135
第3項 縄文時代の調査のまとめ	58	③ 軽石加工品	137
第2節 弥生時代	59	④ 鉄器	137
第1項 遺構	59	⑤ 青銅製帯金具	139
① ピット群	59	⑥ K1トレンチ2号竪穴建物出土土器	139
② 大型土坑	59	第3項 奈良～平安時代の調査のまとめ	141
③ 土坑	59	① 公的施設の存在	141
④ 土器集中廃棄所	59	② 橋牟礼川遺跡6層における遺構等の変遷 文献との比較	142
第2項 遺物	60	第5節 874年	144
第3項 弥生時代の調査のまとめ	60	第1項 遺構	144
第3節 古墳時代	69	① 建物遺構	144
第1項 遺構	69	② 道跡	149
① 住居遺構	69	③ 畠跡	152
② 大溝遺構	74	④ 埋没河川	157
③ 耕作地	81	⑤ 貝塚	158
④ 土器集中廃棄所	83	⑥ 土坑	160
⑤ 土坑墓	90	第2項 遺物	160
⑥ 土器埋納遺構を伴う祭祀遺構	91	第3項 874年の調査のまとめ	162
⑦ 貝塚	93	① 874年の集落状況について	162
⑧ 7層青コラ火山灰に被覆された土器	94	② 874年畠跡について	163
第2項 遺物	95	③ 5層紫コラ火山灰層の堆積年代の特定	164
① 土器	95	第6章 橋牟礼川遺跡に関連する周辺の遺跡	166
② 土製品	98	第1節 南丹波遺跡(弥生時代終末～古墳時代初頭集落)	166
		第2節 敷領遺跡(874年水田遺構・建物遺構、奈良・平安時代建物遺構群、弥次ヶ湯古墳)	166



第3節	南摺ヶ浜遺跡(弥生～古墳時代墓域)	173
第7章	成果のまとめ	177
第1節	縄文土器と弥生土器の新旧関係の実証	177
第2節	古墳時代の中核的集落の存在	177
第3節	古代における公的施設の存在	178
第4節	年代の特定できる火山噴火により埋没した火山災害遺跡	179
第8章	各学問領域からみた橋牟礼川遺跡	181
第1節	文献・出土文字資料から見る薩摩国揖宿郡と開聞岳噴火～橋牟礼川遺跡を理解するために～ (永山修一)	181
第2節	橋牟礼川遺跡における開聞岳の噴出物について (成尾英仁)	186
第3節	植物珪酸体分析からみた橋牟礼川遺跡の植生環境と栽培植物 (杉山真二)	192
橋牟礼川遺跡関係主要文献		215
報告書抄録		216

## 図版目次

第1図	橋牟礼川遺跡位置図(S=1/100,000)	1
第2図	橋牟礼川遺跡位置図(S=1/5,000)	2
第3図	山崎五十磨による橋牟礼川遺跡層位断面図と出土遺物	3
第4図	大正7・8年調査地点図	5
第5図	大正7・8年調査地点図と現在の橋牟礼川	6
第6図	京大報告の層位略図と通論考古学掲載の層位略図	6
第7図	下層出土土器実測図1(指宿式土器①)(S=1/3)	10
第8図	下層出土土器実測図2(指宿式土器②)(S=1/3)	11
第9図	下層出土土器実測図3(指宿式土器③)(S=1/3)	12
第10図	下層出土土器実測図4(指宿式土器④)(S=1/3)	13
第11図	下層出土土器実測図5(指宿式土器⑤)(S=1/3)	14
第12図	下層出土土器実測図6(指宿式土器⑥)(S=1/3)	15
第13図	下層出土土器実測図7(S=1/3)	16
第14図	下層出土土器実測図8(S=1/3)	17
第15図	下層出土土器実測図9(S=1/3)	18
第16図	上層出土土器実測図1(S=1/3)	22
第17図	上層出土土器実測図2(S=1/3)	23
第18図	上層出土土器実測図3(S=1/3)	24
第19図	上層出土土器実測図4(S=1/3)	25
第20図	上層出土土器実測図5(S=1/3)	26
第21図	上層出土土器実測図6(S=1/3)	27
第22図	上層出土土器実測図7(S=1/3)	28
第23図	上層出土土器実測図8(S=1/3)	29
第24図	上層出土土器実測図9(S=1/3)	30
第25図	上層出土土器実測図1(S=1/3)	31
第26図	上層出土土器実測図2(S=1/3)	32
第27図	橋牟礼川遺跡調査区配置図	51
第28図	橋牟礼川遺跡層位模式柱状図	52
第29図	Ⅸ区縄文時代遺構配置図(平成4・5・6年度博物館調査区)(S=1/160)	56
第30図	縄文時代遺物実測図(S=1/3)	57

第31図	Ⅸ区弥生時代遺構配置図(平成4・5・6年度博物館調査区)(S=1/200)	61・62
第32図	Ⅸ区弥生時代大型土坑1(平成4・5・6年度博物館調査区)(S=1/40)	63
第33図	Ⅸ区弥生時代土器集中廃棄所A(平成4・5・6年度)(S=1/40)	64
第34図	弥生時代遺物実測図1(S=1/4)	65
第35図	弥生時代遺物実測図2(S=1/4)	66
第36図	弥生時代遺物実測図3(小児棺:S=1/4、石器:S=1/2)	67
第37図	I区古墳時代遺構配置図(平成2年度都市計画事業に伴う幹線道路調査区)(S=1/300)	70
第38図	V区古墳時代遺構配置図(昭和63年度都市計画事業に伴う幹線道路調査区)(S=1/160)	71
第39図	V区49号竪穴住居張出状付帯遺構と遺物出土状況(S=1/20)	72
第40図	Ⅵ区古墳時代遺構配置図(昭和62年度都市計画事業に伴う幹線道路調査区)(S=150)	73
第41図	Ⅵ区土器炉を有する7号竪穴住居(昭和62年度都市計画事業に伴う幹線道路調査区)(S=1/50)	75
第42図	古墳時代竪穴住居図(平成2年度Ⅹ区・平成3年度ⅩⅢ区1トレンチ)(S=1/100)	76
第43図	古墳時代竪穴住居図(平成2年度Ⅹ区、平成4年度1・3・5トレンチ、昭和61年度10トレンチ)(S=1/200)	77
第44図	昭和61年度国指定史跡確認調査8・9トレンチ古墳時代大溝遺構検出状況(S=1/60)	78
第45図	Ⅷ区古墳時代大溝遺構・土器集中廃棄所④(平成3年度都市計画事業に伴う幹線道路調査区)(S=1/60)	79
第46図	Ⅸ区古墳時代遺構配置図(平成4・5・6年度博物館調査区)(S=1/300)	80
第47図	Ⅸ区古墳時代馬鍬痕跡(平成4・5・6年度博物館調査区)(S=1/100)	82
第48図	ⅩⅢ区4トレンチ古墳時代馬骨出土状況(平成3年度国道拡幅調査区)(S=1/40)	84
第49図	I区古墳時代土器集中廃棄所①(S=1/40)	85
第50図	I区古墳時代土器集中廃棄所②(S=1/30)	87・88
第51図	Ⅳ区古墳時代遺構配置図(土器集中廃棄所③)(昭和61年度都市計画事業に伴う幹線道路調査区、平成2・3年度下水道⑧トレンチ)(S=1/200)	89
第52図	古墳時代土器埋納遺構を伴う祭祀遺構(平成7年度1トレンチ)(S=1/20)	92
第53図	昭和57年度3トレンチ古墳時代貝塚断面(S=1/60)	93
第54図	7層青コラ火山灰に被覆された出土遺物(S=1/20)	95
第55図	古墳時代遺物実測図1(土器①)(S=1/4)	101
第56図	古墳時代遺物実測図2(土器②)(S=1/4)	102
第57図	古墳時代遺物実測図3(土器③)(S=1/4)	103
第58図	古墳時代遺物実測図4(土器④)(S=1/4)	104
第59図	古墳時代遺物実測図5(土器⑤)(S=1/4)	105
第60図	古墳時代遺物実測図6(土器⑥)(S=1/4)	106
第61図	古墳時代遺物実測図7(土器⑦)(S=1/4)	107
第62図	古墳時代遺物実測図8(土器⑧・土製品)(S=1/4)	108
第63図	古墳時代遺物実測図9(須恵器S=1/3・鍮製品S=1/2・3-102はS=1/1)	109
第64図	古墳時代遺物実測図10(石器・石製品)(石鏃S=2/3、他S=1/3)	110

第65図	古墳時代遺物実測図11(軽石加工品) (S=1/2)	111	第95図	874年に帰属する遺構配置図	158
第66図	古墳時代遺物実測図12(鉄器) (S=2/3)	112	第96図	Ⅱ区・Ⅲ区 河川図(昭和61年度都市計画事業に伴う幹線道路調査区) (S=1/150)	159
第67図	古墳時代遺物実測図13(青銅製品) (S=1/1)	113	第97図	874年貝塚(昭和57年度史跡整備事業に伴う確認調査区1トレンチ) (S=1/20)	161
第68図	古墳時代大溝遺構出土遺物実測図(S=1/4)	113	第98図	874年出土遺物実測図(S=1/3)	162
第69図	平成4・5年度K1・K2トレンチ奈良・平安時代遺構配置図(S=1/150)	119	第99図	南丹波遺跡古墳時代竪穴住居検出状況(S=1/300)	167
第70図	K1トレンチ 奈良・平安時代2号竪穴建物・鍛冶炉と考えられる中央炉(平成4年度国指定史跡確認調査) (S=1/50)	120	第100図	敷領遺跡874年土地利用想定図	168
第71図	K2トレンチ 奈良・平安時代4号竪穴建物・鍛冶炉(平成5年度国指定史跡確認調査) (S=1/50)	121	第101図	敷領遺跡874年水田図(S=1/75)	169
第72図	Ⅵ区奈良・平安時代遺構配置図(昭和62年度都市計画事業に伴う幹線道路調査区) (S=1/200)	123	第102図	敷領遺跡奈良・平安時代遺構配置図(平成8年度) (S=1/125)	171・172
第73図	Ⅵ区奈良・平安時代8号掘立柱建物(昭和62年度都市計画事業に伴う幹線道路調査区) (S=1/40)	124	第103図	敷領遺跡奈良・平安時代出土遺物(1~3:S=1/2、4:S=1/4)	173
第74図	Ⅸ区奈良・平安時代遺構配置図(平成4・5・6年度博物館調査区) (S=1/150)	125	第104図	弥次ヶ湯古墳平面図(S=1/100)	174
第75図	青コラ上面杭列平面図断面図(Ⅸ区・平成7年度2トレンチ) (S=1/40)	126	第105図	南摺ヶ浜遺跡土坑墓(S=1/30、遺物S=1/3)	175
第76図	Ⅰ区奈良・平安時代遺構配置図(平成2年度都市計画事業に伴う幹線道路調査区) (S=1/300)	127			
第77図	昭和61年度10トレンチ土坑配置図(S=1/75)	130			
第78図	Ⅷ区奈良・平安時代遺構配置図(平成3年度都市計画事業に伴う幹線道路調査区) (S=1/200)	131			
第79図	奈良・平安時代遺物実測図1(須恵器) (S=1/4)	133			
第80図	奈良・平安時代遺物実測図2(土師器) (S=1/4)	134			
第81図	奈良・平安時代遺物実測図3(軽石加工品)(4-44~48:S=1/4、4-50~51:S=1/1)	136			
第82図	奈良・平安時代遺物実測図4(鉄器) (S=1/2)	138			
第83図	奈良・平安時代遺物実測図5(青銅製帯金具) (S=1/1)	139			
第84図	K1トレンチ奈良・平安時代2号竪穴建物出土遺物(S=1/4)	140			
第85図	Ⅴ区874年遺構配置図(昭和63年度都市計画事業に伴う幹線道路調査区) (S=1/200)	145			
第86図	Ⅴ区874年倒壊建物(昭和63年度都市計画事業に伴う幹線道路調査区) (S=1/40)	146			
第87図	Ⅳ区874年埋没建物(昭和63年度住宅建設調査に伴う調査区) (S=1/50)	147			
第88図	Ⅷ区874年遺構配置図(平成3年度都市計画事業に伴う幹線道路調査区) (S=1/300)	148			
第89図	Ⅷ区874年高床建物(S=1/50)	149			
第90図	Ⅸ区874年遺構配置図(平成4・5・6年度博物館調査区) (S=1/300)	150			
第91図	下水道区④トレンチ大型の道跡(平成2・3年度) (S=1/60)	151			
第92図	Ⅰ区874年遺構配置図(平成2年度都市計画事業に伴う幹線道路調査区) (S=1/300)	153			
第93図	Ⅺ区874年遺構配置図(平成2年度都市計画事業に伴う支線調査区) (S=1/100)	156			
第94図	874年畠検出状況(平成4年度2・4トレンチ、平成10年度) (S=1/50)	157			

## 表目次

表1	下層出土指宿式土器個体別属性分析表	8
表2	大正時代出土遺物観察表①~④	33~36
表3	橋牟礼川遺跡調査履歴1・2	49~50

## 図版目次

図版1	41
図版2	42
図版3	43
図版4	44
図版5	45
図版6	46
図版7	47
図版8	48
図版9	197
図版10	198
図版11	199
図版12	200
図版13	201
図版14	202
図版15	203
図版16	204
図版17	205
図版18	206
図版19	207
図版20	208
図版21	209
図版22	210
図版23	211
図版24	212
図版25	203
図版26	214



# 第1章 遺跡の立地と環境

指宿市は、薩摩半島の南端に位置している。地形的には、山地、台地、平野、湖沼と大きく4つに分類できる。これらの地形は、約10万5千年前から約11万年前に噴火した阿多火山の噴火活動に伴うカルデラ内にほぼ収まるところである。約2万8千年前から約3万年前には、始良カルデラの噴出物である入戸火砕流が現在の台地部に厚く堆積した。そして、その後に新期指宿火山群(池田火山)が活発な火山活動を行った。中でも、約5,700年前の池田火山の活動により、九州最大のカルデラ湖である池田湖が形成された。その噴出物は指宿市全域の直接的な地形形成要因となっている。さらに、トロコニーデ型の開聞岳は、約4,700年前から約3,700年前に活動を開始した。そのうち、旧指宿市域では主に4回分の開聞岳噴火火山灰層が確認できる。有史時代の噴火についてはいくつかの史料に記録されており、西暦874年(以下「874年」と表記)と885年の噴火とそれに伴う災害の状況等が『日本三代実録』に記録されている。特に、874年の開聞岳噴火に伴う固結火山灰層は広く市域を覆っている。

橋牟礼川遺跡は、指宿市街地に所在し、指宿市街地に並行し南北に走る山塊の山裾から海岸へ傾斜する海拔7m～20m程度の緩やかな火山性扇状地上に形成されている。

扇状地地形上には、山裾を水源とする複数の河川が海岸に向かい東流するが、いずれも大地を深く削り、深さ数m～10数mに達するV字状の谷を形成している。大正13年に国史跡に指定された範囲の中央にも、このようにして形成された橋牟礼川が流れるが、V字状谷の側面には地層が露出しており、古墳時代の成川式土器や弥生土器、そしてまれに縄文土器が表採される。



第1図 橋牟礼川遺跡位置図(S=1/100,000)



(文献)

指宿市教育委員会 1992 『橋牟礼川遺跡Ⅲ』 指宿市埋蔵文化財調査報告書(10)

地質調査総合センター 2005 『開聞岳地域の地質』

指宿市考古博物館 2014 指宿まるごと博物館Ⅵ企画展図録『火山の恵みと黒潮交流』



第2図 橋牟礼川遺跡位置図(S≒1/5,000)



## 第2章 学史－大正時代の調査－

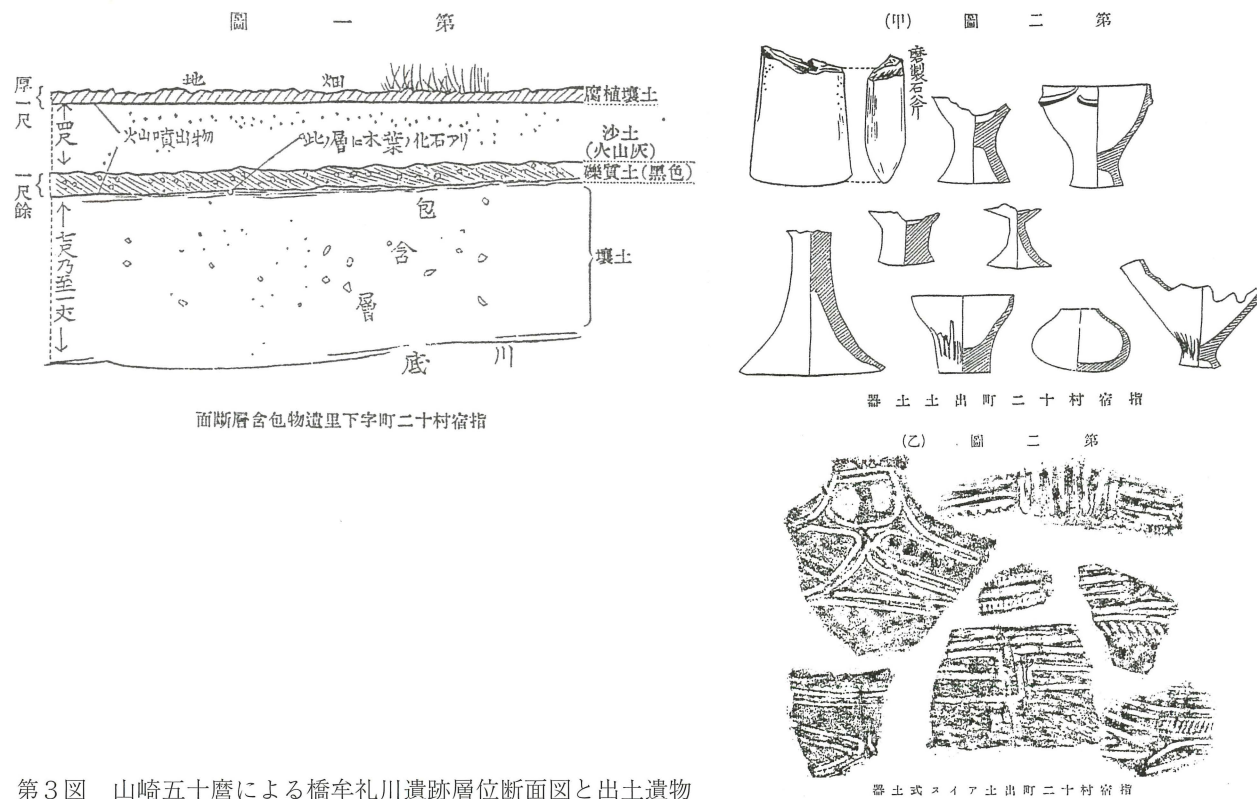
### 第1節 遺跡発見の経緯

橋牟礼川遺跡の発見の経緯に関しては、『考古学雑誌』第八卷第七号(大正7年3月5日)に掲載された、喜田貞吉の「九州旅行談」と、山崎五十磨の「アイヌ式土器弥生式土器及石器等を包含する遺跡」とに記されている。

喜田貞吉は「九州旅行談」の中で、「昨年六月(大正6年6月)志布志中学に行った時、同校に所蔵する遺物を見せて貰った」が、「其の中にアイヌ系統のものが少なからずあるのを見」た。その中で、「薩摩の揖宿郡摺ヶ濱温泉の付近で同一遺跡から拾ったという弥生式アイヌ式両種の土器を見」た喜田は、「是は如何にも奇體である」と考え、「鹿児島市の山崎五十磨君に調査を依頼した所」、山崎によって「海岸の丘陵の間を、二三間許りの幅の川が流れて、深く土層を穿ち、其の兩岸に遺物が層を成してあらわれ、深き處は一丈にも達して、その内から齋瓮、弥生式やアイヌ式の土器が混在して発掘せられた」という報告を得ている。

喜田は実際に現地に出向き遺跡を実見し、その内容を「摺ヶ濱の遺跡では最下層が礫土で其の上に火山灰や砂交りの土層があって、所謂遺物は此の層中に包含されて居るのである。出る物は弥生式が多数だが、たしかにアイヌ式の意匠や模様及び形式を有して居る土器が少なくない。又弥生式の中には餘程進んだ、磨きをかけて更に朱を塗った高杯が幾つもある。又磨製石斧も確かに層の中間から山崎君が拾って居る。自分は下層よりアイヌ式土器を得、地表に近い所よりは齋瓮破片が出ることを確かめた」と述べている。

さて、喜田から調査依頼を受けた山崎五十磨の報告だが、「昨夏喜田博士同行の遺物を調査せられし折右指宿村出土の遺物を見られ、同月来鹿の折其の話をせられ、余に該遺跡の所在及両式の混出する事実の調査方を托せられしに依り、昨年九月同地に向ひ該遺跡の所在を前記丈六に捜せしも見当らず、漸く同村下里に発見し調査したるに混出の事実を確め得る次第」とある。遺跡の詳細については、「地勢、薩摩国南端大隅国と相對し、鹿児島湾口を扼したる処にして、鰻池(火口周辺一里余)の山麓にあって台地を成せる畑地を鰻池付近の溪谷より雨時氾濫する潤川にして、其台地を穿ち次第に決潰降下せる兩岸の断層面の最下層に整然としたる地層に長さ二町に瓦り七尺乃至一丈に餘る厚さに豊富な弥生式アイヌ式其他の遺物(木ノ葉の化石等もあり)を露出せり。而も其両式の所在は全く混出して上下の區別なし」とした。そして、「思うに右の如き雜然たる遺物の包含及其整然としたる地層に依つて其年代民俗關係移住の方向等を研究するに有力なる遺跡と考えるものなり」と所見を述べている。



第3図 山崎五十磨による橋牟礼川遺跡層位断面図と出土遺物

山崎が掲載した層位断面図(第3図)では、表土が1尺(約0.3m)の腐食土壌、2層目が4尺(約1.2m)の砂土(火山灰)、3層目が1尺余り(約0.3m)の「火山噴出物」(黒色の礫質土)、4層目に「木ノ葉ノ化石アリ」と記載されている。5層目は7尺(約2.1m)ないし1丈(約3m)の土壌であり包含層とし、6層目は川底と記載されている。

出土遺物は第3図に転載したものである。原図は甲と乙で分類しているが、甲の内容は成川式土器の笹貫式段階とみられる甕形土器、鉢形土器片、高杯脚部片、埴形土器、磨製石斧であり、乙の「アイヌ式土器」は指宿式土器のほか、市来式土器とみられる土器片も含まれている。

遺跡の発見経緯に関しては、「同包含地の発見は、一昨年指宿村出身の県下中学校生徒西牟田某同村字丈六付近にて拾いたる土器を該中学校に持参したるもの」と山崎の報告に短く紹介されている。

喜田と山崎の記載からは、橋牟礼川遺跡の発見は大正5年ということになる。山崎の文中に登場する「西牟田某」は、指宿村出身の志布志中学校生徒、西牟田盛健であるが、西牟田は丈六付近で採集した縄文土器と弥生土器を志布志中学校に持参した。喜田はこのことを、当時志布志中学校の教員である瀬之口伝九郎から知らされたものとみられる。

橋牟礼川遺跡における縄文土器と弥生土器の出土に関して喜田は、「此の埋没状態から推して弥生式土器を使用したのではないかと又此處からアイヌ式土器(黒褐色、茶褐色、時には弥生式のそれと同一の色を呈するものがある)の混って出るにつきて考ふれば、どうしても両種の民族が雑居したか、或いは同時に住んで居て物品の交換が行われたことのある地と思われるのである」と述べており、土器の種類の相違を民族の相違と捉える立場にあったことを示している。さらに喜田は、「其の地に発掘される石器時代の弥生式土器は、当然所謂日本人のものではなく、恐らく当時隼人の祖先が使用したものであると云いたい」とも述べ、「弥生土器」の使用者である「隼人」の祖先に関しても日本人とは異なる民族と考えていたことがわかる。

喜田と山崎による橋牟礼川遺跡に関する報告の中には、それぞれ「此の所は京大の濱田教授が実地研究せられた」、「京大教授濱田耕作氏による實地精査中なれば面白き問題として追って報告せらるべし」と、濱田耕作による調査が実施されていることが述べられている。

(文献)

喜田 貞吉 1917 「九州旅行談」『考古学雑誌』第八卷第七号

山崎五十磨 1917 「アイヌ式土器弥生式土器及石器等を包含する遺跡」『考古学雑誌』第八卷第七号

## 第2節 大正7、8年の発掘調査

濱田耕作による橋牟礼川遺跡の調査は、大正7(1917)年1月と大正8(1918)年4月に実施された。調査成果は京都帝國大学考古学研究報告第6冊に所収されている(以下「京大報告」と記載する)。以下の調査概要と成果を引用し記す。

### 第1項 調査の概要

#### ① 遺跡の地形(第4図)

遺跡は、「鰻池死火山の山麓の臺地に」多数見られる海に向かう「細い溪谷」に位置し、「何れも多量の降雨のある場合の外は、水は灰層中に吸収せられて乾燥し、溪谷は同時に狭い歩道の役に立ってゐる。此の下里の土器包含層は即ち此の溪谷の一つの断崖において発見せられ、此の長い断崖は自然の発掘縦穴を形成した」もので、「此の下里の溪谷は長さ數町に亘つてゐる(輝石安山岩の界から沖積層の低地に至る)。最も狭い處は幅一二間しか無いが、段々崩壊して六七間の廣さを有してゐる地點もある。高さは其の兩端の最も深い處で二十尺位(約6m)、段々低くなつてゐるが、私達の調査した土器包含層は此の溪谷中、幅の最も廣くなつてゐる地點で、高さ川底より約十五尺(約4.54m)を有してゐる所」である。

#### ② 各調査地点の出土遺物と層序の概要

濱田は大正7年、8年において「此の地点を中心として、溪谷の上下にわたつて調査」しているが、調査地点はA地点からE地点の5地点である(第5図上)が、京大報告にはG地点の記述もある。この地点は位置不明である。

当時の調査地点を現在の地図に落とし込んだのが第5図の下図である。各調査地点は現在の国指定史跡の範囲内にほぼ入っている。



遺跡の層序については、京大報告ではB地点の状況を代表させて記載している(第6図 京大報告掲載の層位略図)。B地点は、溪谷の幅が約7間(1間=6尺、約12.7m)と広がった地点であり、地表面から川底まで約15尺(約4.45m)である。層序は、以下のように詳細が記されている。なお、以下の層名は表記の便宜上付したものである。

1層:黒褐色火山灰層。地表から1尺5寸程(約45cm)の厚さ。有機物を多少含んだ灰層。遺物なし。

2層:黒色泥流盤。厚さ約1尺(約30cm)。下部に植物の葉の化石。遺物なし。

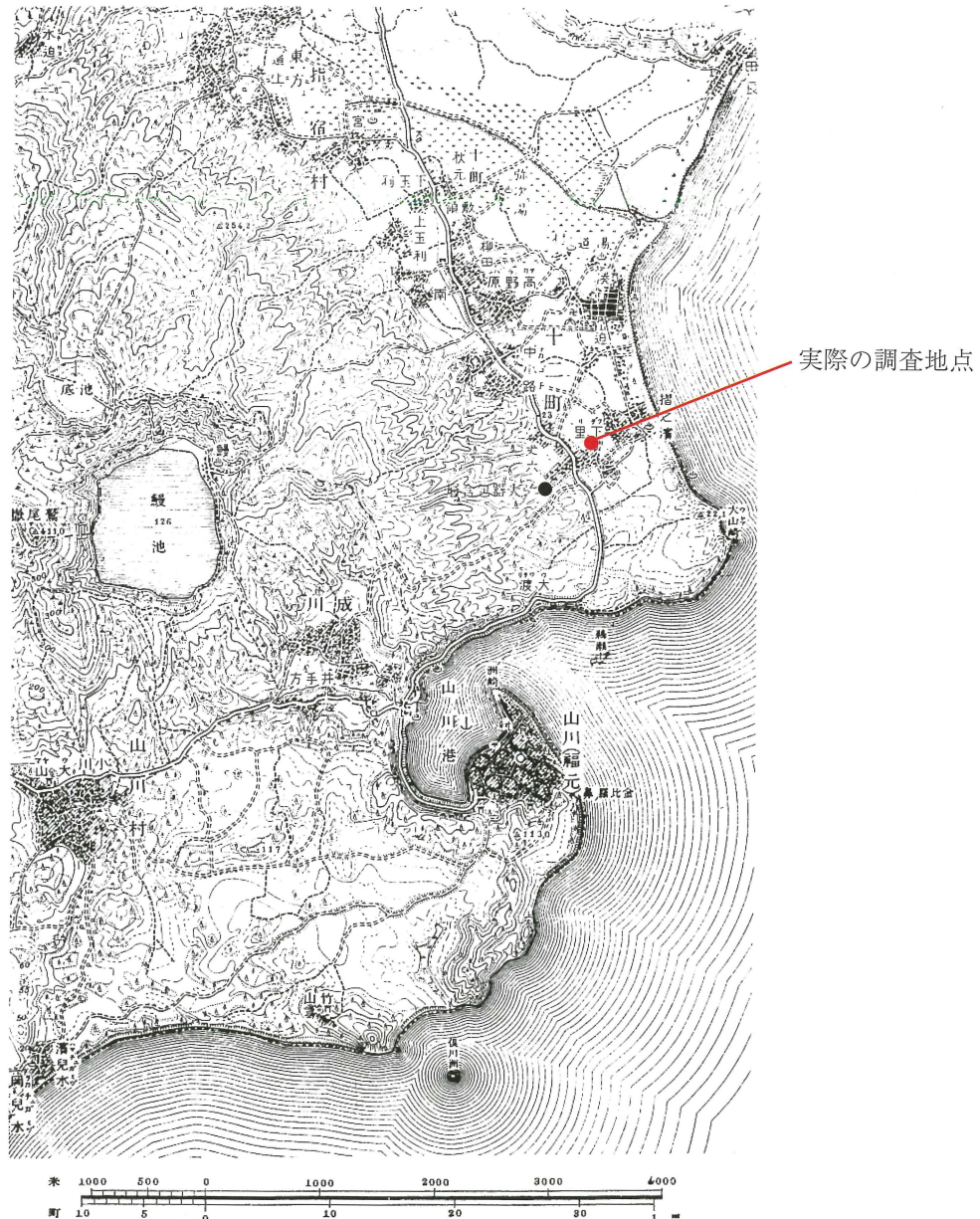
3層:黒褐色火山灰層。厚さ約3尺(約90cm)。土器が密集し出土。弥生式土器の系統に属する土器。土器が相重なり集中した箇所もある。祝部土器の破片が少量混在する。

4層:黒褐色火山灰層。厚さ約4尺(約1.2m)。この下位で少量の曲線的文様の貝塚式土器(アイヌ式土器)が出土。

5層:稍黄色火山灰層。

C地点は、B地点から上流約70間(約127m)の、溪谷の幅が著しく狭くなった対岸に位置し、地表下6尺(約1.8m)ないし9尺(約2.7m)で、曲線文のある土器を採集。層位的にはB地点の下層土器発見層に相当する。上層では土器は発見されていない。

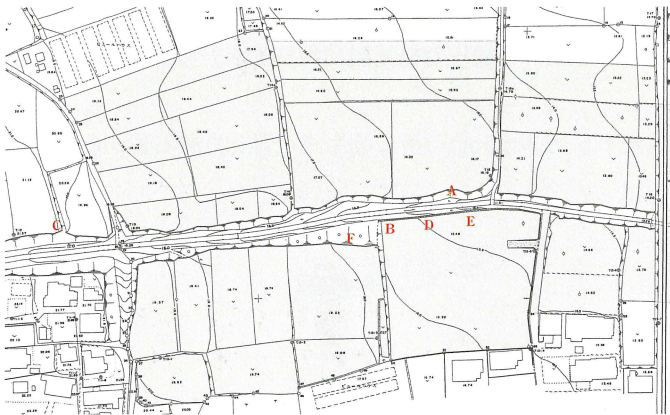
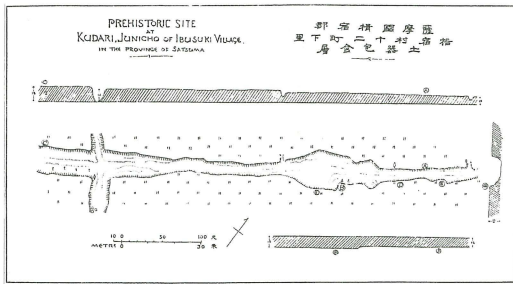
E地点は、B地点の下流約30間(約54m)に位置する。地表下5尺(約1.5m)の所で弥生式土器と打製石器が出土。下層には土器は出土していない。



第4図 大正7・8年調査地点図



A地点は、E地点の対岸に位置する。上層には土器が出土していないが、地表下約10尺(約3m)の辺りでやや多量の貝塚式曲線土器が出土している。層序深度はB地点の下層土器出土位置に相当するとされる。



第5図 大正7・8年調査地点図と現在の橋牟礼川

G地点は河川北岸に位置する。地表下約3尺(約90cm)の泥流磬(2層)下に貝殻の集積(貝塚)が検出されている。土器等は共伴していない。貝塚については、層位から上層土器と同時代の遺構であると記されている。

## 第2項 遺物

### ① 下層出土土器(第7図～第15図)

#### i 下層出土土器の概要

大正7・8年の発掘調査における出土遺物で、下層で出土した土器には、縄文土器99点、弥生前期の土器1点がある。縄文土器の構成は、縄文中期の阿高式土器が1点、後期前葉の指宿式土器が65点、後期中葉の市来式・松山式土器が11点、その他22点であり、弥生土器は弥生前期の高橋式土器片であった。

出土遺物の大多数は縄文後期前葉に帰属するが、縄文中期と弥生前期の遺物が含まれており、調査時点で複数の遺物包含層を掘削した結果であるとみられる。

ここでは、京都大学総合研究博物館が所蔵する下層出土土器の全点に関して報告する。遺物については指宿式土器とその他の土器とを分けて掲載する。なお、掲載遺物数は、現在までの整理において接合が行われている等の理由で、京大報告掲載点数とは異なっている。

#### ii 指宿式土器

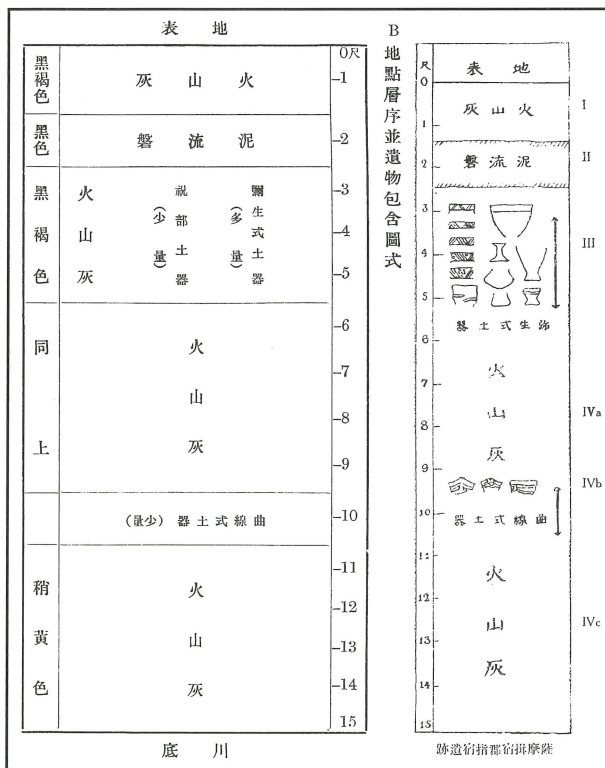
##### ・指宿式土器の分類

指宿式土器と考えられる土器は65点ある。大半はA地点出土である。指宿式土器の型式設定は、昭和18年に寺師見國氏によって行われた。寺師は、指宿式土器が「揖宿郡指宿町下里遺蹟の下層より主として出土する形式」としていることから、橋牟礼川遺跡は「指宿式土器」の標識遺跡であり、今回掲載する大正時代出土の縄文土器が型式設定の基準資料である。出土遺物を掲載するに当たり、京大報告の掲載順ではなく、土器型式毎に掲載し、指宿式土器と考えられる土器群に関しては、器種や文様モチーフ等によって分類した。指宿式土器の分類に関しては以下のように行った。

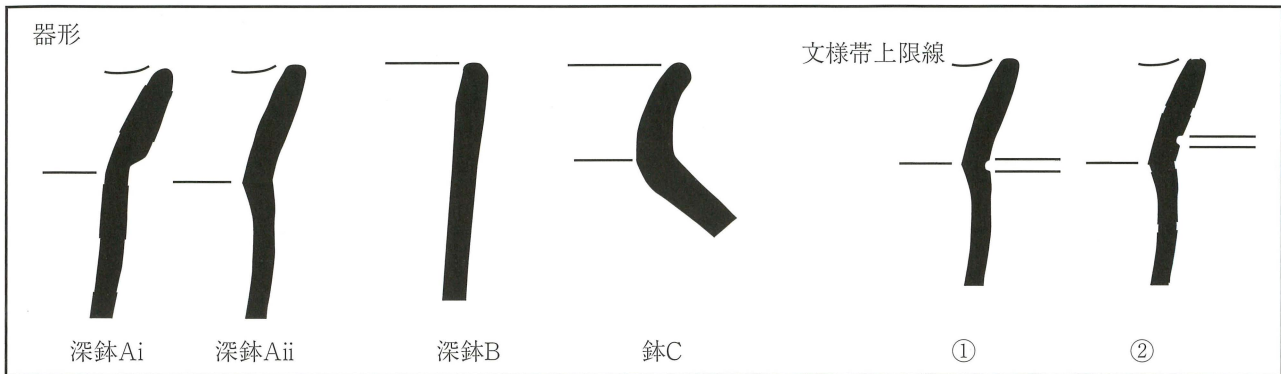
土器の分類のために、「器形」と「文様带上限線」、「文様モチーフ」の3つの属性をとりあげた。

##### (器形)

深鉢形土器は、口縁下部で屈曲し外反する深鉢Aと、口縁部が直立する深鉢B、そして、胴部が円球状の器形を呈し、口縁が内湾あるいは内湾後に直立し鉢形の器形になる鉢C



第6図 京大報告の層位略図と通論考古学掲載の層位略図



がある。

また、深鉢Aは口縁部を肥厚させるもの i と口縁部を肥厚させないもの ii があるが、深鉢B・鉢Cでは口縁部を肥厚させるものはない。

(文様带上限線)

深鉢Aには屈曲部に文様帯の上限となる横方向の沈線を施すもの①と、これがないか、あるいは屈曲部より上部に文様を施し、屈曲部と文様帯とが無関係のもの②がある。

(文様モチーフ)

文様モチーフに関しては、二平行沈線により曲線の文を施すもの「あ」と、二平行沈線により平行入り組み文あるいは鉤状文(従来「靴形文」と言われているもの)を施すもの「い」、そして、いずれにも分類できないもの「う」がある。

なお、「う」に含めたものには、破片資料であるため二平行沈線文の一部しか見えず、文様モチーフの全体形が不明のもの、二平行沈線の端部が丸く収束する単純な文様等が主なものである。

#### 深鉢A (第7図～第10図)

屈曲口縁の深鉢Aに属するのは、T 1～T 37である。このうち、T 1・T 2は口縁部を肥厚させる i である。T 3～T 37は肥厚させない ii である。

屈曲部に文様帯の上限となる横方向の沈線を施す①はT 1～T 28であり、屈曲部と文様帯が無関係の②はT 29～T 37である。

文様モチーフでは、T 1～T 8は曲線の文様を施す「あ」であり、T 9～T 16は二平行沈線により平行入り組み文あるいは鉤状文を施すもの「い」である。T 17～T 37については、T 17・T 19・T 20・T 21・T 31・T 32は二平行沈線、T 18・T 25は二平行沈線と組文の組み合わせ、T 23・T 24は二平行沈線の端部が収束する文様、他が不明であり、いずれも「あ」「い」に帰属しない「う」となる。

なお、T 1・T 3・T 4・T 9・T 16・T 17・T 18・T 21・T 22・T 24・T 25・T 30・T 31・T 32は山形口縁となり、T 2・T 5・T 6・T 7・T 8・T 10・T 11・T 12・T 13・T 14・T 15・T 19・T 20・T 23・T 26・T 27・T 28は平口縁となる。山形口縁直下の文様に関しては、T 4・T 21・T 30のように他の部分と文様が変わり、装飾的になるものと、そうでないものがある。

T 22は口唇部に列点文を施す。

#### 深鉢B (第10図・第11図)

直立口縁の深鉢BはT 38～T 47である。このうち、T 39・T 45・T 46は文様モチーフが曲線の文様を施す「あ」であり、T 38・T 41は二平行沈線により平行入り組み文あるいは鉤状文を施すもの「い」である。また、T 40・T 42・T 43は二平行沈線文、T 44は二平行沈線の端部が収束する文様、T 47はいずれにも属さないため「う」となる。

T 38は復元口径40.2cmと大型の深鉢である。T 38・39・40・41・45はC地点の出土である。

#### 鉢C (第11図)

口縁部が内湾あるいは内湾後に直立する鉢CはT 48～T 54である。このうち、T 52は曲線の文様を施す「あ」であり、T 49・T 53・T 54は二平行沈線により平行入り組み文あるいは鉤状文を施すもの「い」である。T 48は二平行沈線文、T 50

	器形			文様上限線		文様			指宿焼成色	出土地点	
	深鉢A	深鉢B	鉢C	口縁肥厚	①	②	あ 曲線	い 鈎状			う 他
T1	●			●	●		●			●	A
T2	●			●	●		●				A
T3	●			●	●		●			●	A
T4	●			●	●		●			●	A
T5	●			●	●		●				A
T6	●			●	●		●			●	A
T7	●			●	●		●				A
T8	●			●	●		●				A
T9	●			●	●			●			A
T10	●			●	●			●		●	A
T11	●			●	●			●			A
T12	●			●	●			●			A
T13	●			●	●			●		●	A
T14	●			●	●			●		●	A
T15	●			●	●			●			A
T16	●			●	●			●		●	A
T17	●			●	●				●	●	A
T18	●			●	●				●		A
T23	●			●	●				●		A
T19	●			●	●				●	●	A
T20	●			●	●				●		A
T21	●			●	●				●	●	A
T22	●			●	●				●	●	A
T24	●			●	●				●		A
T25	●			●	●				●	●	A
T26	●			●	●				●	●	A
T27	●			●	●				●	●	A
T28	●			●	●				●	●	A
T29	●					●			●		A
T31	●					●	●				A
T30	●					●	●				A
T32	●					●	●	●		●	A
T33	●					●	●	●		●	A
T34	●					●	●	●			A
T35	●					●	●	●			A
T36	●					●	●	●			A
T37	●					●	●	●		●	A
T39		●					●				C
T45		●					●			●	C
T46		●					●			●	A
T38		●						●			C
T41		●						●			C
T40		●							●		C
T42		●							●		A
T43		●							●		A
T44		●							●		A
T47		●							●		A
T52			●				●				A
T49			●	●				●		●	A
T53			●					●			C
T54			●					●			C
T48			●	●					●		A
T50			●						●		A
T51			●						●	●	A

表1 下層出土指宿式土器個別属性分析表

は無文、T51は山形口縁直下以外の文様帯は不明であり、「あ」「い」いずれにも属さない「う」となる。

なお、T51は山形口縁直下に把手が付く。T53・54はC地点の出土である。

・その他の指宿式土器(第12図)

T55～T65は指宿式土器とみられるが、破片であることから分類ができず、上記のいずれにも含められないものである。T55は胴部に二平行沈線文で曲線的な文様が施され、貝殻刺突による擬似縄文を施文する磨消縄文系土器である。T56・T57・T59・T62は二平行沈線による曲線的な文様が施される。T58は曲線的ではあるが方形に類する区画を作り出している。T59は浅い沈線で曲線文が施される。T61は曲線的な沈線でレンズ状の文様と組文を施すが、二平行沈線による文様とはなっていない。T62は二平行沈線の端部が丸く収束する文様である。T60・T63は二平行沈線文であり、T60は深鉢Aに類する器形を呈する可能性がある。T64は把手である。T65は底部に近い胴部下半の破片である。

上記の内容をまとめたものが下記である。また、個別別にまとめたものが表1である。

深鉢A：口縁下部で屈曲し外反するもの 37点

①屈曲部に文様帯の上限となる横方向の沈線を施すもの 28点



i :口縁部を肥厚させるもの 2点

あ:曲線的文様 2点

ii :口縁部を肥厚させないもの 26点

あ:曲線的文様 6点

い:平行入り組み文あるいは鉤状文 8点

う:その他 12点

②屈曲部と文様帯との関連がなく、口縁端部付近まで文様を施すもの 9点

あ:曲線的文様 1点

い:平行入り組み文あるいは鉤状文 1点

う:その他 7点

深鉢B:口縁部が直立するもの 10点

あ:曲線的文様 3点

い:平行入り組み文あるいは鉤状文 2点

う:その他 5点

鉢C:内湾あるいは内湾後に直立する鉢形になるもの 7点

あ:曲線的文様 1点

い:平行入り組み文あるいは鉤状文 3点

う:その他 3点(無文1点)

さらに、上記の分類に加えて、指宿市で出土する指宿式土器の特徴とされる色調についても検討した。黒川忠広氏は、指宿式土器で、指宿市の温泉変質粘土を用いたことで、桃色等に発色したものを「指宿焼成色」と表現しているが、ここで着目したのはこの色調である。「指宿焼成色」は指宿式土器の他に、成川式土器にも見られる特徴である(黒川2005)。

観察結果は表1に記載した。「指宿焼成色」と呼ばれるピンク色を主体とする色調を呈するものは51点中22点であった。

色調と器形との関係では、深鉢A37点のうち指宿焼成色のものは18点あり48%程度、深鉢B10点のうち指宿焼成色のものは2点あり20%、鉢C7点のうち指宿焼成色のものは2点あり28.5%程度であり、深鉢Aが多い傾向であった。

また、色調と文様との関係では、指宿焼成色の22点中、文様モチーフ「あ」は6点、「い」は5点であり、相関が見出せなかった。

(文献)

寺師見國 1943 『鹿兒島縣下の縄文式土器分類及び出土遺蹟』鹿兒島縣肇國聖蹟調査會

黒川忠広 2005 「指宿式土器の色調から見た交流の断片」『縄文の森から』第3号

### iii その他の縄文土器(第13図～第15図)

T66～T99は、下層出土土器のうち、指宿式土器以外の型式と考えられる縄文土器である。なお、T100は弥生時代前期に帰属する遺物である。

T66・T67は底部である。T66は底部が網代底となり、T67は底部に条痕が残る。

T68は阿高式土器の破片とみられる。波状の凹線文が施される。

T69・T70は岩崎上層式土器とみられる。平行する凹線文を基調とし、鉤手文が見られる。T70は緩やかに外反し、岩崎上層式土器深鉢の器形的特徴を有する。

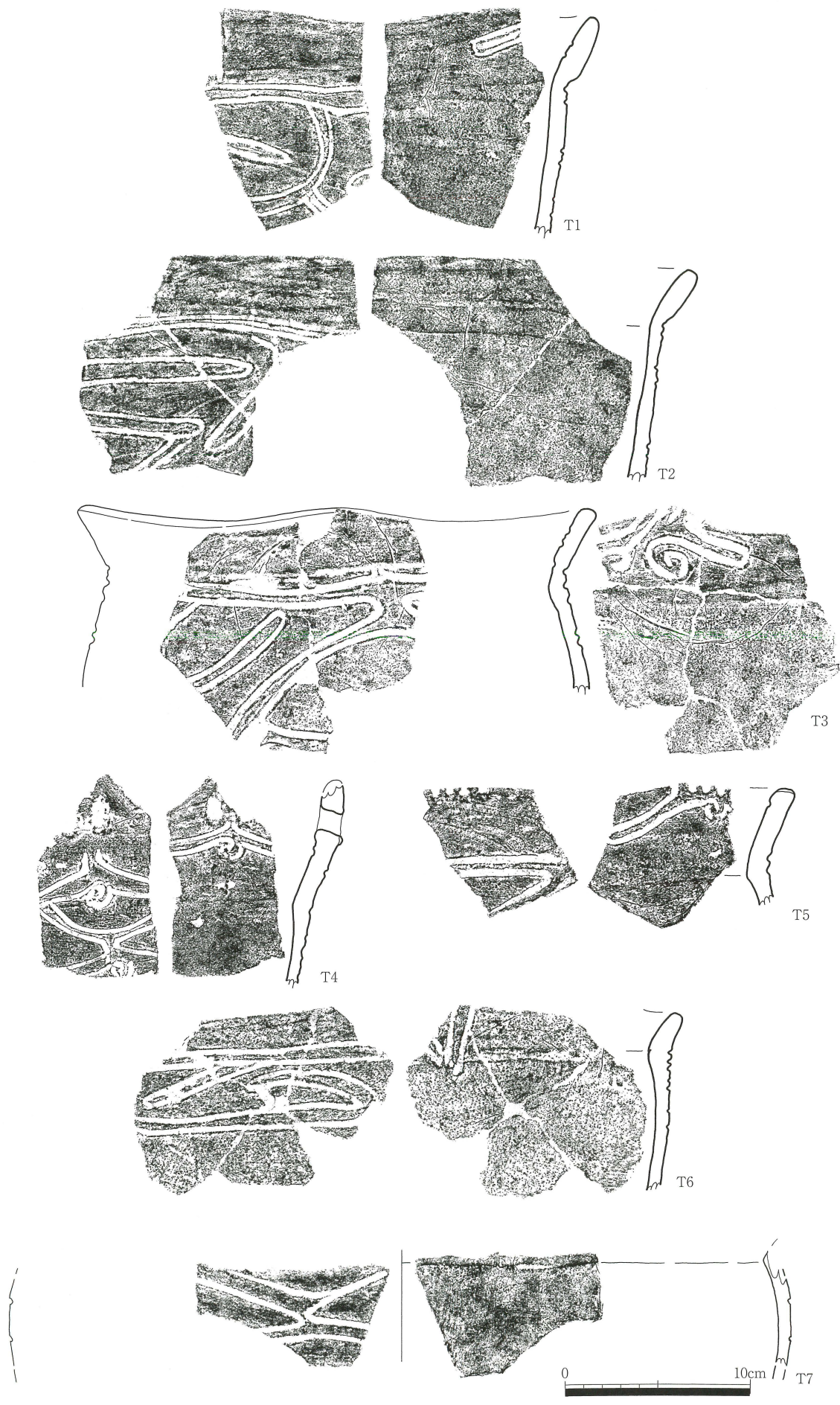
T71は二平行凹線を施す土器片である。

T72は肥厚して玉縁状の口縁を有し、口縁部外部に二枚貝腹縁部による3条の刺突による連弧文が施される。

T73は内外に条痕調整が施される土器である。口縁部は緩やかに外反し、平口縁になる。

T74は口縁部が窄まり、口唇端部に斜めのキザミ目を施す。口縁直下には浅い沈線複数によるレンズ状モチーフの文様を施す。小池原上層式あるいは鐘崎式土器の系統の可能性がある。

T75～T78は松山式土器である。T75は内外とも条痕調整を施す。口縁部は山形を呈する。T76は口縁部に凹線状の段を有する形態であるが、T77の口唇部が間延びをしたような形態であり、松山式の系統と考えた。



第7图 下層出土土器実測図1(指宿式土器①)(S=1/3)



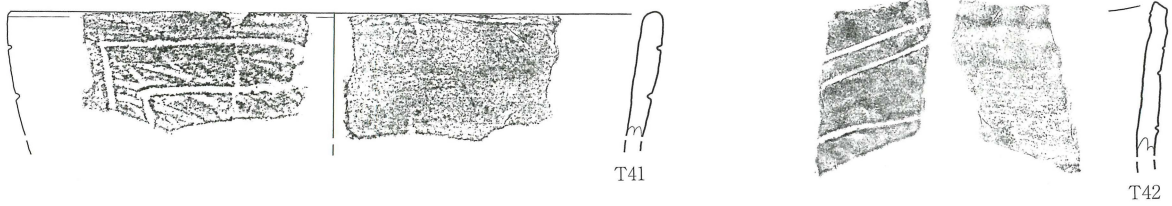
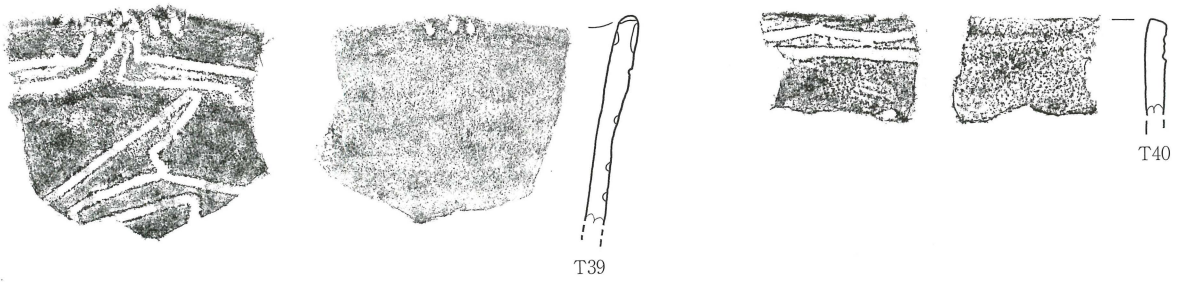
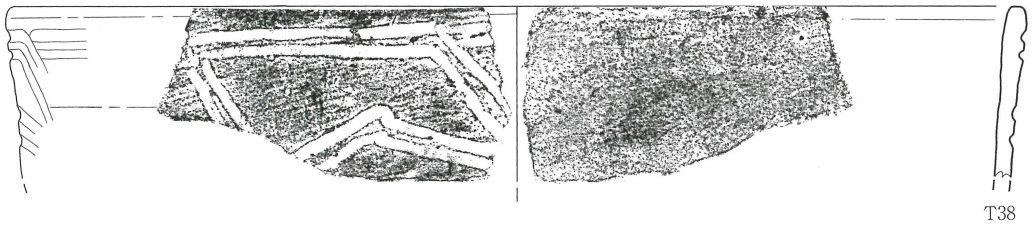
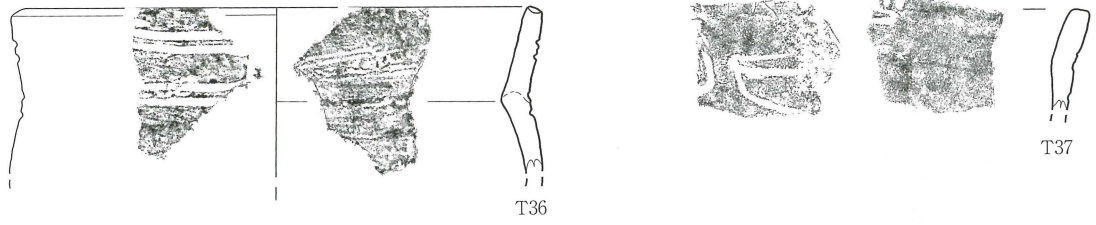
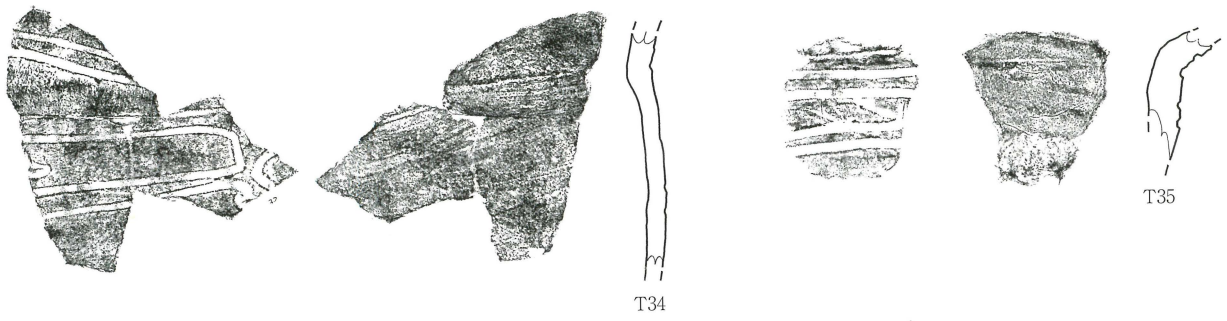


第8図 下層出土土器実測図2 (指宿式土器②)(S=1/3)

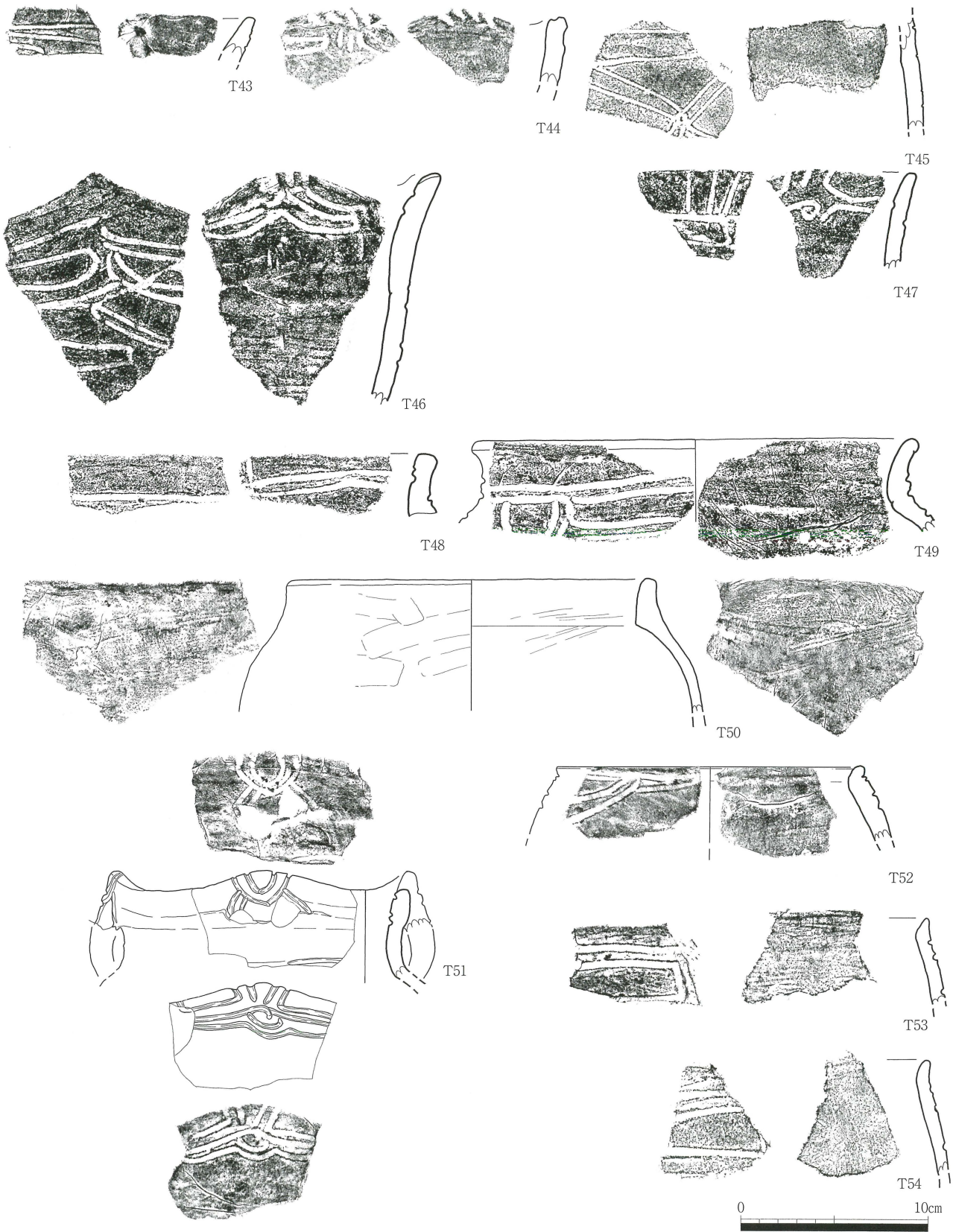


第9図 下層出土土器実測図3 (指宿式土器③) (S=1/3)



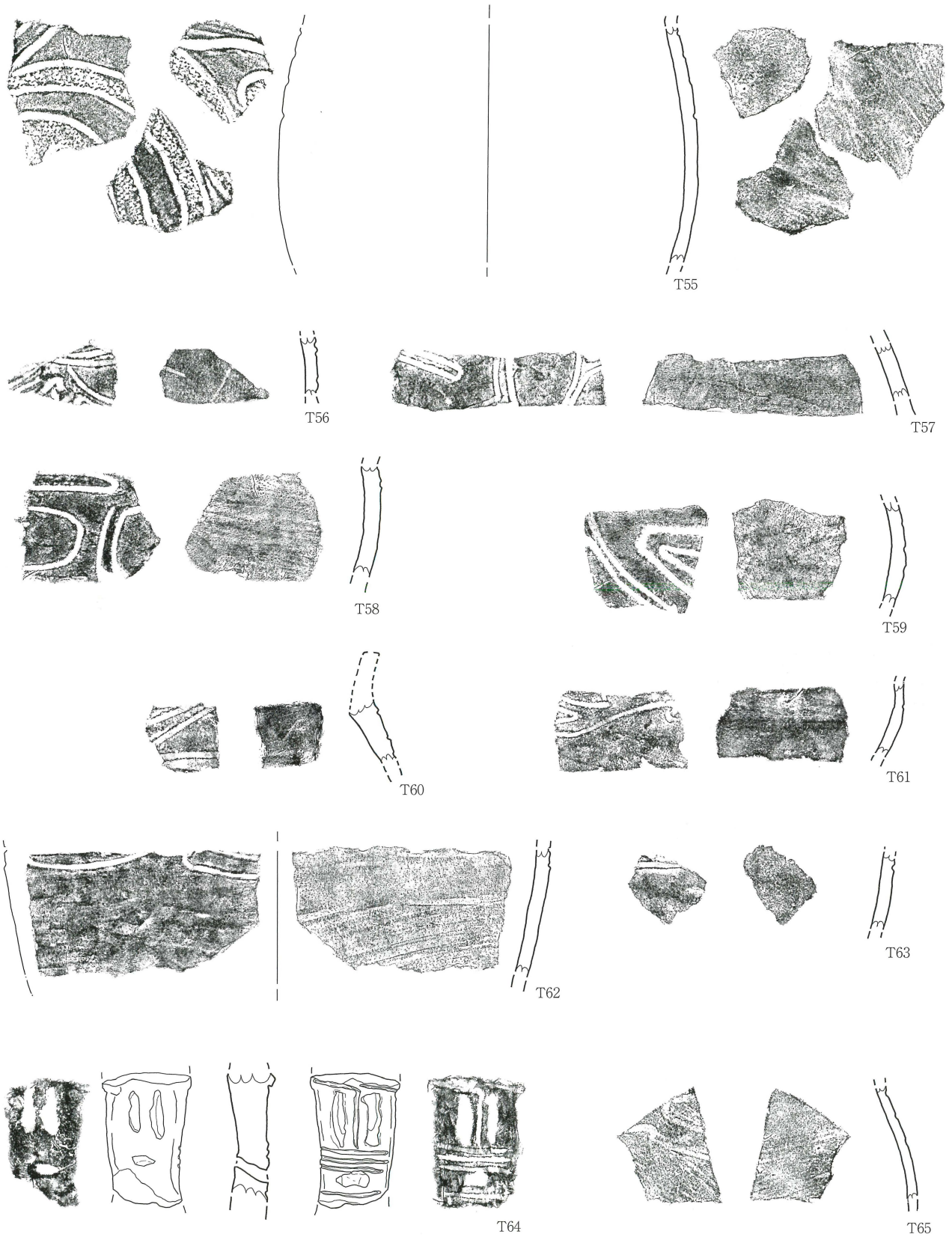


第10図 下層出土土器実測図4(指宿式土器④)(S=1/3)

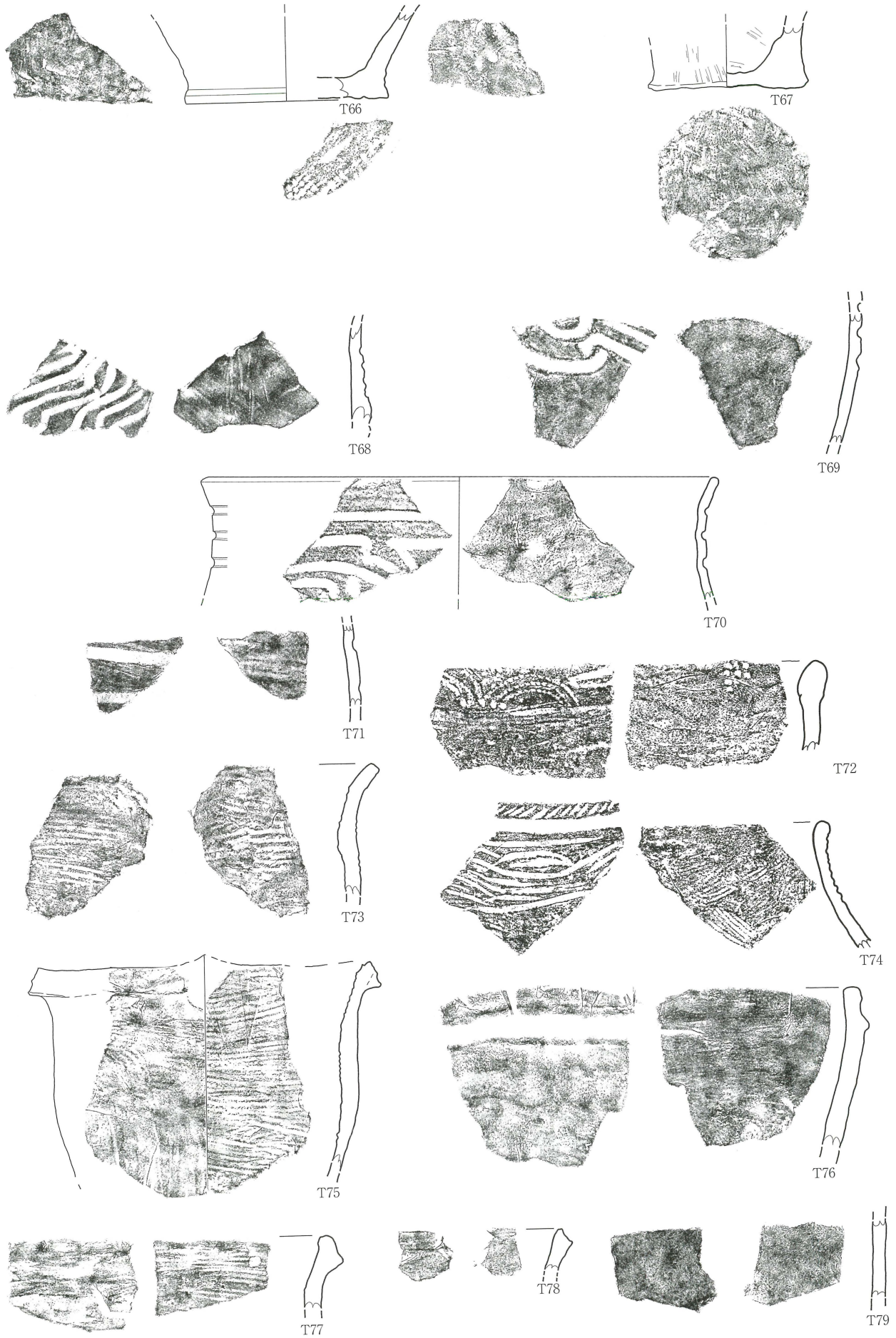


第11図 下層出土土器実測図5 (指宿式土器⑤) (S=1/3)



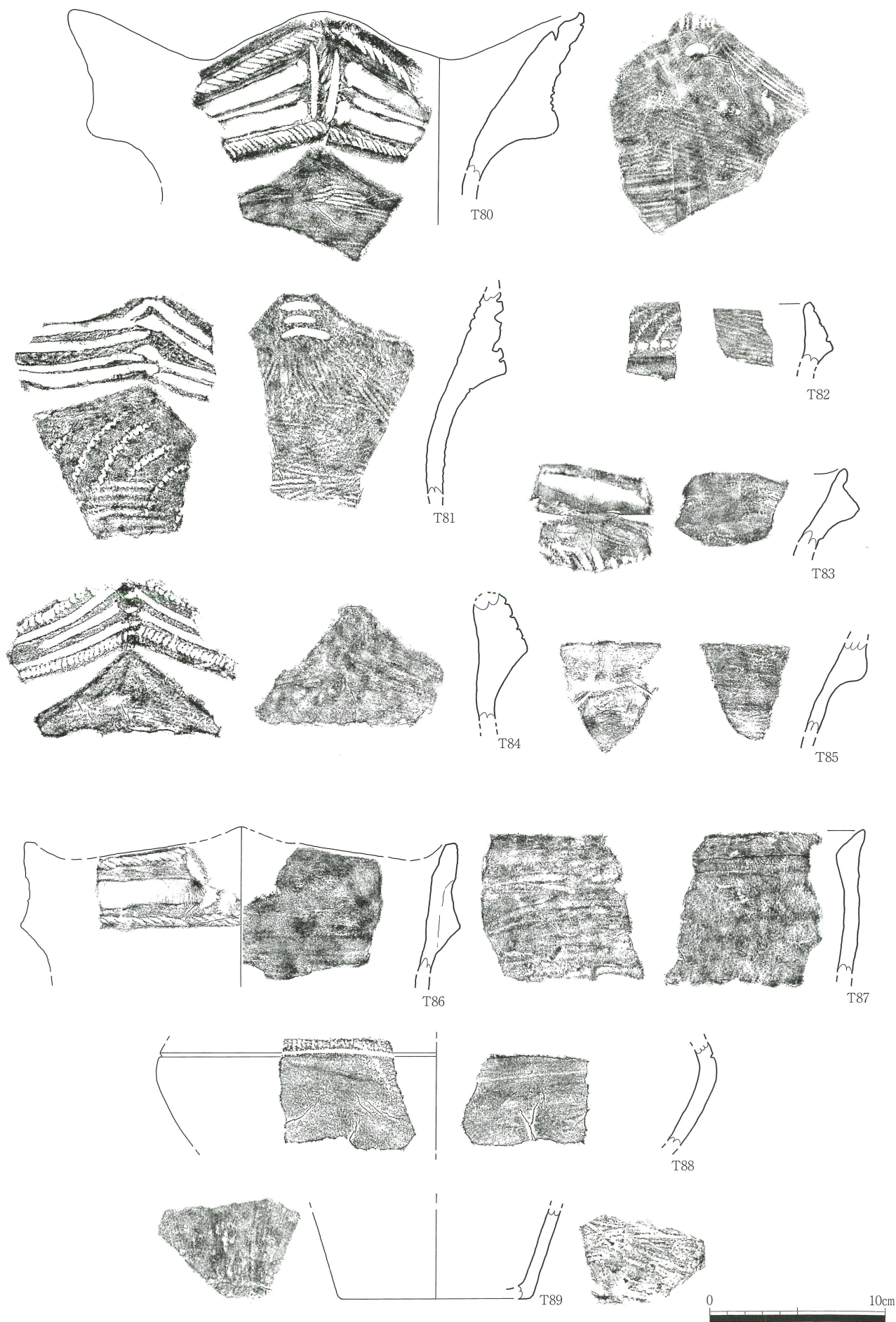


第12图 下層出土土器実測図6 (指宿式土器⑥) (S=1/3)

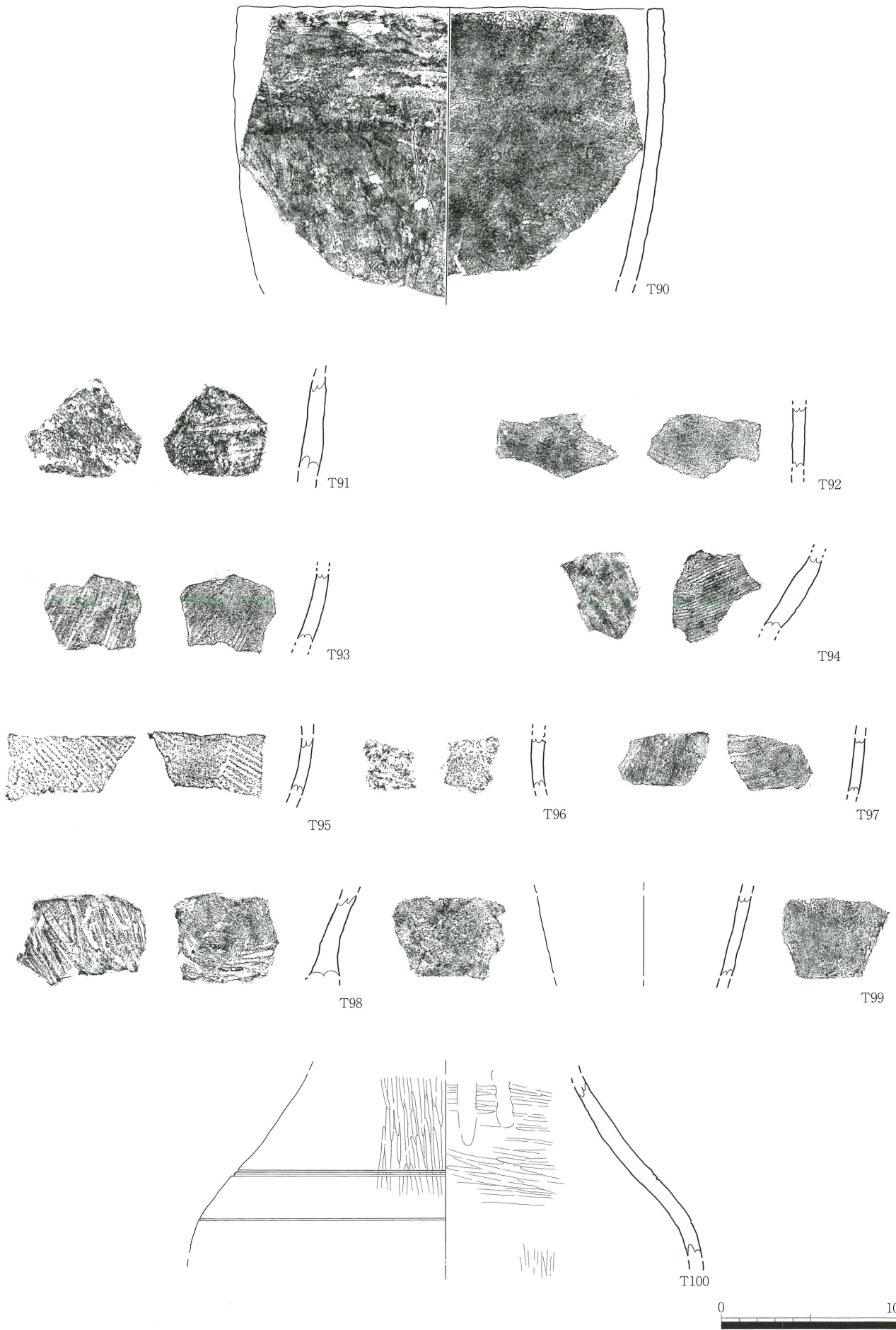


第13图 下層出土土器実測図7 (S=1/3)





第14图 下層出土土器実測図8 (S=1/3)



第15図 下層出土土器実測図9 (S=1/3)



T79は縄文土器片である。

T80～T86は市来式土器である。T80は口縁部が大きく外反する。断面三角形の口縁部を肥厚し文様帯とする。文様は上下が工具による爪形の連続刺突文と、その間に棒状工具による凹線文を2本施し、凹線の間には1条の沈線文が施される。山形口縁直下には縦方向の2沈線文と、その間に斜方向の沈線文が施される。山形口縁頂部には外面から内面に向かう短沈線による刻み目があり、内面に1点の刺突が施される。

T81の文様は横方向の凹線文のみである。文様帯直下の胴部上半には二枚貝腹縁部による斜方向の連続刺突文が施される。内面には横方向の短沈線3本が施される。

T82の文様帯には、二枚貝腹縁部による斜方向の連続刺突文と列点文が施される。

T83は口縁部を三角形断面に作り出すが、口唇部直下に段を作り出す。三角口縁直下には縦方向の沈線が見られる。

T84の文様はT81と同様であるが、内面には施文されない。

T86は上下の爪形連続刺突文とその間に一条の凹線文が施される。山形口縁直下には爪形刺突文と縦方向の凹線文を組み合わせて施文される。

T87は無文土器である。内面を三角形に肥厚させる。器形的には市来式土器の系統にあたと考えられる。

T88は胴部が張る鉢形の土器であり、胴部の最大径付近に横方向の沈線と貝殻刺突文による擬似縄文が施される、磨消縄文系土器である。北久根山式土器の系統の可能性がある。胴部の復元径は約32.8cmである。

T89は縄文土器の底部である。胴部下端と底部とで器厚に変化がないものと考えられる。縄文後期に帰属する土器の底部とは形状が異なっている。

T90～T99は無文の縄文土器と考えられる。T90は口縁部が直立する深鉢形土器である。平口縁であり、口唇端部は平坦に作り出される。復元口径は約22cmとなる。T95は内外面に条痕による調整が見られる。T98・T99は底部付近の破片である。

T100は弥生前期に帰属する、高橋式土器壺形土器の頸部から胴部上半の破片である。出土地点不明の箱に収蔵されていたが、京大報告では下層出土遺物とされている。外面はミガキで仕上げられ、肩部に沈線が一条めぐる。

## ② 上層出土土器(第16図～第24図)

第16図～第24図は、大正7・8年調査において出土した上層土器である。京大報告の中では、「素焼赤色の所謂彌生式系統に属するもの」と記されている。本報告書作成に伴い、京大報告の掲載遺物を全て実測したが、ほぼ全点が古墳時代に帰属する成川式土器であることが明らかとなった。なお、京都大学総合博物館では報告書未掲載遺物も保管しているが、実見した範囲では、上層土器とされるものには弥生土器はほぼ含まれていなかったところである。

成川式土器については、濱田による橋牟礼川遺跡発掘調査以降、昭和33年(1958)の成川遺跡の発掘調査までは、弥生時代後期の土器とされていた土器様式である。これが、昭和33年の成川遺跡の調査によって古墳時代まで下ることが明らかとなった経緯がある。成川式土器の下限時期に関しては諸説あるが、平成4年の国指定史跡橋牟礼川遺跡地内K1トレンチの発掘調査で、7世紀後半の火山灰層(青コラ)上位から掘り込まれた竪穴建物床面で出土した土器が、成川式土器笹貫式段階の甕形土器の伝統を持つものであった(第84図4-61～4-62)。さらに、指宿市敷領遺跡においては、874年の火山灰層(紫コラ)と青コラとの間の6層中において、成川式土器の甕のみならず、壺に関しても8世紀代に下ることが明らかになっている(指宿市教育委員会1999)。

出土物については、京大報告の掲載順に掲載し、観察表に原図版番号を掲載した。以下内容について述べる。

第16図T101～T105は京大報告図版25に掲載されたB地点の遺物である。T101は成川式土器甕である。口径31cmを測る。口縁は内湾気味に直立し、胴部上半に、キザミのない突帯が一条巡る。突帯上下には貼付の際のユビオサエが残る。笹貫式段階の範疇に含まれる。

T102・T104・T105は埴形土器である。102は頸部が強く窄まり、胴部下半に最大径をとる。外面に赤色研磨が施される。

T103は甕形のミニチュア土器である。口縁部はやや外反し、一条の突帯が巡る。突帯にはキザミは施されない。脚台は中空となる。器形から辻堂原式から笹貫式段階に帰属する。

T104は頸部が余り窄まらず、口縁部が外反する。外面はナデが施される。

T105は算盤玉状の器形である。底部はレンズ状平底となる。外面にミガキのち赤色塗彩が施される。

第17図 T106～T115は京大報告の図版26に掲載されたB地点出土遺物である。いずれも高杯の脚部である。

T106は頸部からラッパ状に開く。杯部は大きく開く皿状を呈する。

T107は外面にミガキのち赤色塗彩が施される。脚台は直立し、杯部はボール状を呈する。

T108は外面にミガキのち赤色塗彩が施される。脚台は粘土が充填され、直立したのち外反する。

T109は外面にミガキのち赤色塗彩が施される。杯部の器厚は薄い。脚台は粘土を若干充填し、直立したのち外反する。

T110は外面の脚台上半にミガキが、下半にナデが施され、直立したのち外反する。

T111は外面にミガキのち赤色塗彩が施される。脚台は直立したのち外反する。

T112は外面にミガキのち赤色塗彩が施されたものと考えられ、部分的に赤色顔料が残る。脚台は緩やかに外反する。

T113は外面にナデが施され、脚台は段を作り外反する。

T114は脚台が段を作り外反する。

T115は外面がミガキ様となり、脚台は緩やかに外反する。脚台端部等に受熱によると考えられる変色が見られる。

第18図 T116～T127は京大報告の図版27に掲載されたB地点出土遺物である。T116は甕形土器の胴部から脚部である。胴部外面はミガキ様になる。底部は上げ底を呈する。

T117は壺形土器の底部である。外面は工具ナデによりミガキ様となり、内面はミガキが施される。底は凸レンズ状を呈する。

T118は鉢形土器底部である。胴部と脚台との境を突帯状に削り出している。脚台は短く外反しながら開く。

T119は甕形土器底部である。脚台内面に接合痕が残る。底部は外反しながら開く。

T120・T121は甕形土器底部と見られる。T122は鉢形土器底部である。

T123はミニチュア土器の底部と考えられる。

T124は平底の器種不明の底部である。内面の発色がピンクを呈することと、混和材の状態から成川式土器と考えられる。

T125～T127は壺形土器の底部である。T125は底部がレンズ状を呈し、外面はナデによりミガキ様となる。

T126は丸底であり、外面はナデが施される。

T127は丸底であり、外面はナデによりミガキ様となる。

第19図・第20図・第21図 T128～T150は京大報告の図版28に掲載されたB地点出土遺物である。T143を除き、成川式土器の辻堂原式段階から笹貫式段階に帰属する遺物である。

T128は壺形土器の胴部上半の破片である。復元最大径が48.4cmを測る。肩部の幅広突帯にハの字状の2条沈線文が施される。

T129は甕形土器の口縁部破片である。復元口径が32cmを測る。口縁部はやや内湾気味に直立する。胴部上半にキザミが施された突帯が一条巡る。

T130は壺形土器胴部破片である。幅広突帯には4条沈線でハの字文が施され、その間に半裁竹管の刺突によりS字文が施される。

T131は壺形土器の肩部破片である。幅広突帯には沈線で網代状の文様が施される。

T132は壺形土器の頸部破片である。頸部屈曲部に幅広突帯が付けられ、沈線で鋸歯文が施される。その間に竹管による刺突文が施される。

T133は甕形土器の突帯部分の破片である。胴部上半にキザミが施された突帯が一条巡る。

T134は甕形土器の口縁部から胴部の破片である。口縁はやや内湾し、胴部上半にキザミが施された突帯が1条巡る。

T135は壺形土器の肩部破片である。幅広突帯には沈線で網代状の文様が施される。

T136は壺形土器の肩部破片である。幅広突帯には3条の沈線でハの字文が施される。沈線内部には部分的に繊維状の圧痕が残る。

T137は甕形土器の口縁部から胴部の破片である。口縁部は外反気味に直立する。胴部上半にキザミのない1条突帯が巡り、突帯上下にユビオサエが残る。

T138は甕形土器の口縁部から胴部の破片である。口縁部は内湾気味に直立する。胴部上半にキザミのない1条突帯が巡る。



T139は壺形土器の頸部から胴部の破片である。復元最大径は25.8cmを測る。幅広突帯には4条沈線でハの字文が施される。沈線内部には部分的に繊維状の圧痕が残る。

T140は甕形土器の口縁部から胴部の破片である。口縁部は内湾気味に直立する。胴部上半に1条突帯が巡り、間隔を置いてキザミが施される。

T141は壺形土器の肩部破片である。幅広突帯には4条沈線でハの字文を施し、その間に竹管で刺突文を施す。

T142は甕形土器の肩部破片である。幅広突帯には3条沈線でハの字文が施され、その間に半裁竹管で刺突文が施される。

T143は壺形土器口縁部である。口唇部に円形の刺突文、縦方向の沈線文、貝殻刺突文を組み合わせて施文する。この遺物のみ成川式土器の範疇には入らず、弥生土器と考えられる。

T144は甕形土器の口縁部から胴部の破片である。口縁部は内湾気味に直立する。胴部上半の1条突帯にキザミが1か所施され、内部には繊維状の圧痕が残る。繊維は1cm当たり14～15本程度が見られた。

T145は甕形土器の口縁部から胴部の破片である。口縁部は内湾気味に立ち上がる。胴部上半の1条突帯にキザミが1か所施され、内部には繊維状の圧痕が残る。繊維は1cm当たり14～15本程度が見られた。

T146は甕形土器の破片である。口縁はやや外反し、胴部上半に1条突帯が巡りキザミが施される。突帯端部は重ならない。

T147は壺形土器の幅広突帯の破片である。幅広突帯には4条沈線でハの字文を施し、その間に竹管で刺突文を施す。

T148は甕形土器の突帯部の破片である。突帯は上端で高さ5mm程度、下端で高さ1cm程度であり、中央に段を持つ特殊なものである。文様は、中央に浅い1条沈線文が横方向に施された後、直径5mm程度の工具で刺突文が施され、縦方向の沈線と斜め方向の沈線が施される。

T149は甕形土器の口縁部から胴部の破片である。口縁は内湾し、胴部上半に1条突帯が巡る。突帯端部は重ならない。1点施されるキザミは、棒状工具で押し引かれたものであり、キザミの上方に粘土が溜まっている。

T150は甕形土器の口縁部から胴部の破片である。口縁はやや内湾し、胴部上半にキザミのない1条突帯が巡る。突帯端部は重ならない。

第22図 T151～T159は京大報告の図版29に掲載されたB地点出土の成川式土器と須恵器である。T151は壺形土器の口縁部から胴部上半の破片である。口縁部の復元径は14.0cmを測る。口縁部はハの字に開き、端部がやや内湾する。胴部は大きく開く。頸部にキザミのない突帯が巡る。

T152は壺形土器の口縁部から頸部の破片である。口縁部の径は13.2cmを測る。口縁部はハの字に開く。頸部にキザミのある突帯が巡る。

T153は壺形土器である。径9.5cmを測る。口縁部はハの字に直立し、頸部に突帯が巡る。胴部は丸く張り、復元最大径は15.9cmを測る。

T154は鉢形土器である。底部は平坦であり、長楕円形を呈する。断面形は逆台形となる。内面・外面ともにミガキが施される。復元最大口径は22.1cm、底部の短軸長が6.6cmであり、内面見込みの復元長軸幅は12.3cm、短軸幅は6.6cmを測る。

T155は須恵器大甕の口縁部破片である。横方向の2条沈線の間に斜方向のキザミが施される。この単位2つ分が見られる。

T156は須恵器大甕の胴部片とみられる。外面には格子目タタキが、内面には青海波タタキが施される。

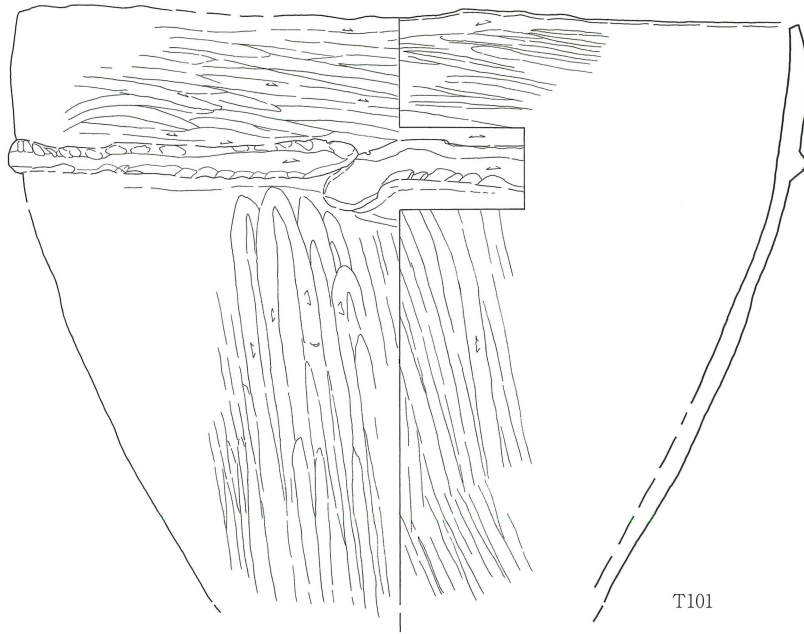
T157は須恵器杯蓋である。ツマミ部分が欠損している。外面に1条沈線が施される。

T158・T159は須恵器杯身である。T159は底部にヘラオコシ痕が残る。

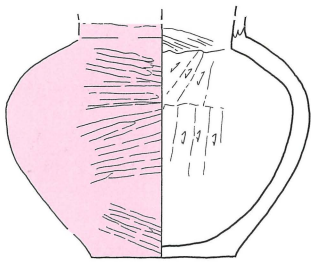
第23図・第24図 T160～T173は京大報告の図版30に掲載されたB地点出土の成川式土器である。T160～T161、T163～T169、T171～T173は甕形土器口縁部から胴部の破片である。T162は中津野式段階に帰属する壺形土器であり、他の甕形土器は辻堂原式段階から笹貫式段階に帰属する。

T160は復元口径33.4cmを測る甕形土器である。口縁部はやや内湾する。口縁下部にキザミのない1条突帯が巡る。内外面にミガキが施される。

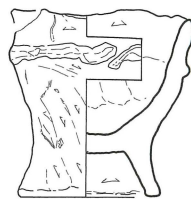
T161は復元口径27.0cmを測る甕形土器である。口縁部は内湾し、胴部上半に断面台形の1条突帯が巡る。キザミは間隔を置いて施される。外部は突帯上でミガキが施され、下でミガキ様になる。



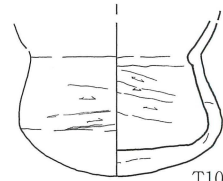
T101



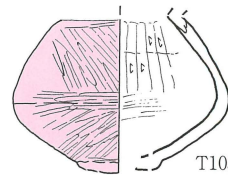
T102



T103



T104



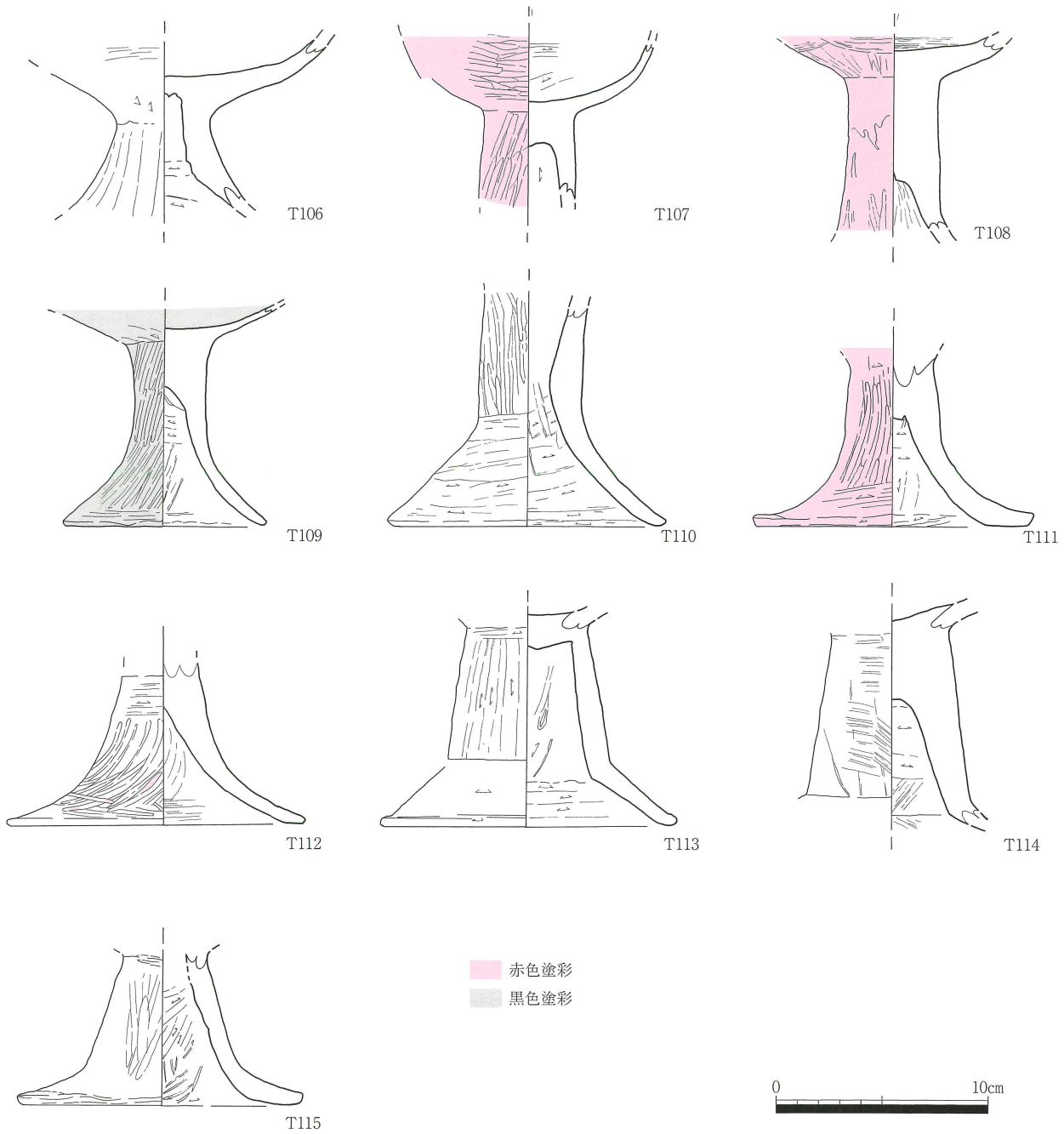
T105

赤色塗彩

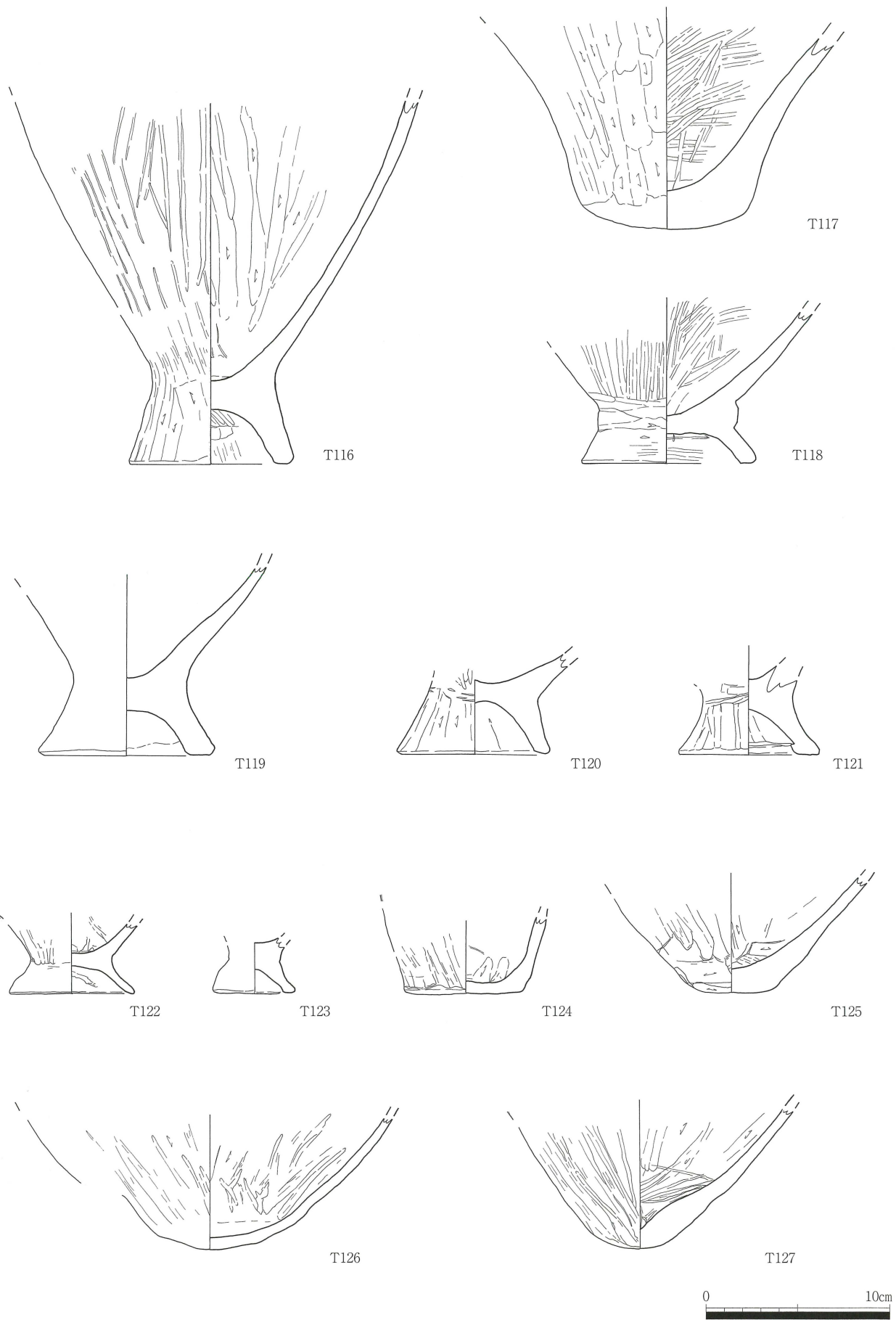


第16図 上層出土土器実測図1 (S=1/3)



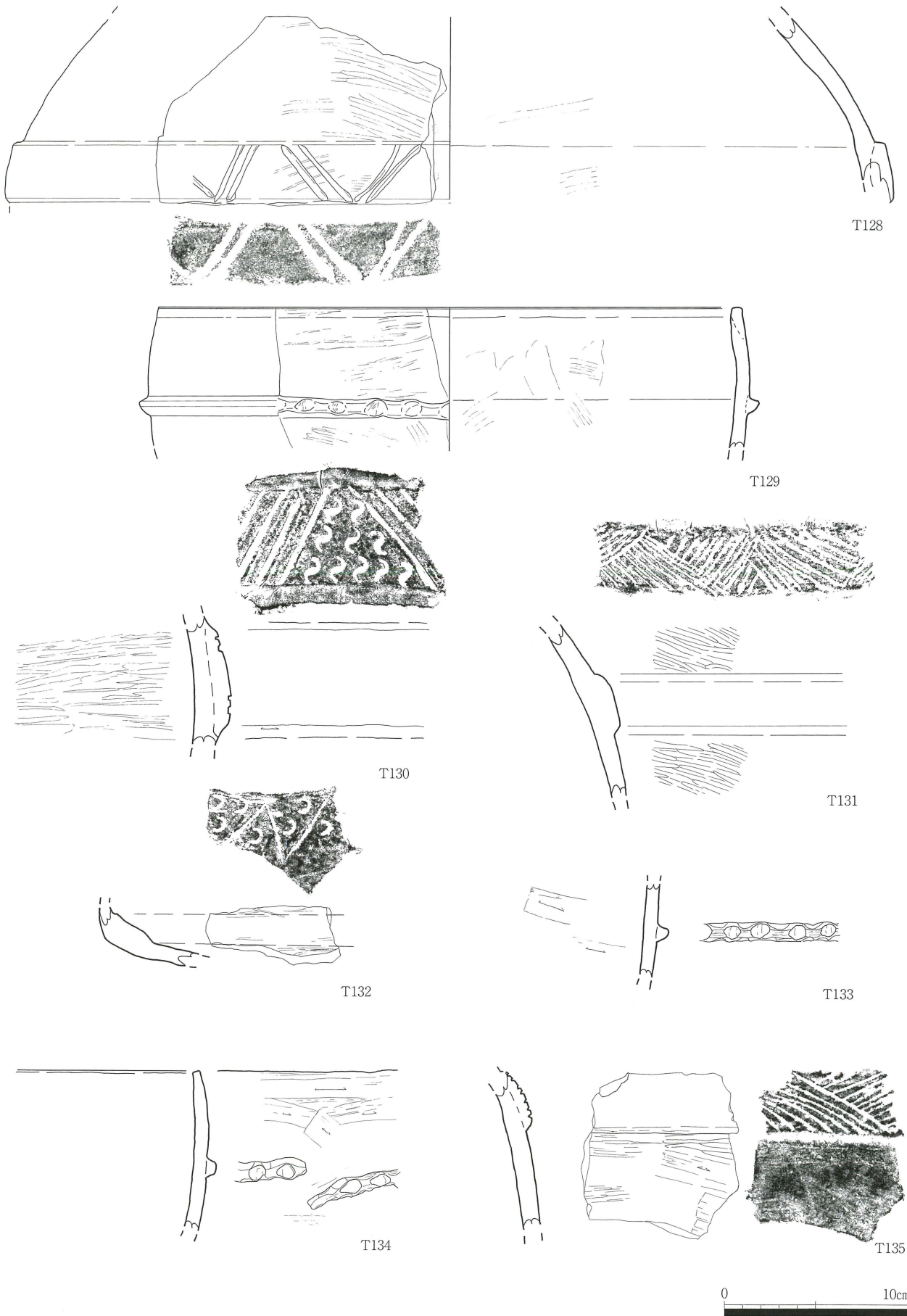


第17図 上層出土土器実測図2 (S=1/3)

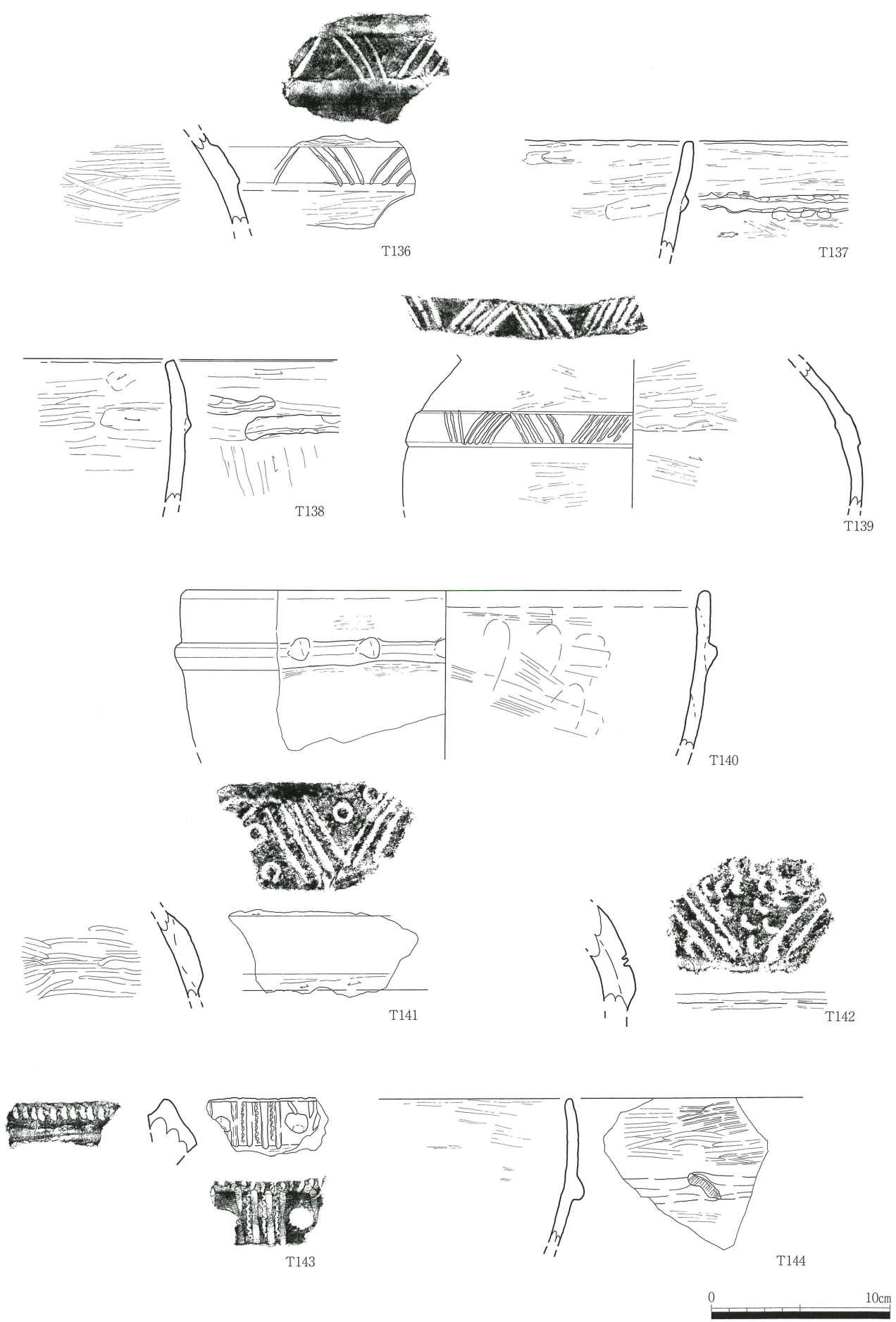


第18図 上層出土土器実測図3 (S=1/3)





第19図 上層出土土器実測図4 (S=1/3)

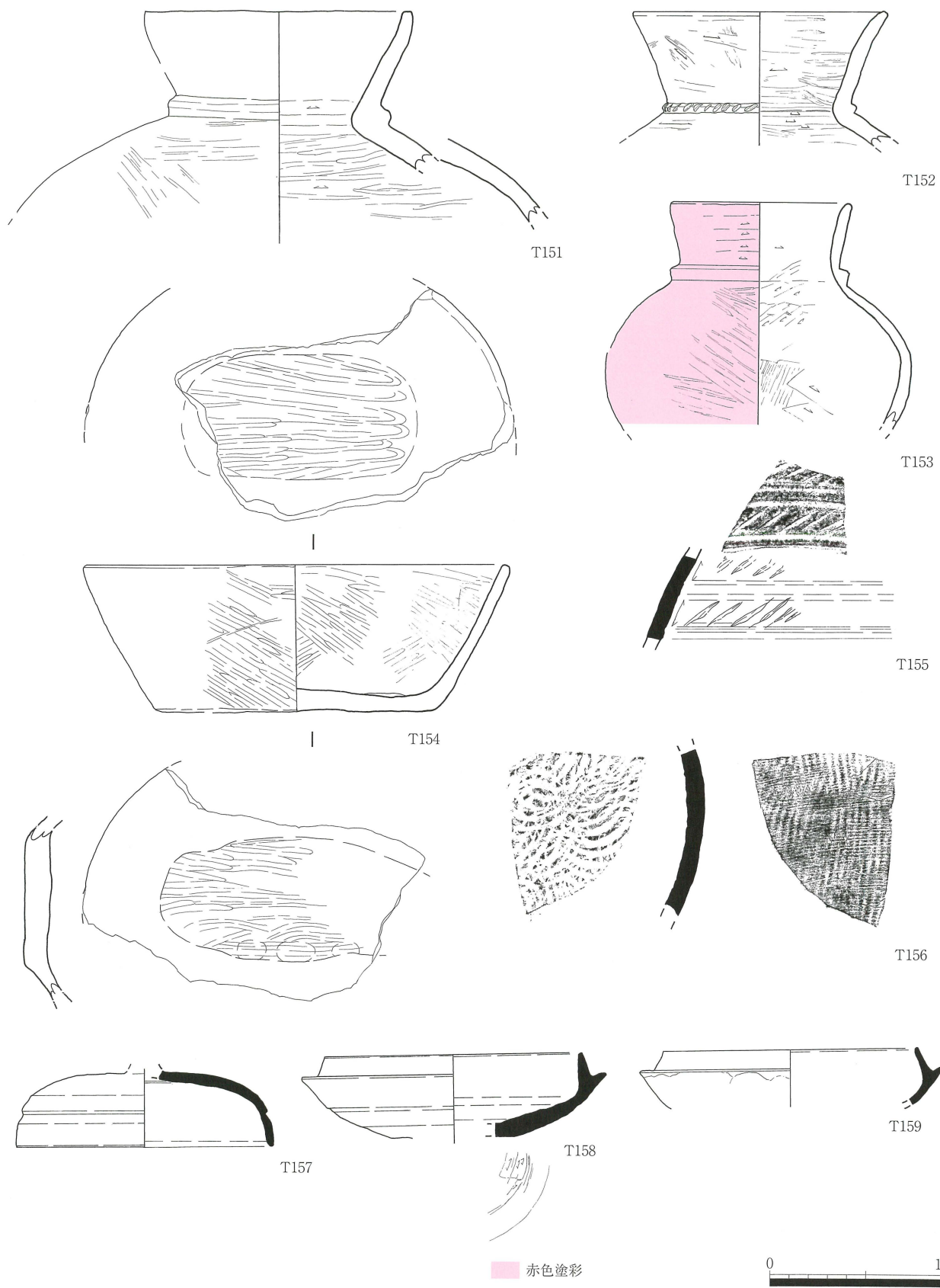


第20図 上層出土土器実測図5 (S=1/3)



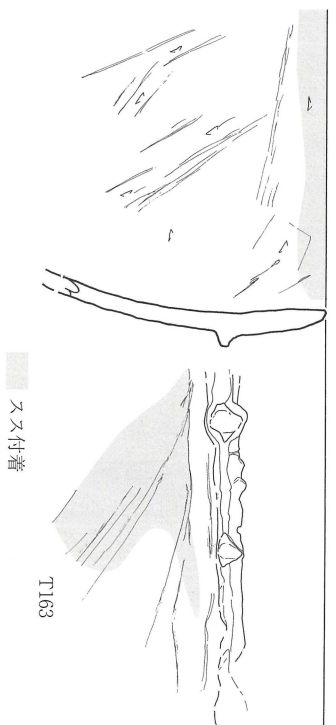
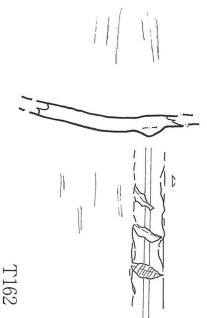
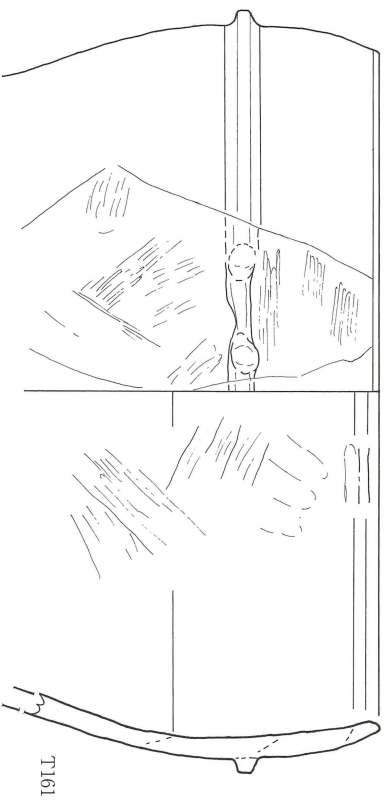
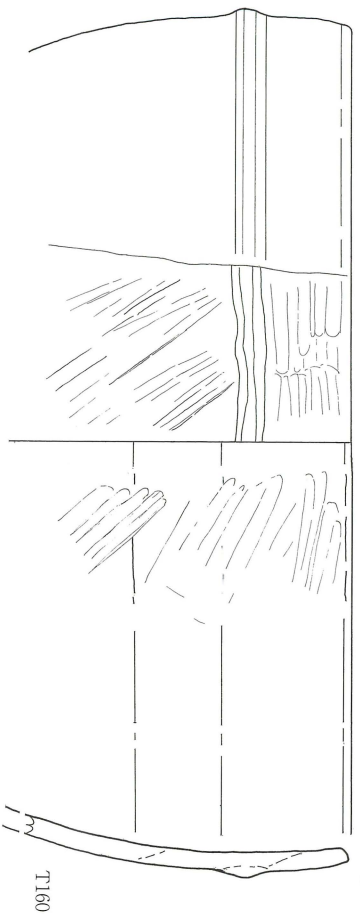


第21図 上層出土土器実測図6 (S=1/3)

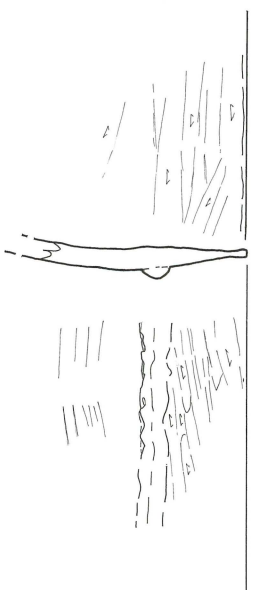
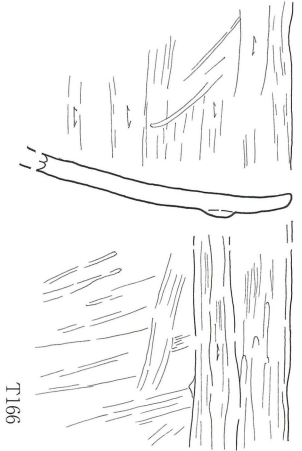
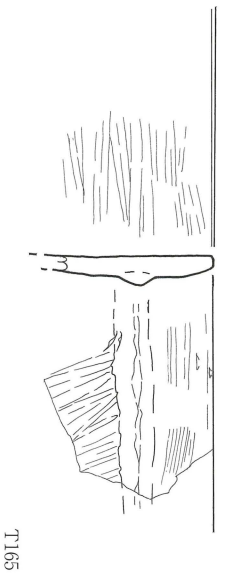
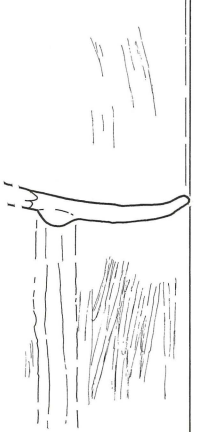


第22図 上層出土土器実測図7 (S=1/3)

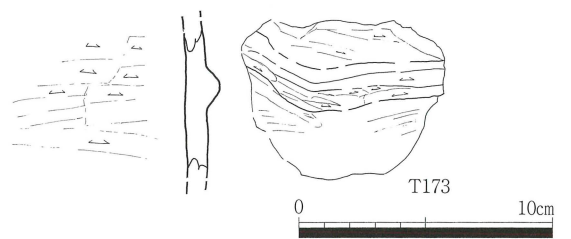
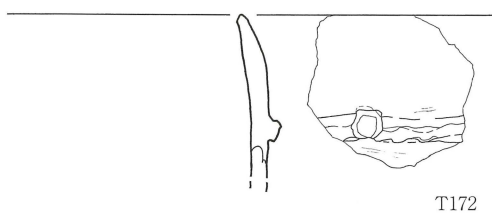
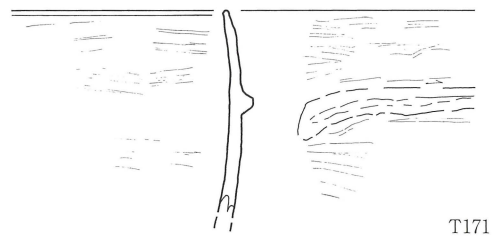
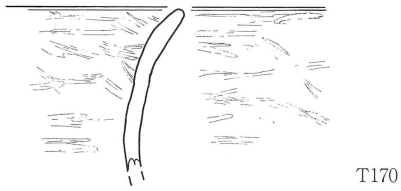
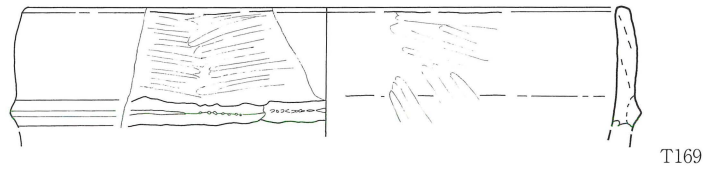
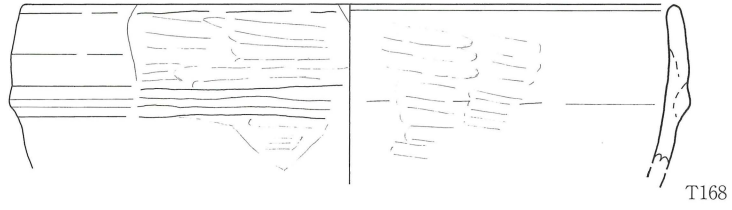




ス又附着

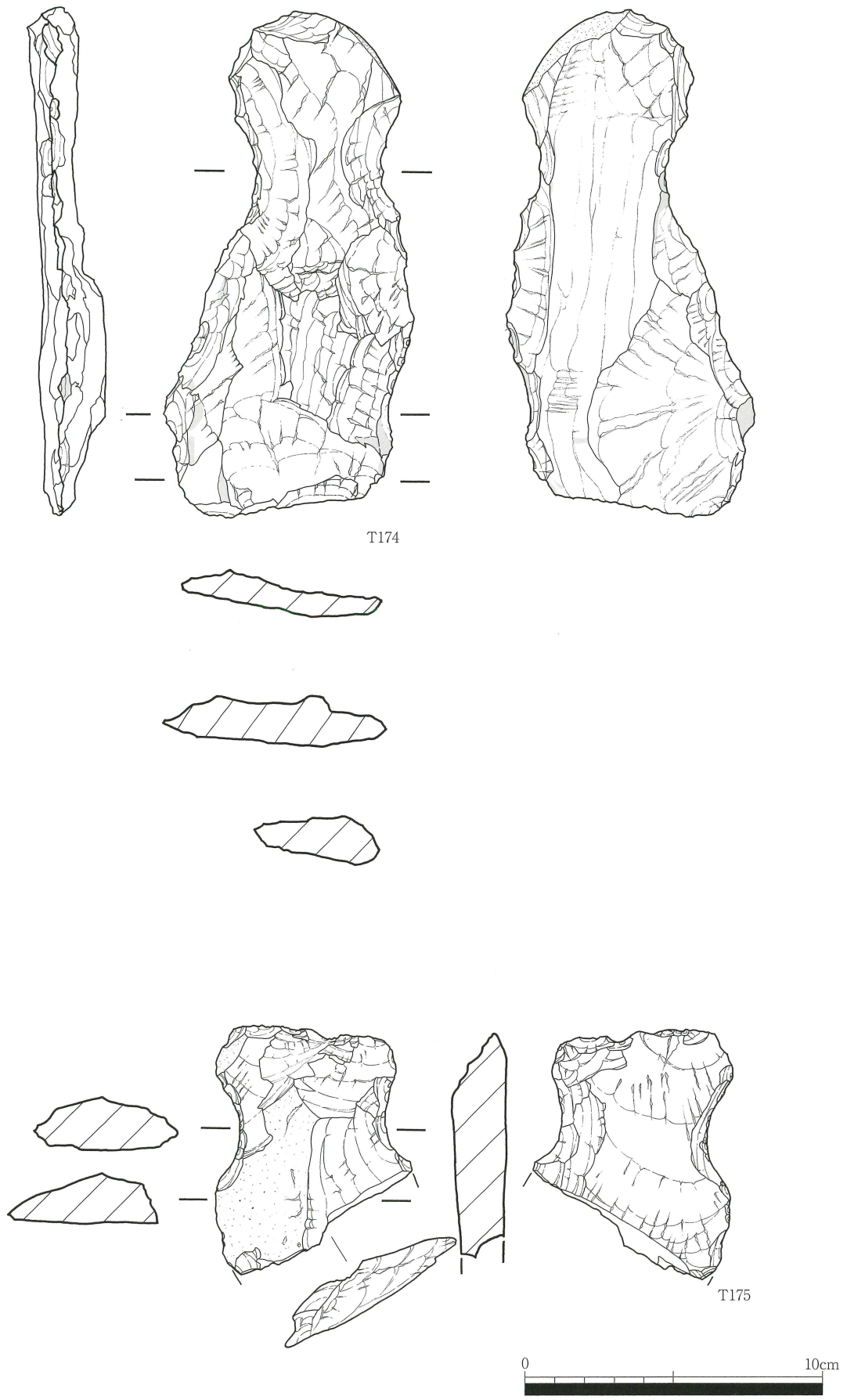


第23図 上層出土土器実測図8 (S=1/3)

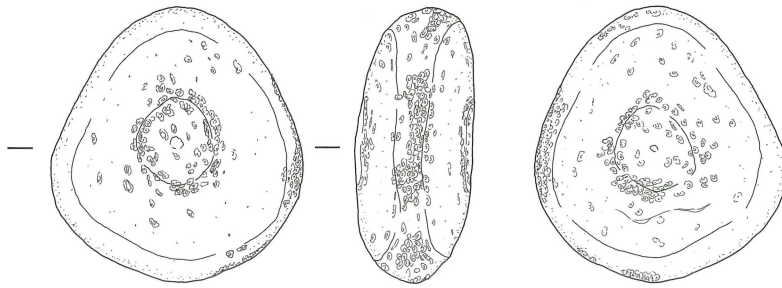


第24図 上層出土土器実測図9 (S=1/3)

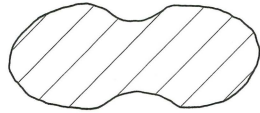




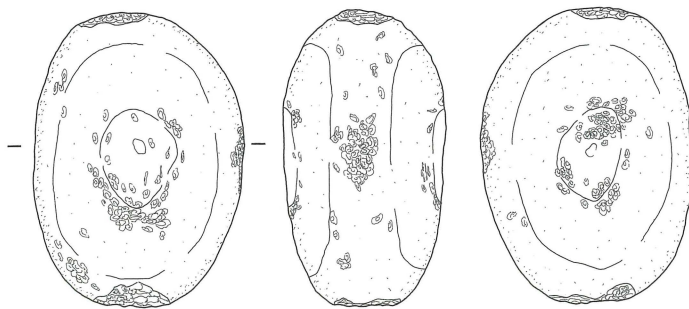
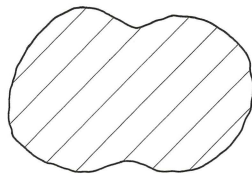
第25图 上層出土石器実測図1 (S=1/3)



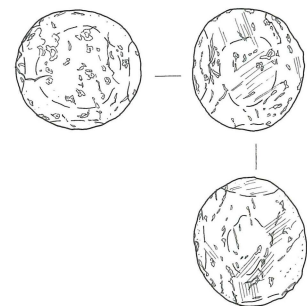
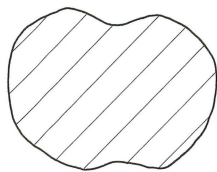
T176



T177



T178



T179



第26図 上層出土石器実測図2 (S=1/3)



No	種別	器種	部位	色外	色内	色肉	胎土粒	混和材	調整外	調整内	調整その他	その他	注記内容	京大報告図版
T1	指宿式土器	深鉢	口-胴部	25YR5/2	7.5YR5/1	2.5Y5/1	微砂粒を微量含む 小礫を微量含む	カ・セ・白	ナデ	ナデ	口唇：ヨコナデ		掛箱七・一 A1709	32
T2	指宿式土器	深鉢	口縁部	10R5/3 5YR5/2	7.5YR5/2 5YR5/1	5YR5/1	微砂粒を含む 小礫を微量含む	カ・セ・白・褐	ナデ	ナデ・ケズリ	口唇：ヨコナデ		A1709	32 33
T3	指宿式土器	深鉢	口縁部	2.5YR5/2	2.5YR5/3	10YR4/1	微砂粒を含む 小礫を微量含む	カ・セ・白	ナデ	ナデ	口唇：ヨコナデ	スス付着、吹きこぼれ跡?	A1869	31
T3	指宿式土器	深鉢	口縁部-胴部	2.5YR5/2	2.5YR5/3	10YR4/1	微砂粒を含む 小礫を微量含む	カ・セ・白	ナデ	ナデ	口唇：ヨコナデ	スス付着、吹きこぼれ跡?	A1869	31 33
T4	指宿式土器	深鉢	口-頸部	2.5YR 5/2	2.5YR 5/2	10R 5/2	微砂粒を微量含む 小礫を微量含む	カ・白・赤	ナデ	ナデ	口唇：ヨコナデ		A1869	31
T5	指宿式土器	深鉢	口縁部	5YR5/1	5YR6/2	10YR4/1	砂粒を含む	カ・セ・白	荒いナデ	ナデ	口唇：ヨコナデ		A1869	31
T6	指宿式土器	深鉢	口縁部	5YR5/1	2.5YR5/3	2.5YR5/2	砂粒を含む 小礫を若干含む	カ・セ・白	ナデ	ナデ	口唇：ヨコナデ		A1869	31 33
T7	指宿式土器	鉢?	口縁部	2.5YR5/1 2.5YR5/3	10R5/3	7.5YR5/1	砂粒を含む 小礫を微量含む	カ・セ・白	ナデ	ナデ			A1709	33
T8	指宿式土器	深鉢	胴部	10R5/2	5YR5/1	10R5/2	微砂粒を若干含む	セ・白	ナデ	ナデ			A1869	33
T9	指宿式土器	深鉢	口縁部	7.5YR6/2 2.5YR5/2	2.5YR5/3	2.5Y5/1	微砂粒を微量含む 小礫を微量含む	カ・セ・白・褐	ナデ	ナデ	口唇：ヨコナデ		掛箱大正七年一月1709	32
T10	指宿式土器	深鉢	口縁部	2.5YR5/3	2.5YR5/2	5YR5/1	砂粒を若干含む 小礫を微量含む	カ・セ・白	ナデ	ナデ (一部ミガキ様)			A1709	33
T11	指宿式土器	深鉢	口縁部	10R5/3	10R5/4	7.5R4/3	砂粒を含む 小礫を微量含む	カ・セ・白・褐	ナデ	ナデ	口唇：ヨコナデ	内外面マメツ	A1869	33
T12	指宿式土器	深鉢	口縁部	7.5YR5/1	2.5YR6/2	7.5YR5/1	マメツのため不明	セ・白	マメツのため不明	マメツのため不明	マメツのため不明	内外面マメツ		33
T13	指宿式土器	深鉢	口縁部	7.5YR5/1	10R4/1	5YR5/1	砂粒を含む	カ・セ・白	ナデ	ナデ	口唇：ヨコナデ		A1709	33
T14	指宿式土器	深鉢	口縁部	7.5R5/2	2.5YR5/3	7.5YR5/2	砂粒を多く含む 小礫を微量含む	カ・セ・白	ナデ	ナデ	口唇：ヨコナデ		1709	32
T15	指宿式土器	深鉢	胴部	5YR5/1	5YR5/1	7.5YR5/1	微砂粒を含む	カ・セ・白	ナデ	ナデ			1869	33
T16	指宿式土器	深鉢	口縁部	7.5YR5/3	7.5R5/3	2.5YR4/2	微砂粒を若干含む 小礫を微量含む	カ・白	ナデ	ナデ			A1709	33
T17	指宿式土器	深鉢	口縁部	7.5R5/3	2.5YR6/2	7.5YR6/1	砂粒を多く含む 小礫を含む	カ・セ・白	条痕・ナデ	条痕・ナデ	口唇：ヨコナデ		掛箱A1709	32
T18	指宿式土器	深鉢	口縁部	2.5YR5/2 7.5YR6/2	2.5YR5/3 5YR5/2	7.5YR5/1	砂粒を多く含む 小礫を若干含む	カ・セ・白	ナデ	ナデ		内外面マメツ	A	32
T19	指宿式土器	深鉢	口縁部	2.5YR5/2	2.5YR5/3	5R4/1	砂粒を若干含む	カ・セ・白	荒いナデ	荒いナデ	口唇：ヨコナデ			32
T20	指宿式土器	深鉢	口縁部	2.5YR5/1 10YR5/1	2.5YR 5/2 5/2.7.5R5/1	10R5/2	微砂粒を若干含む	カ・セ・白	ナデ	ナデ			A1869	31
T21	指宿式土器	深鉢	口縁部	5YR5/1	5YR6/2	5YR5/1	小砂粒を含む 小礫をわずかに含む	カ・セ・白	ナデ	ナデ	口唇：ヨコナデ		A1869	31
T22	指宿式土器	深鉢	口縁部	10R5/3	10R5/4	2.5YR5/2	砂粒を含む	カ・セ・白	ナデ	ナデ	口唇：ヨコナデ		A1709	32
T23	指宿式土器	深鉢	口縁部	2.5YR5/2	5YR5/1	10R4/1	砂粒を含む 小礫を微量含む	カ・セ・白	ナデ	ナデ	口唇：ヨコナデ		A1709	32
T24	指宿式土器	深鉢	口縁部	5YR5/1	10R5/3	2.5YR5/2	砂粒を含む 小礫を微量含む	カ・セ・白	ナデ	ナデ	口唇：ヨコナデ	外面マメツ	A1709	32
T25	指宿式土器	深鉢	口縁部	2.5YR5/2	2.5YR5/2 5YR6/2	2.5YR5/1	砂粒を含む	カ・セ・白・褐	ナデ	ナデ	口唇：ヨコナデ		A1869	33
T26	指宿式土器?	深鉢	口縁部	10R5/3	10R5/3	7.5R5/2	砂粒を多く含む	カ・セ・白	荒いナデ	ナデ	口唇：ヨコナデ		A1869	34
T27	指宿式土器	深鉢	口縁部	10R5/2	10R5/3	10R5/2	微砂粒を含む	カ・セ・白	荒いナデ	荒いナデ	口唇：ヨコナデ		A1869	31
T28	指宿式土器	深鉢	口縁部	10R5/3	q	2.5YR5/3	砂粒を含む	カ・セ・白	荒いナデ	荒いナデ	口唇：ヨコナデ		A1869	31
T29	指宿式土器	深鉢	口縁部	2.5YR6/3	2.5YR5/2	2.5YR5/2	微砂粒を含む	カ・セ・白	ナデ	ナデ	口唇：ヨコナデ		A1869	31
T30	指宿式土器	深鉢	口縁部	2.5YR 5/2	2.5YR 5/3	5YR5/1	砂粒を多く含む 小礫を微量含む	カ・白・褐	ナデ	ナデ	口唇：ヨコナデ		A1869	31
T31	指宿式土器	深鉢	口縁部	7.5YR6/2	5YR6/2	7.5YR5/1	砂粒を若干含む	カ・セ・白	ナデ	ナデ	口唇：ヨコナデ		A1869	31
T32	指宿式土器	深鉢	口縁部	7.5YR5/3	2.5YR5/2	10R5/2	砂粒を若干含む	カ・セ・白	ナデ	ナデ	口唇：ヨコナデ		A1709	32
T33	指宿式土器	深鉢	口縁部	10R5/3	2.5YR5/2	5YR5/1	微砂粒を含む	カ・セ・白	ナデ	ナデ	口唇：ヨコナデ		A	31
T34	指宿式土器	深鉢	胴部	7.5YR6/2	10R6/3	7.5YR5/1	砂粒を含む 小礫を微量含む	カ・セ・白	ナデ	ナデ			A1869	33
T35	指宿式土器	深鉢	口縁部	7.5R5/3	2.5YR6/3	7.5YR5/3	微砂粒を若干含む	カ・セ・白・褐	ナデ	ナデ (一部ケズリ状)			A	33
T36	指宿式土器	深鉢	口縁部	2.5YR 5/2	2.5YR5/2	2.5YR5/2	砂粒を含む 小礫を微量含む	カ・セ・白	荒いナデ	条痕	口唇：荒いナデ?		A1869	33
T37	指宿式土器	深鉢	口縁部	10R6/3	2.5YR5/2	7.5YR4/1	砂粒を含む 小礫を微量含む	カ・セ・白	ナデ	ナデ	口唇：ヨコナデ		A1869	31
T38	指宿式土器	深鉢	口縁部	5YR5/2	10YR5/1	10YR5/1	砂粒を含む	カ・セ・白	荒いナデ	荒いナデ	口唇：ヨコナデ		掛箱出地C1870	34
T39	指宿式土器	深鉢	口縁部	5YR5/2	5YR5/3	5YR5/2	砂粒を若干含む	カ・セ・白	ナデ	ナデ	口唇：ヨコナデ		掛箱出土C1870四	34
T40	指宿式土器	深鉢	口縁部	7.5YR5/2	2.5YR5/1	5YR4/2	砂粒を含む	カ・セ・白・褐	荒いナデ	ナデ	口唇：ヨコナデ		掛箱C1870	34
T41	指宿式土器	深鉢	口縁部	10R5/3 5YR5/2	7.5YR5/2	10YR4/1	砂粒を若干含む 小礫を微量含む	カ・セ・白	荒いナデ	ナデ	口唇：ヨコナデ		掛箱C1870	34
T42	指宿式土器	深鉢	口縁部	2.5YR5/2	5YR5/2	10YR4/1	砂粒を若干含む 小礫を微量含む	カ・白	ナデ	ナデ	口唇：ヨコナデ		A1709	32
T43	指宿式土器	深鉢	口縁部	5YR5/1	10R5/3	5YR5/2	砂粒を含む	カ・セ・白	ナデ	ナデ	口唇：ヨコナデ		A	33
T44	指宿式土器	深鉢	口縁部	10R5/2	2.5YR5/1	7.5R4/2	砂粒を含む	カ・セ・白	ナデ	ナデ	口唇：ヨコナデ	内外面マメツ		33
T45	指宿式土器	深鉢	口縁部	5YR5/2	2.5YR5/2	7.5YR5/1	微砂粒を微量含む	セ・白	ナデ	ナデ			掛箱C1870	34
T46	指宿式土器	深鉢	口縁-胴部	7.5R5/2	10R5/3	10R5/2	砂粒を含む 小礫を微量含む	カ・セ・白・褐	ナデ	条痕のちナデ	口唇：ヨコナデ		A1869	31 33
T47	指宿式土器	深鉢	口縁部	10YR6/1	7.5YR6/1	7.5YR5/1	砂粒を多く含む	カ・白	ナデ	ナデ	口唇：ヨコナデ		A1869	31
T48	指宿式土器	深鉢	口縁部	2.5YR5/2	5YR5/1	5YR5/1	砂粒を若干含む 小礫を微量含む	カ・セ・白	ナデ	ナデ	口唇：ヨコナデ		A1869	31
T49	指宿式土器	深鉢	口縁部	7.5R5/2	10R5/3	2.5YR5/2	砂粒を多く含む 小礫を微量含む	カ・セ・白	ナデ	ナデ	口唇：ヨコナデ		A	32
T50	指宿式土器?	深鉢	口縁部	10R5/3 2.5YR5/1	2.5YR5/3	2.5YR5/2	砂粒を多く含む 小礫を若干含む	カ・セ・白・褐	荒いナデ	荒いナデ	口唇：ヨコナデ			33
T51	指宿式土器	深鉢	口縁部	7.5R5/2	7.5R5/3	10Y6/2	微砂粒を含む	カ・セ・白・褐	ナデ	ナデ	口唇：ヨコナデ		A1869	31
T52	指宿式土器	深鉢	口縁部	10R5/3	2.5YR5/2	10R5/2	微砂粒を若干含む	カ・白	ナデ	ナデ	口唇：ヨコナデ		A1869	33
T53	指宿式土器	深鉢	口縁部	5YR5/2 10YR5/1	7.5YR5/1	7.5YR5/1	砂粒を若干含む	カ・セ・白	荒いナデ	荒いナデ	口唇：ヨコナデ		掛箱C1870	34
T54	指宿式土器	深鉢	胴部	5YR5/2	5YR5/2	2.5YR4/1	砂粒を若干含む	カ・セ・白	ナデ	ナデ	口唇：ヨコナデ		掛箱C1870	34

表2 大正時代出土遺物観察表①

№	種別	器種	部位	色外	色内	色肉	胎土粒	混和材	調整外	調整内	調整その他	その他	注記内容	京大報告図版	
T55	指宿式土器?	深鉢	胴部	25YR5/1・5YR5/1	7.5YR5/1・10YR5/1	7.5YR5/1・10YR5/1・5YR5/1	微砂粒を若干含む	カ・セ・白	ナデ	ナデ(一部ケズリ状)			擬似磨消縄文	掛宿C1870八・四	34
T56	指宿式土器?	深鉢	胴部	5YR6/2	N4/0	5YR5/2	砂粒を含む	セ・白・褐	ナデ	ナデ					33
T57	指宿式土器?	深鉢	胴部	10R5/2	7.5YR6/1	2.5YR5/1	微砂粒を若干含む 小礫を微量含む	セ・白	ナデ	ナデ			A1869		33
T58	指宿式土器?	深鉢	胴部	25YR5/1 10R5/2	10R5/3	5R4/1	砂粒を含む	カ・セ・白・褐	ナデ	条痕			A1869		33
T59	指宿式土器?	深鉢	胴部	10R5/3	7.5R5/3	2.5YR4/1	微砂粒を若干含む 小礫を微量含む	カ・セ・白	ナデ(ノ)	ナデ			A1869		33
T60	指宿式土器?	深鉢	胴部	10YR6/1	5YR6/2	7.5YR6/1	砂粒を含む	カ・セ・白	ナデ	ナデ					33
T61	指宿式土器?	深鉢	口縁部	5YR5/2	7.5YR5/1	5YR5/1	砂粒を含む	カ・セ・白・褐	ナデ	ナデ			A1709		33
T62	指宿式土器?	深鉢	胴部	25YR5/3 5YR5/1	5YR5/2 2.5YR5/2	2.5YR5/2	微砂粒を含む 小礫を微量含む	カ・セ・白	ナデ	ナデ・ケズリ			A		33
T63	指宿式土器?	深鉢?	胴部上半	5YR5/2	5YR5/2	5YR5/2	内外面マメツのため不明	カ・セ・白					内外面マメツ	掛宿C1870	34
T64	指宿式土器?	鉢?	把手	10R 5/3	2.5YR 5/2	2.5YR 5/2	砂粒を多く含む 小礫を若干含む	カ・セ・白	ナデ	ナデ			A1869		31
T65	指宿式土器?	深鉢?	胴部下半	7.5YR5/1	7.5YR5/2	10YR5/1	微砂粒を若干含む	カ・セ・白	荒いナデ	ナデ			掛宿C1870		34
T66	縄文土器	深鉢?	底部	7.5YR5/3	2.5YR5/1	10R6/3	砂粒を含む 小礫を微量含む	カ・白・褐	ナデ ユビオサエ	ナデ ユビオサエ			網代底	1709	33
T67	縄文土器	深鉢?	底部	2.5YR5/2	7.5R5/3	7.5R5/3	砂粒を含む 小礫を微量含む	カ・セ・白・褐	ナデ	ナデ	底面・ナデ		A1869		34
T68	阿高式土器	深鉢	胴部	7.5YR5/1	7.5YR6/2 10R5/1	N5/0	砂粒を若干含む	カ・白	ナデ	ナデ			A1709		33
T69	四線文系土器	深鉢	胴部	7.5YR6/2	10YR6/2	10YR6/2	微砂粒を含む	セ・白・褐	ナデ	ナデ			A1709		33
T70	四線文系土器	深鉢	胴部	5YR5/2 2.5YR5/3	7.5YR5/2	N4/0	砂粒を含む	カ・セ・白	ナデ	ナデ ユビナデ	口唇:ヨコナデ		掛宿C1870		34
T71	四線文系土器	深鉢	胴部	5YR5/1	5YR5/2	7.5YR5/1	砂粒を若干含む	カ・セ・白	ナデ	ナデ			A		33
T72	納骨式土器?	深鉢	口縁部	5YR5/2	7.5YR5/1	5YR5/1	砂粒を含む 小礫を微量含む	カ・セ・白	ナデ	ナデ	口唇:ヨコナデ		掛宿七・一 A		32
T73	草野式土器?	深鉢	口縁部	5YR5/1	10R5/2	5YR4/1	砂粒を若干含む 小礫を微量含む	カ・金・白・褐	条痕	条痕	口唇:ヨコナデ		1709		33
T74	小池原上層式? 雑々崎式?	深鉢	口縁部	5YR5/2	5YR5/3	10R4/1	砂粒を含む	金・白	ナデ	ナデ・条痕	口唇:ヨコナデ		掛宿七・一 A1709		32
T75	松山式土器	深鉢	口~胴部	5YR5/3 2.5YR4/1	7.5YR5/2	10YR5/2	砂粒を含む 小礫を微量含む	カ・セ・金・白	条痕のちナデ	条痕	口唇:ヨコナデ		A1869		34
T76	市来式土器	深鉢	口~胴部	5YR5/2	10R4/1	10YR5/1	微砂粒を含む 小礫を微量含む	セ・白	ナデ	ナデ	口唇:ヨコナデ		A1869		34
T77	市来式土器	深鉢	口縁部	2.5YR5/3	5YR5/2	10YR5/2	砂粒を含む	カ・白・褐	条痕	条痕	口唇:ヨコナデ		A1869		34
T78	松山式土器	深鉢	口縁部	5YR6/2	7.5YR5/2	5Y6/2	微砂粒を若干含む	白	ナデ	ナデ	口唇:ヨコナデ		B下層1868		29
T79	縄文土器	?	胴部	10R5/2	10R5/2	10YR5/1	砂粒を含む	白	ナデ	ナデ			掛宿B下層1868		29
T80	市来式土器	深鉢	口縁部	10R5/2	2.5YR5/3	7.5R5/2	微砂粒を若干含む	カ・セ・白	条痕・ナデ	条痕	口唇:ヨコナデ		掛宿出土(B地上層)八・四 1870		34
T81	市来式土器	深鉢	口~胴部	5YR5/1	2.5YR5/3	2.5YR5/1	砂粒を多く含む 小礫を微量含む	カ・金・白	条痕・ナデ	条痕	口唇:ヨコナデ		掛宿		34
T82	市来式土器	深鉢	口縁部	2.5YR5/2	5YR5/2	7.5YR5/3	微砂粒を若干含む	白	条痕のちナデ	条痕のちナデ	口唇:ヨコナデ		掛宿B下層1868		29
T83	市来式土器	深鉢	口縁部	7.5YR5/2	7.5YR5/2	7.5YR5/2	砂粒を含む 小礫を微量含む	カ・金・白	ナデ・条痕	ナデ	口唇:ヨコナデ		A1869		33
T84	市来式土器	深鉢	口縁部	7.5YR5/1	5YR5/2	7.5YR4/1	微砂粒を若干含む	金・白	ナデ	条痕のちナデ					34
T85	市来式土器?	深鉢	底部	2.5YR5/1	5YR5/1	5YR5/2	砂粒を多く含む 小礫を微量含む	カ・セ・金・白	ナデ	ナデ			A1869		34
T86	市来式土器	深鉢	口縁部	5YR5/1	7.5YR5/2	7.5YR5/1	砂粒を含む 小礫を微量含む	カ・金・白	条痕のちナデ	条痕のちナデ	口唇:ヨコナデ		掛宿B地下層1868		29
T87	縄文土器	深鉢	口縁部	2.5YR5/2	10R5/3	7.5R6/2	砂粒を含む	カ・白・褐	荒いナデ	ナデ	口唇:ヨコナデ		A1709		33
T88	磨消縄文系土器	深鉢	胴部	10YR6/2	10YR6/2	10YR5/1	微砂粒を微量含む	カ・セ・褐	ナデ	ナデ(一部ミガキ様)			擬似縄文	掛宿C1870	34
T89	縄文土器	?	底部	5YR5/3	7.5YR5/1	2.5YR5/2	砂粒を含む	セ・白	ナデ(0)	荒いナデ			C		34
T90	縄文土器	深鉢	胴部	2.5YR5/2 5YR5/1	10R5/3	10R5/2	砂粒を多く含む 小礫を微量含む	カ・セ・白	ナデ一部ミガキ様	ナデ			1709		33
T91	縄文土器	深鉢	胴部	5YR6/3	5YR5/2	10R4/1	砂粒を多く含む 小礫を微量含む	カ・金	ナデ	ナデ			内外面マメツ	1709	33
T92	縄文土器	?	胴部	10YR5/1	7.5YR6/1	10R4/1	微砂粒を若干含む	白	ナデ	ナデ			掛宿B地下層1868		29
T93	縄文土器	?	胴部	5YR5/2	10YR5/1	10YR5/2	砂粒を若干含む	カ・白	条痕のちナデ	条痕のちナデ			掛宿B地下層1868		29
T94	縄文土器	?	胴部	5YR5/1	7.5YR5/1	7.5YR5/1	内外面マメツのため不明	白		条痕			内外面マメツ	掛宿B下層1868	29
T95	縄文土器	?	胴部	5YR5/2	7.5YR5/2	7.5YR5/1	微砂粒を若干含む	セ・白	条痕	条痕			C1870		34
T96	縄文土器	?	胴部	5YR5/2	7.5YR5/2	10R4/1	内外面マメツのため不明						内外面マメツ	C1870	34
T97	縄文土器	?	胴部	7.5YR5/2	N4/0	N4/0	微砂粒を若干含む	セ・白	ナデ	荒いナデ			C1870		34
T98	縄文土器	?	底部	7.5YR5/3	10R5/3	10R5/2	砂粒を多く含む 小礫を微量含む	カ・白	条痕(0)	条痕(-)			A1709		33
T99	縄文土器	?	底部付近	5YR5/3	5YR5/2	2.5YR4/1	砂粒を若干含む	セ・白	ナデ	ナデ			C1870		34
T100	弥生土器	高橋式 壺	頸~胴部	5YR6/3・2.5YR5/4	5YR6/2	5YR6/3	砂粒を含む 小礫を若干含む	カ・白	ミガキ・光澤・ミガキ(マメツ)	工具ナデのちミガキ			赤色塗彩?	29	
T101	成川式土器	壺	口~胴部						ナデ・ナデ(ミガキ様)	ナデ(マメツ)部分的にミガキ様ナデ	突帯:ヨコナデ・工具おしびき				25
T102	成川式土器	小型丸底壺	胴~底部	7.5R5/3 10R4/3 2.5YR5/2	7.5YR4/1	7.5YR4/1	砂粒を微量含む	カ・白	ナデ・ナデ(ミガキ)・赤色輝層	ナデ・工具ナデのちナデ	底:ナデ		赤色塗彩		25
T103	成川式土器	ミニチュア土器	口~底部	7.5YR5/1 5YR5/2	7.5YR5/1	7.5YR5/1	砂粒を多く含む 小礫を微量含む	カ・セ・白	突帯はりつけ・工具ナデのちナデ	ナデ・ユビオサエ			中空脚台		25
T104	成川式土器	小型丸底壺	胴~底部	2.5YR6/3・7.5YR5/1	5YR5/1	2.5YR6/1	砂粒を含む	カ・セ・白	ナデ	工具ナデのちナデ・ナデ	底:ナデ		内外面マメツ	1704	25
T105	成川式土器	小型丸底壺	胴~底部	10R5/3	2.5YR4/1	2.5YR4/1	微砂粒を若干含む	カ・白	ミガキ	工具ナデ・ナデ			外面赤色塗彩	掛宿B1867	25
T106	成川式土器	高杯	杯部~脚部	10R4/1 7.5R5/3	2.5YR5/1 5YR5/1	10R4/1	砂粒を含む	カ・白	工具ナデのちナデ・ナデ・工具ナデのちナデ(横)	ナデ	脚台内:エグリ・工具ナデのちナデ		一部赤色塗彩?	サツマ掛宿1704	26
T107	成川式土器	高杯	杯部~脚部	7.5R5/3 10R4/6	7.5YR5/1	N4/0	砂粒を微量含む	カ・白	ミガキ・赤色塗彩	ナデ	脚台内:エグリ・工具ナデ		赤色塗彩	掛宿B地1867	26

表2 大正時代出土遺物観察表②



No	種別	器種	部位	色外	色内	色内	胎土粒	混和材	調整外	調整内	調整その他	その他	注記内容	京大報告図版
T108	成川式土器	高杯	脚部	10R4/3 10R4/6	10R4/1	7.5YR5/2	砂粒を若干含む	カ・白	ナデ(縦のち横方向ミガキ様ナデ・ミガキ(単位不明)・ミガキ	ミガキ様ナデ	脚台内:ナデ(縦)	赤色塗彩		26
T109	成川式土器	高杯	脚部	N4/0	7.5YR5/1	5Y4/1	微砂粒を若干含む	カ・白	ナデ・ミガキ様ナデ	ナデ	脚台内:ケズリ・工具ナデのちナデ	内外黒色塗彩		26
T110	成川式土器	高杯	脚部	2.5YR5/3 10R5/3	7.5YR5/1 N4/0	7.5YR5/1	砂粒を若干含む 小礫を微量含む	カ・白	ミガキ(縦)・ナデ(横)	—	脚台内:マメツ・ケズリ・ナデ・ナデ 脚端:ヨコナデ・ミガキ様・ナデ(ケズリ状)	赤色塗彩?		26
T111	成川式土器	高杯	脚部	7.5R4/3	2.5YR6/3	7.5R5/2	砂粒を含む	カ・白	ミガキ	—	脚台内:エグリ・ナデ・工具ナデのちナデ	外面赤色塗彩	掛宿大六B1867	26
T112	成川式土器	高杯	脚部	5YR6/3	7.5YR6/3	5YR6/2	微砂粒を若干含む	カ・白・褐	ナデのちミガキ赤色塗彩	—	脚台内:工具によるエグリのちナデ・ヨコナデ	一部赤色塗彩?	サツマ下里1704	26
T113	成川式土器	高杯	脚部	10YR5/3	7.5YR5/3	7.5R5/2	砂粒を含む	カ・セ・白	縦方向のナデ・ヨコナデ	マメツのため不明	脚台内:工具ケズリのちナデ・ヨコナデ		サツマ下里1704	26
T114	成川式土器	高杯	脚部	2.5YR5/2	7.5YR5/1	5YR5/3	砂粒を含む	カ・セ・白	工具ナデのちナデ	ナデ	脚台内:エグリのちナデ・ナデ		掛宿B1867	26
T115	成川式土器	高杯	脚部	7.5R5/3 7.5YR5/1	7.5YR5/1	7.5R5/2	砂粒を若干含む 小礫を微量含む	カ・白	ナデのち一部ミガキ様	—	脚台内:ナデ・工具によるエグリのちナデ 脚端:ナデ	外面受熱あり灰色に変色	掛宿B地1867	26
T116	成川式土器	甕	胴~脚部	5YR5/1 7.5YR5/2 2.5YR6/3	10R5/3	7.5R5/2	砂粒を多く含む 小礫を微量含む	カ・セ・白	ナデのちミガキ・工具ナデ	ナデのちミガキ	脚台内:ミガキ・工具ナデのちナデ・ナデ 脚端:ナデ		1867B	27
T117	成川式土器	壺	底部	10YR6/2	10R6/3 10R5/2	10R5/1	砂粒を多く含む 小礫を微量含む	カ・褐	工具ナデ・ミガキ様	ミガキ様	底:マメツ		1867B	27
T118	成川式土器	甕	脚部	10R5/2	10R4/1 N4/0	2.5YR5/1	砂粒を含む 小礫を微量含む	カ・セ・白	ナデ・ミガキ様・突帯・ナデ	ミガキ様ナデ・工具ナデのちナデ	脚台内:ミガキ様ナデ 脚端:ナデ	脚接合部に突帯	1867B	27
T119	成川式土器	甕	脚部	10R6/2 10R5/3	5YR6/2 10R5/2	10R5/3	砂粒を多く含む	カ・白	マメツ	工具痕?	脚台内:接合痕		Ibusaki1704	27
T120	成川式土器	甕	脚部	10YR6/2	7.5YR6/2	10R6/2	砂粒を多く含む	カ・セ	タテミガキ様ナデ・タテ工具ナデ	ナデ	脚台内:ナデ(横)	焼成不良	掛宿1867(B)	27
T121	成川式土器	甕	脚部	10R6/3 2.5YR6/3	10R5/2	2.5YR5/2	砂粒を含む 小礫を微量含む	カ・白	工具ナデのちナデ	コケツグのため? 黒変	脚台内:工具のちナデ			27
T122	成川式土器	甕	脚部	5YR6/3	7.5YR5/2 10R5/1	2.5Y5/1	砂粒を含む 小礫を微量含む	カ・セ・白・褐	ミガキ・接合痕・マメツ	ミガキ	脚台内:ミガキ様ナデ		1704	27
T123	成川式土器	甕	脚部	2.5YR6/1	5YR6/2	10R5/2	砂粒を含む	カ・白	マメツ	マメツ	脚内:マメツ		1704	27
T124	成川式土器	甕	脚部	2.5YR5/2 5YR5/1	2.5YR5/2	7.5R5/2	砂粒を含む 小礫を若干含む	カ・セ・白	反転復元	ユビオサエ			1704	27
T125	成川式土器	壺	底部	5YR5/2 7.5YR6/2	5YR5/1	N4/0	砂粒を含む	カ・セ・白・褐	ミガキ様ナデ・ミガキ	工具ナデ			1704	27
T126	成川式土器	壺	底部	7.5YR6/1 N5/0	10R5/3 7.5R5/2	7.5YR5/1	砂粒を含む	カ・白・褐	ナデ	ナデ一部ミガキ様				27
T127	成川式土器	壺	底部	10R6/3	10R6/3	7.5YR6/2	砂粒を多く含む	カ・セ・白	ミガキ様ナデ	ナデ	しほり痕		1704	27
T128	成川式土器	幅広突帯壺	突帯部	2.5YR5/2	10R6/3	2.5YR6/2	砂粒を若干含む 小礫を微量含む	カ・セ・白	ナデ(ミガキ様の部分あり)	工具ナデのちナデ	突帯:突帯刻みに布圧痕		1867B	28
T129	成川式土器	甕	口~脚部	10R6/2	2.5YR5/2	2.5YR5/1	砂粒を含む	カ・白	ツヨイヨコミガキ・ヨコミガキ	単位不明? 丁寧なミガキ	突帯:○字刻み	外面マメツ撒しい	1867B	28
T130	成川式土器	幅広突帯壺	突帯部	2.5YR5/2	10R6/3	10R6/3	砂粒を多く含む 小礫を微量含む	カ・白	ナデ(横)	ミガキ様ナデ			掛宿B地1867	28
T131	成川式土器	幅広突帯壺	突帯部(胴)	7.5YR5/1 N4/0	10R5/2	7.5R5/2	砂粒を多く含む 小礫を微量含む	カ・白	黒色研磨	マメツ			掛宿B地1867	28
T132	成川式土器	幅広突帯壺	突帯部(肩)	2.5YR6/3	7.5R5/3	10R5/2	砂粒を多く含む 小礫を微量含む	カ・白	工具ナデのちナデ・ミガキ様ナデ	マメツ		傾きキモン	掛宿B地1867	28
T133	成川式土器	甕	口~脚部	2.5YR5/1	7.5YR5/1	7.5Y4/1	砂粒を含む	カ・白	ナデ	斜位ナデ		内外面マメツ	1867B	28
T134	成川式土器	甕	口~脚部	2.5YR6/2	7.5R5/3	10R4/1	砂粒を若干含む 小礫を若干含む	カ・セ・白	ナデ	マメツ調整不良	口唇:ヨコナデ		1867B	28
T135	成川式土器	幅広突帯壺	突帯部	7.5YR5/6/2	7.5YR5/1	10R5/1	砂粒を若干含む 小礫を若干含む	カ・セ・白	ヨコナデ・横位ナデ一部ミガキ様	マメツ調整不明			1867B	28
T136	成川式土器	幅広突帯壺	突帯部	10R5/2	2.5YR5/2	10R5/2	砂粒を若干含む	カ・白	ミガキ様ナデ	ミガキ様ナデ	突帯:刻み目内に布圧痕	傾きキモン	掛宿B地1867	28
T137	成川式土器	甕	口~脚部	7.5R5/2	10R6/3 2.5YR6/2	7.5YR4/3	砂粒を含む	カ・セ・白	ナデ・ナデ一部ミガキ様	横位ナデ一部ミガキ様	口唇:ヨコナデ		1867B	28
T138	成川式土器	甕	脚部	2.5YR6/2	10R6/2	7.5YR5/1	砂粒を含む	カ・白	ナデ(横)・ナデ(縦)	ナデ	突帯:ナデ(横位)		掛宿B地1867	28
T139	成川式土器	幅広突帯壺	突帯部	N5/0	5YR6/2	10R5/2	砂粒を含む	カ・セ・白	工具ナデのちミガキ様ナデ	ミガキ様ナデ・工具ナデのちナデ	突帯:突帯刻みに布圧痕(12cm/cm)		サツマ下里1704	28
T140	成川式土器	甕	口~突帯部	10R6/2	10R6/3	7.5R6/2	砂粒を多く含む	カ・白	ミガキorヨコナデ・ヨコミガキorナデ	ユビナデ整形後ヨコミガキ	突帯:ヨコナデ	外面マメツ撒しい	1764	28
T141	成川式土器	幅広突帯壺	突帯部	7.5YR5/1	10R6/3	10YR4/6	砂粒を多く含む	カ・セ・白	ナデ	ミガキ様ナデ		傾きキモン		28
T142	成川式土器	幅広突帯壺	突帯部	10YR6/2	7.5R6/2	7.5R6/2	砂粒を多く含む	カ・セ・白・褐	マメツ調整不明・ナデ(横)	マメツ調整不明				28
T143	弥生土器?	?	口縁部	7.5YR6/2	5YR5/2	2.5YR5/1	微砂粒を若干含む 小礫を若干含む	カ・セ・白・褐	ナデ	ナデ	口唇:ヨコナデ	口唇部施文	1704	28
T144	成川式土器	甕	口~突帯部	5YR7/2	5YR7/2	7.5YR6/1	砂粒を多く含む	カ	ナデ(ミガキ様)・ナデ	工具ナデのちナデ	口唇:ヨコナデ・突帯刻みに布圧痕	傾きキモン	1704?	28
T145	成川式土器	甕	口~脚部	7.5YR8/2 10R6/3	5YR7/2	7.5YR6/1	砂粒を多く含む	カ・セ・白・褐	ナデ(1cmに14-15本)	工具ナデのちナデ	口唇:ヨコナデ・突帯刻みに布圧痕	傾きキモン		28
T146	成川式土器	甕	口~脚部	7.5YR6/1 2.5YR6/2	7.5YR6/1 2.5YR6/3	2.5YR4/1	砂粒を多く含む	カ・白	工具ナデのちナデ	ナデ(一部ミガキ様)	口唇:ヨコナデ・突帯刻みに布圧痕		1704	28
T147	成川式土器	幅広突帯壺	突帯部	2.5YR6/1	2.5YR6/3	7.5YR5/2	砂粒を多く含む	カ・白	工具ナデのちナデ	一部マメツ・工具ナデのちナデ		傾きキモン	1704	28
T148	成川式土器	壺?	胴部?	5YR6/2	10R6/3	5R5/1	砂粒を多く含む	カ・セ・白・褐	ナデ	ナデ	突帯:押し引き沈線文のちキザミ目	内外面マメツ		28
T149	成川式土器	甕	口縁部~突帯部	7.5YR7/1	2.5YR5/1 N5/0	7.5YR5/1	砂粒を含む	カ・セ・白・褐	斜位ミガキ様ナデ	ナデ(マメツ)	口唇:ヨコナデ 突帯:ナデ		1704	28
T150	成川式土器	甕	口~突帯部	2.5YR6/1 10R6/3	5YR6/2	7.5YR5/1	砂粒を含む	カ・白	ナデ・工具のちナデ	ナデ	口唇:ヨコナデ		1704	28
T151	成川式土器	壺	口~肩部	7.5R5/2	7.5YR4/1 2.5YR5/2	2.5Y5/1	砂粒を多く含む 小礫を微量含む	カ・セ・白・褐	マメツ(調整不明)・ミガキ様ナデ(横位のち斜位)	マメツミガキ様ナデ?・ケズリ・ミガキ様ナデ			掛宿B地1867	
T152	成川式土器	壺	口縁部	2.5YR5/2 10R6/2	2.5Y5/1	7.5YR5/2	砂粒を多く含む	カ・白・褐	反転復元・布目	ミガキ様ナデ	口唇:ヨコナデ		1704	29
T153	成川式土器	壺	口~肩部	7.5R5/3 10R5/3	7.5R5/2	7.5R5/2	砂粒を多く含む 小礫を若干含む	カ・セ・白・褐	ナデ・ミガキ様・工具ナデのちナデ・マメツ	マメツ ナデ・工具ナデのちナデ	突帯赤色塗彩	外面赤色塗彩	掛宿B地1867	29
T154	成川式土器	壺		2.5YR6/2 7.5R5/2	7.5R5/2 7.5YR6/1	7.5YR5/1	砂粒を含む 小礫を微量含む	カ・セ・白	ミガキ	ミガキ	口唇:ナデ			29
T155	須恵器	大甕	口縁部	N5/0	N5/0	N5/0	砂粒を若干含む		工具によるキザミ沈線					29
T156	須恵器	大甕?	胴部	7.5YR5/1	7.5YR5/1	N4/0	微砂粒を若干含む		タタキのち回転口クロ文様					29
T157	須恵器	杯蓋	口縁部	10YR5/1	10R5/1	N4/0	砂粒を若干含む		ツマミ宝珠とれ口クロナデ	口クロナデ			1867B	29
T158	須恵器	杯身	杯部	N5/0 N6/0	N6/0	10G4/1	微砂粒を微量含む 小礫を微量含む		口クロナデ・ヘラオコシ	口クロナデ			掛宿B地1867	29
T159	須恵器	杯身	杯部	N5/0 7.5YR5/1	7.5YR5/1	7.5YR5/1	微砂粒を若干含む		回転ナデ	回転ナデ			1867B	29

表2 大正時代出土遺物観察表③



No.	種別	器種	部位	色外	色内	色肉	胎土粒	混和材	調整外	調整内	調整その他	その他	注記内容	京大報告図版
T160	成川式土器	篋貫式 甕	口~胴部	25YR6/2 5R5/1	5YR6/2	10R5/1	砂粒を若干含む	カ・白	ヨコミガキ・横方向ミガキ・炭化ホーススス付着	横方向ミガキ	突帯:無刺紙		1704	30
T161	成川式土器	篋貫式 甕	口~胴部	5YR5/2 7.5R5/1	7.5YR6/1	2.5YR5/1	砂粒を含む	カ・セ・白	ミガキ	ユビナデ・ミガキ	突帯:棒状工具△刻み		1704	30
T162	成川式土器	甕	突帯部	2.5YR6/3	10R5/1	5R4/1	砂粒を若干含む	カ・セ・白	ナデ	ナデ	突帯:センイ幅2mm程度			30
T163	成川式土器	篋貫式 甕	口~胴部	2.5YR6/1	7.5YR5/1	7.5YR5/1	砂粒を含む	カ・白	ナデ・工具ナデのちナデ	工具ナデのちナデ	口唇:ヨコナデ			30
T164	成川式土器	篋貫式 甕	口縁部	2.5YR6/2	5YR6/2	7.5YR6/2	砂粒を多く含む 小礫を微量含む	カ・白	ナデ(ミガキ様)ナデ	ナデ	口唇:ヨコナデ	傾きギモン	1704	30
T165	成川式土器	甕	口縁部	2.5YR5/2	7.5YR6/2	5YR5/2	砂粒を若干含む	カ・セ	ナデ・縦方向のナデ(ミガキ様)	ナデ(ミガキ様)	口唇:ヨコナデ	傾きギモン	1704	30
T166	成川式土器	篋貫式 甕	口~胴部	2.5YR6/2 10R5/1	5YR6/2 5YR5/1	7.5YR5/1	砂粒を含む	カ・白	ヨコナデ・ミガキ様ナデ	ナデ(一部ミガキ様)	口唇:ヨコナデ		1704	30
T167	成川式土器	甕	口~胴部	10YR6/2 10R6/4	10R6/4	7.5R5/2	砂粒を含む	カ・セ・白	ナデ(ミガキ様)工具ナデのちナデ	工具ナデのちナデ	口唇:ヨコナデ	傾きギモン	1704	30
T168	成川式土器	篋貫式 甕	口縁部	5YR5/2 10R5/3	2.5YR5/2	7.5YR5/2	砂粒を含む	カ・白	ヨコミガキ	ヨコミガキ	口唇:内からナデアゲやメシ取り 突帯:無刺		1704	30
T169	成川式土器	甕	口縁部	10R5/3	10R6/3	10R5/2	砂粒を含む	カ・白	ヨコミガキ	横方向ミガキ	突帯:小○字様キザミ			30
T170	成川式土器	甕	口縁部	10R6/3	2.5YR6/3	7.5R5/2	砂粒を含む	カ・白	ミガキ様ナデ	ミガキ様ナデ	口唇:ヨコナデ		1704	30
T171	成川式土器	篋貫式 甕	口~胴部	2.5YR5/2	10R5/3	10R4/1	砂粒を含む	カ・白	ナデ	ナデ	口唇:ヨコナデ	傾きギモン	1704	30
T172	成川式土器	篋貫式 甕	突帯部	2.5YR6/2	10R6/3	10R5/2	砂粒を含む	カ・セ・白	ナデ	ナデ		内外面マツ 傾きギモン	1704	30
T173	成川式土器	甕	突帯部	5YR6/2	2.5YR6/2	5R5/1	砂粒を多く含む 小礫を微量含む	カ・白	ミガキ様ナデ・工具ナデのちナデ	工具ナデのちナデ	突帯:工具によるミガキ様ナデ	傾きギモン	1704	30

No.	種別	器種	石材	長さ	幅	厚さ	備考	出土層序	京大報告図版
T174	石器	打製石斧	頁岩	17.2	7.7	1.8	刃部の左右と凹部付近に使用痕と見られる摩滅箇所	上層	30
T175	石器	打製石斧	頁岩	残8.4	6.7	1.9	刃部欠損	上層	30
T176	石器	凹石	安山岩	11.0	10.0	4.2	凹部2箇所、側面に敲打痕	上層	30
T177	石器	凹石	安山岩	11.4	10.9	6.5	凹部2箇所、側面に敲打痕	上層	30
T178	石器	凹石	安山岩	11.8	8.5	6.4	凹部2箇所、側面に敲打痕	上層	30
T179	石器	軽石加工品	軽石	4.7	5.0	4.4	部分的に擦痕あり	上層	30

表2 大正時代出土遺物観察表④

T162は壺形土器の突帯部破片である。突帯にキザミが施される。キザミ内部に繊維状圧痕が残る。

T163は口縁部が内湾する甕形土器である。胴部上半に断面台形の一条突帯が巡る。キザミは間隔を置いて施される。

T164は口縁部端部が内湾する甕形土器である。胴部上半に断面台形の一条突帯が巡る。キザミは施されない。外面にナデが施されミガキ様になる。

T165は口縁部が直立する甕形土器である。胴部上半にキザミのない一条突帯が巡る。外面で突帯下部にナデが施されミガキ様になる。内面も同様である。

T166は口縁部がやや内湾する甕形土器である。口縁下部にキザミのない一条突帯が巡る。内外面ともナデが施されミガキ様になる。

T167は口縁部が直立する甕形土器である。口縁下部にキザミのない一条突帯が巡る。

T168は復元口径26.2cmを測る。口縁部はやや内湾する甕形土器である。口縁下部にキザミのない一条突帯が巡る。内外面にミガキが施される。

T169は復元口径24.1cmを測る。口縁部はやや内湾する甕形土器である。口縁下部に一条突帯が巡る。突帯の稜線に刺突状の浅いキザミが施される。内外面にミガキが施される。

T170は壺形土器口縁部破片である。口縁部は緩やかに外反する。内外面はナデが施されミガキ様になる。

T171は口縁部が直立する甕形土器である。口縁下部にキザミのない一条突帯が巡る。

T172は口縁部がやや内湾する甕形土器である。口縁下部に一条突帯が巡り、棒状工具による刺突状のキザミが1カ所施される。

T173は甕形土器突帯部分の破片である。一条突帯にキザミは施されない。突帯上部がミガキ様となる。

(文献)

指宿市教育委員会 1999 『敷遺跡Ⅱ・弥次ヶ湯古墳』指宿市埋蔵文化財発掘調査報告書(31)

### ③ 上層出土石器(第25図～第27図/図版8)

石器は、京大報告に6点掲載されている。石斧2点、凹石3点、軽石加工品1点である。

#### i 石斧(第25図)

T174はE地点出土。上層の「弥生式土器」(成川式土器)とともに出土した。基部はくびれる。片面に主要剥離面が大きく残される。また、刃部の左右と凹部付近に使用痕と見られる摩滅箇所が見られる。石材は頁岩と考えられる。T175は、遺跡内での採集資料とされる。基部にくびれがあり、刃部は側面からの加撃により欠損している。片面に主要剥離面が大きく残される。石材は頁岩と考えられる。

T174とT175は同一石材であり、T175は、母岩からT174の素材剥片を取った際の大型剥片を利用して製作した可能性がある。

#### ii 凹石(第26図)

凹石のうち1点はB地点において上層土器(成川式土器)とともに出土した。京大報告にはどの1点がB地点出土か明記されていない。

T176は、両面に稿打による凹部を有する。右側面に稿打の集中部分があり使用痕跡と見られる。T177は、両面に稿打による凹部を有する。右側面と上側面に稿打の集中部分があり使用痕跡と見られる。T178は、形状が長楕円形である。両面に稿打による凹部を有し、上下面に稿打の集中部分があり使用痕跡と見られる。いずれも石材は安山岩である。

#### iii 軽石製加工品(第26図)

T179は京大報告で「圓石」として報告されている資料であり、部分的に加工痕とみられる削痕が残っていることから、軽石製加工品と考えられる。遺跡地内の採集品である。

### 第3項 遺構

#### ①貝塚

橋牟礼川北岸のG地点において、泥流磐(5層紫コラ火山灰層とみられる)の下において、貝殻の集積が発見されている。黒田徳米の鑑定で貝種は以下の15種とされる。

ニシキウズ・イシダタミ・ヒメクボガイ・アマオブネ・ウミニナ・マガキガイ・テングニシ・バイ・イボニシ・エガイ・カキ・カガミガイ・オキシジミ・ハマグリ・アサリ。

濱田は、この貝塚に関して、層位からみて上層土器と同じ時代であり、当時の人類が遺棄したものと認めることができている。

G地点に関しては、調査位置図に示されていないことから地点は定かではないが、橋牟礼川北岸においては昭和57年の史跡整備事業に伴う確認調査3トレンチで、古墳時代の貝塚が確認されており(第53図)、関連性を考慮しておきたい。

#### ②土器集中廃棄所

橋牟礼川南岸のB地点において検出した、土器集中廃棄所と考えられる遺構に関する報告がある。それによると、橋牟礼川の南岸の崩落により新しい層位断面が露出したが、その部分で顕著な土器包含層或いは土器の「デポット」を露出した。デポットは5層紫コラ火山灰層とみられる火山灰層の下位の、川底に至る黒褐色火山灰層の上面から約90cmの間に土器が密集している状態で見られた。デポットを構成するのは素焼紅褐色の土器であり、特に土器底部と高杯脚部が多い。まれに完形に近いものがあるが、多数は破片の状態である。丹塗りの土器も少なくともあり、幾何学文様を施したものも時にはある。大半が素焼の土器であり、「弥生式土器」の系統に属するもの(成川式土器)とされた。

このように、土器が集中していることについて濱田は故意によるものと考えている。さらに、祝部式土器がごく少量混ざっていることについても注意を促している。この土器集中廃棄所は、古墳時代に帰属するものと考えられる。

### 第4項 調査成果

#### ①縄文土器と弥生土器の層位学的上下関係の実証

大正時代の調査成果の一つ目は、縄文土器と弥生土器との層位学的上下関係の実証である。

濱田は、B地点において、厚さ約3尺(約90cm)の黒褐色火山灰層中に土器が密集して出土し、これが多量の「弥生式土器の系統に属する土器」(成川式土器)と少量の祝部式土器であるとした。さらに、その下位に厚さ約4尺(約1.2m)の



黒褐色火山灰層を挟み、地表下10尺(約3m)で少量の曲線的文様の「貝塚式土器」(縄文土器)が出土することから、「此の地点において、我々は上層下層相異なった土器が存在する事実を肯定することを得た」とした。そして、各地点の調査結果をまとめて、「上層即ち地下約4・5尺のところには弥生式土器が少許の祝部式土器を交えて存在し、(中略)下層即ち地層約10尺の所あたりに、貝塚式曲線模様の土器が発見せらるる事実は疑う可ざることである」としている。濱田は、「貝塚式土器を残した石器時代人民は、(中略)(火山噴火により)全滅に帰したと想像せらる。(中略)此の悲惨な記憶の消え去った後ち、(中略)新たに石器時代の人民は此所に移住し(中略)、生活は再現せられた。此の新しい石器時代の人民の残した遺物は即ち弥生式系統の土器である」と縄文土器と弥生土器の年代的新旧関係を説明している。

なお、橋牟礼川遺跡における調査に関しては、後年発刊した『通論考古学』の「層位学的方法」の項において扱われている。この中では、「薩摩指宿の先史遺跡に在りては、火山噴出物の堆積約15尺間に於いて、少なくとも四箇の層位を分つ可く、上より第3層中より彌生式土器祝部式土器石器を見、第4層の下には縄紋式土器を発見せり。又た上下兩層に於いて遺物を存せざる地点に在りても、相當する層位に於いて各別種の土器を包有する関係は、前記の場合に相同じきを3、4ヶ所において認めにり」としている。

## ②火山災害遺跡－文献記録の引用－

調査成果の二つ目は、濱田が橋牟礼川遺跡における火山灰層を文献記録と対比した点である。

京大報告では「泥流磐の上に形成せられた火山灰の層は、更に此の時以降に於ける噴火によって出来たものと想像せられる。三代実録に見えた彼の貞観16年に於ける開聞岳の噴火による降灰其者によって、此の層の全部が出来たもので無いにしても、その幾分かは、疑いも無く此の歴史以降の火山作用によって加えられたものと見なければならぬ。」と述べている。

現在の知見からは、上記の「泥流磐」は紫コラ火山灰層に対比でき、濱田が日本三代実録の記載と対比したのは、「泥流磐」の上位層(中世黒色土層と考えられる)であるため、現在の知見とは異なっている。しかしながら、橋牟礼川遺跡に堆積する火山灰層が貞観16年の噴火と関連することが最初に指摘されたのが1921年であることを考慮すると、濱田の指摘は極めて重要である。その後の調査において、火山灰を用いた分層発掘が実施されたこと、そして、火山災害遺跡という視点がもたらされたことが、濱田の指摘に拠っているからである。

## ③大正時代出土の指宿式土器について

濱田耕作は、大正7・8年の出土遺物のうち下層から出土する土器について、器形を『全部小さい破片であるから、これを明らかにすることが出来ない』としながらも、『口部の大きく開いた単純な壺類が最大多数を占め』、口縁部形態については『或者是太い凸帯を繞らし、或者是角張って尖り、或者是更に大きな突角形を呈し、またその突角の上に切目を施]すが、『これらは貝塚式土器に多く見られる所の特徴である』とした。底部形態については『土器の底部は1、2箇発見せられているが、単純な平底』としている。一方、文様に関しては、『多くは曲線文を付している。すなわち、二條の平行線を以て、紐繩を迂曲した様に、あるいは口縁に沿ふて、稍々直線的に適用し、或いは卷鬚的に各部分に適用してある』と、文様のヴァリエーションについて説明している。さらに、『二箇の平行曲線間に一種の席紋を押ししたもの』として磨消縄文系の文様に関しても触れている。実際には、この資料(第12図T55)の文様は縄文ではなく貝殻刺突文であるが、磨消縄文系に属する土器である。

指宿式土器の型式設定を行った寺師見國は、「形は深鉢形で、口縁に比較的大きな山形隆起のあるのも特徴で、文様は多くは二平行凹線を以て曲線文様を描いており、文様帯は頸部に限らず胴部に迄及んで居る。口縁部裏側にも文様を描いていることが特徴である。凹線は阿高式に類似しているが、阿高式より太くない、底部は平底である」とした(寺師 1950)。寺師は、指宿式のヴァリエーション豊富な文様モチーフから曲線文を抽出し、指宿式土器の型式設定を行っている。

これに対して河口貞徳氏は、木ヶ暮遺跡上層出土の指宿式土器について、『二條の平行線文土器に、曲線文と直線文の二種類があるが、層位学的には上下関係が認められ]ず、『文様要素は二者共通であり、又土器外面には直線文を施し、裏面には曲線文が施されており、器形においても両者は一致している等、二つの異なる形式の土器として分離することは不可能]であるとして、『直線土器と、曲線土器とは一形式とみるのが適当であって、両者は共に指宿式土器と見るべきではないか』とし(河口 1953)、指宿式土器に関して、直線文も含めることで、型式概念の拡大を図っている。



水ノ江和同氏によると、この頃から指宿式が2本の平行線で文様が構成される一群であるという認識が主流となり、そのヴァリエーションが、標識資料よりかなり増えていったとされている(水ノ江 1993)。

松永幸男氏は指宿式土器の細分類を試み、属性変異の提示と系統的整理を行った。この中で、胴部外面の文様を21類型、口縁部形態を3類型21亜類型に分け、各変異の同一個体内共伴関係をもとに、両属性変異の指宿式土器様式内における在り方を検討している。具体的には、胴部外面の文様と口縁部形態に関して、個別に岩崎式(岩崎上層式・下層式)や阿高式といった先行する在来系土器型式と、磨消縄文や縁帯文土器といった外来系土器型式との二者に大別し、これらの同一個体内共伴関係を検討したものである。この結果、松永氏は、「指宿式土器には異系統の土器要素が存在することが認められるが、これらの様相からなる土器相互間に系統を異にする土器としての明確な線引きを行うことは出来ない」とし、指宿式を構成する土器群のありかたを、「相互に全く共通する要素を持たない在来形の属性のみからなる土器と伝来系の属性のみからなる土器とを両極として、両者間にこれらの中間的様相を呈する土器が、両系統の属性の比率を漸移的に変えながら存在する土器群」とし、指宿式土器においては「このようなポリセティックな在り方が非常に典型的な形で現れている」とした(松永 1989)。

水ノ江氏は、指宿式土器の成立に関して、中原遺跡のⅣA類に注目し、宿毛式を除いた中原ⅣA類を介して宿毛式土器から最古段階の指宿式土器「中原Ⅳ類・春日町タイプ」が成立するとしている。この中で水ノ江氏は、成川遺跡出土資料を標識とする「成川タイプ」として、「2本単位の平行入組文や所謂靴形文が施される」一群について、阿高式系の変遷上に位置づけ、「指宿式とは別個のものとして扱わなければならない」としている(水ノ江 1993)。

黒川忠広氏は、指宿式土器における鉢形土器の成立の背景に関して論考する中で、指宿式段階では前段階の岩崎式系土器にはあまり見られない器形が認められるとした。すなわち、深鉢形で最大径が胴部上位にくるものと、胴部が球状に膨らみ最大径がこの胴部にくる器高が低い鉢形に近い器形である。後者は磨消縄文土器の器形情報の伝達によるものとしている。なお、黒川氏は成川タイプの設定について肯首しながらも、これらを包括し「広義の指宿式」という表現を用いている(黒川 2009)。

指宿式土器に関する研究では、指宿式土器の成立が、基本的には在来系土器型式に対して、外来系の磨消縄文土器の影響が強く及ぼされた結果なされたものであるという点では共通している。今回、標識遺跡の下層土器を整理し、在来系属性と外来系属性が出土遺物の中にどのように現れているのかという観点から考察を行った。

指宿式と磨消縄文系との関係について、磨消縄文系土器から影響を受けたとされる外来系属性は下記の2点である。

- 1 鉢形器形(器形C) : 黒川氏は磨消縄文土器系統の属性とする
- 2 二平行曲線文(文様モチーフ「あ」) : 水ノ江氏は磨消縄文土器系統の属性とする

一方、下層土器にみられる以下の属性は、在来系土器からの属性とされる。

- 1 直立タイプの器形(器形B) : 松永氏は岩崎式系統の属性とする
- 2 平行入り組み文あるいは鉤状文(文様モチーフ「い」) : 松永氏は岩崎式系統の属性とする

なお、今回掲載した破片資料のうち、横長の長方形状に見える文様モチーフについては上記の「平行入り組み文あるいは鉤状文」とした。

深鉢Aの屈曲器形に関して松永氏は、在来・外来双方どちらの系統を引くものか明確に特定できないとしている。実際に、頸部で緩やかに外反する器形は岩崎式系統にも、磨消縄文系土器にも見られる属性である。水ノ江氏が設定した磨消縄文系土器から成立した最古段階の指宿式土器「中原Ⅳ類・春日町タイプ」には、外反器形が存在している。このようなことから、深鉢Aは在来系・外来系のいずれでもあると位置づけられるだろう。

一方、今回注目した、文様上限線に関しては、屈曲器形(器形A)において文様帯の上限に設けられる横方向の沈線をさしているが、下層土器の中には、屈曲器形(器形A)であっても、上限線がないものや、屈曲部の位置と無関係に横方向の沈線を施すものがある一方で、屈曲器形と明確に文様上限線との関係が認められるものがある。このため、この属性は型式学的新旧関係を示す可能性を考え取り上げたところである。これに関して、芝原遺跡出土の指宿式土器を分類した池畑耕一氏は、「口縁下に区画線がなく、単独の文様を持つものは古い可能性がある」と指摘している(鹿児島県教育委員会 2011)が、これに従えば、上限線をもたないものは型式学的により古いと位置づけられ、また、屈曲部と無関係にその上位から文様を施すものも同様に比較的古い位置づけになる可能性があると思われる。下層出土の深鉢Aでの数量比率からは、古い様相を示す資料より、一段階新しい資料が卓越している状況がみられる。

橋牟礼川遺跡の下層出土の指宿式土器をみると、上記に示した在来系と外来系の属性の『相互に乗り入れた』状況が多々見られる。具体的には、屈曲器形の深鉢A、在来系直立器形の深鉢B、外来系の鉢Cのいずれにも、曲線文「あ」と、平行入り組み文あるいは鉤状文「い」が存在している。また、統計的に十分なサンプル数ではないながら、在来系深鉢Bには外来系の曲線文がやや多く、外来系の鉢Cには在来系の平行入り組み文あるいは鉤状文が施文されることが多い状況がある。なお、表1に示しているが、下層土器の大半はA地点出土であるが、在来系深鉢BにはC地点出土のものが含まれている。C地点はA地点等から150m程度上流に離れており、遺跡としては同一とみられるが、層位が異なるか、同一層位中でも出土部位が異なる可能性がある。ただ、C地点出土遺物を除いたとしても、在来系深鉢Bに外来系の曲線文が付加される事例は残る。

ところで、外来系の属性が在来系土器に添付される事例として、縄文晩期の黒川式土器深鉢への孔列文の施文という事例がある。この事例では在来系の深鉢形土器の諸属性を損なうことなく「追加」されている(下山 1988)。この考え方でみると、下層出土の指宿式土器では固有の属性が何であるのか明確に抽出できない状況である。言い換えると両者の属性が相互に混在している状況であるといえる。

指宿式土器の設定において、寺師氏は文様モチーフとして「多くは」と前置きしながらも、「曲線文」のみを抽出したが、実際の下層出土資料では、曲線文に加え、平行入り組み文あるいは鉤状文を施すものが含まれている。この資料に関しては、指宿式土器の成立過程に関する考察の中で、水ノ江氏によって「成川タイプ」として、曲線文を施す一群「橋牟礼川タイプ」から分離されているところである。「成川タイプ」の属性的特徴は、器形は口縁部が「頸部でくびれやや外反」し、「波状口縁と平口縁の2者が存在」する。文様は「くびれた頸部には基本的に2本の平行沈線が引かれ、その下にやはり2本単位の平行入組文や所謂靴形文」が施され、「波状口縁の頂部は、刻まれることが多く、波頂部内面には逆三角形のモチーフが施される」。文様帯は「胴部上半というよりもむしろ口縁部付近に集約される」とされる。

これに従い大正出土資料のうち成川タイプを抽出すると、深鉢Aのうち文様モチーフが平行入り組み文あるいは鉤状文「い」となる。

三輪晃三氏は成川タイプ(成川K式)が指宿式土器に先行し、両者には年代的な前後関係があるとする(三輪 1998)。指宿式土器およびそれに先行する成川タイプの成立に関する先学の研究に関しては支持するところであるが、橋牟礼川遺跡下層出土の指宿式土器は、前述のように、相対的に新しい段階の資料が多い状況にあることから、成立後一定期間を経た指宿式土器の状況を示すものと考えられる。そして、その状況としては、深鉢Aでは在来系・外来系文様が混在するというものである。さらに、少なくともA地点出土遺物の在来系直立口縁の深鉢Bでは外来系文様が付され、外来系鉢Cでは在来系・外来系の文様が混在する状況である。一方、器種的には深鉢と鉢が存在するが、深鉢では屈曲する深鉢Aと直立する深鉢Bがあり、数量的には深鉢Aが卓越する。

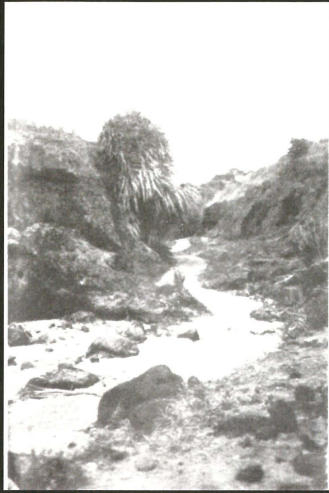
以上のような状況が、指宿式土器の標識遺跡である橋牟礼川遺跡での状況である。

なお、「指宿焼成色」の観点から見てみた場合、屈曲器形の深鉢Aでは曲線文を施すものと、平行入り組み文あるいは鉤状文のいずれにおいても、ほぼ同数の資料が見られる。一方、直立器形の深鉢Bに関しては、「指宿焼成色」の資料の割合が極端に少ないことは注目する必要があると考える。

(文献)

- 寺師 見國 1950 『鹿児島県下の縄文式土器分類及び出土遺跡表』鹿児島県肇国聖蹟調査会
- 河口 貞徳 1953 「南九州における縄文式文化の研究 岩崎及び木ヶ暮遺跡について」『鹿児島県考古学会紀要第3号』鹿児島県考古学会
- 下山 覚 1988 「九州縄文晩期の深鉢形土器の形式変化について－空間を横断する情報と時間を縦断する情報－」『人類史研究7』人類史研究会
- 松永 幸男 1989 「土器様式の一類型－縄文時代後期の東南九州地方を事例として－」『生産と流通の考古学』横山浩一先生退官記念事業会
- 水ノ江和同 1993 「九州の縁帯文土器」『古文化談叢第30集』九州古文化研究会
- 三輪 晃三 1998 「第5章 九州縄文後期再論－武貝塚出土土器の位置付け－」『鹿児島県武貝塚発掘調査研究報告書』奈良大学文学部考古学研究室
- 黒川 忠広 2009 「指宿式土器における鉢形土器成立の背景について」『考古学の源流』木村剛朗さん追悼論文集刊行会
- 鹿児島県教育委員会 2011 『芝原遺跡2』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(158)

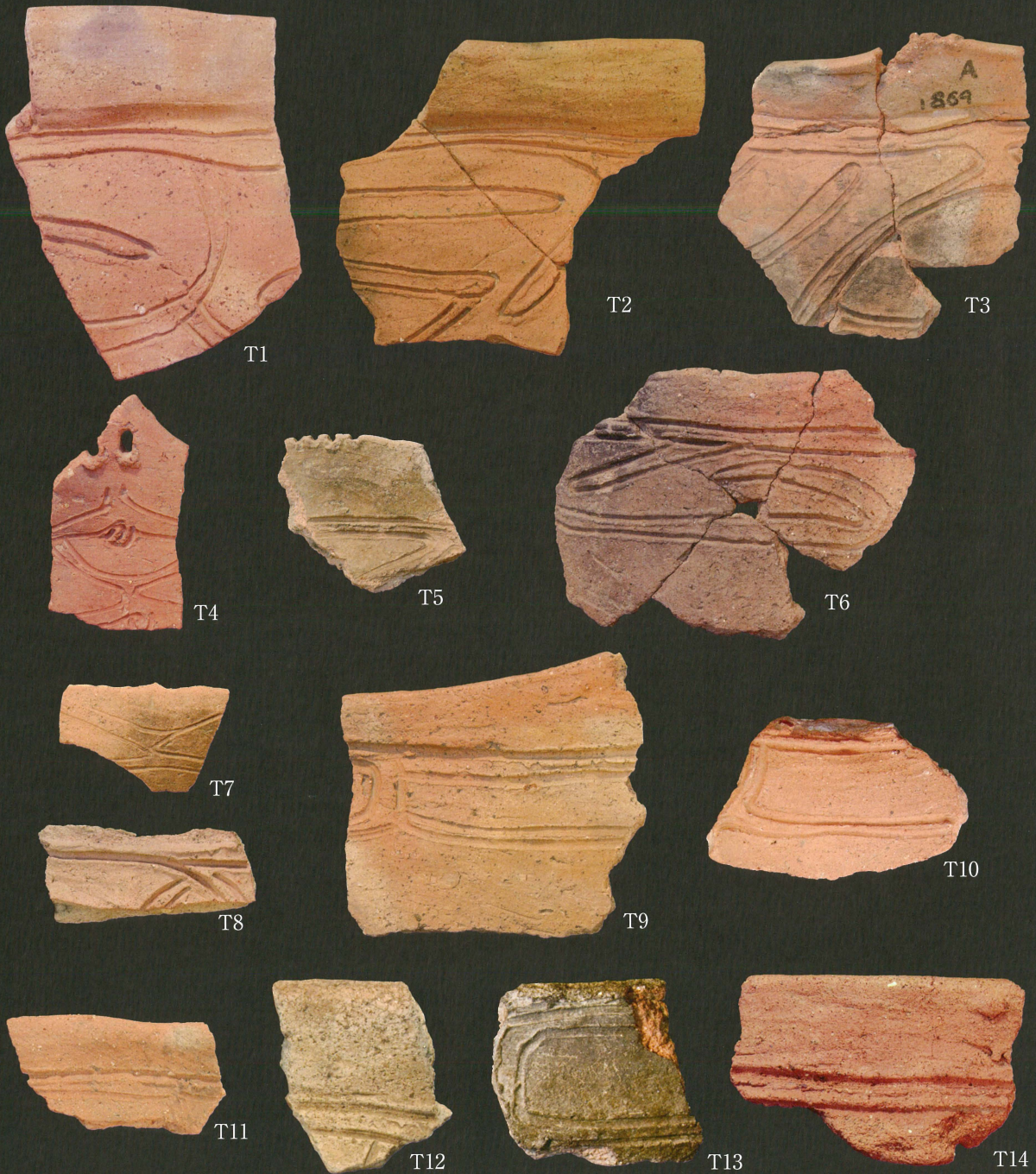




大正時代の橋牟礼川

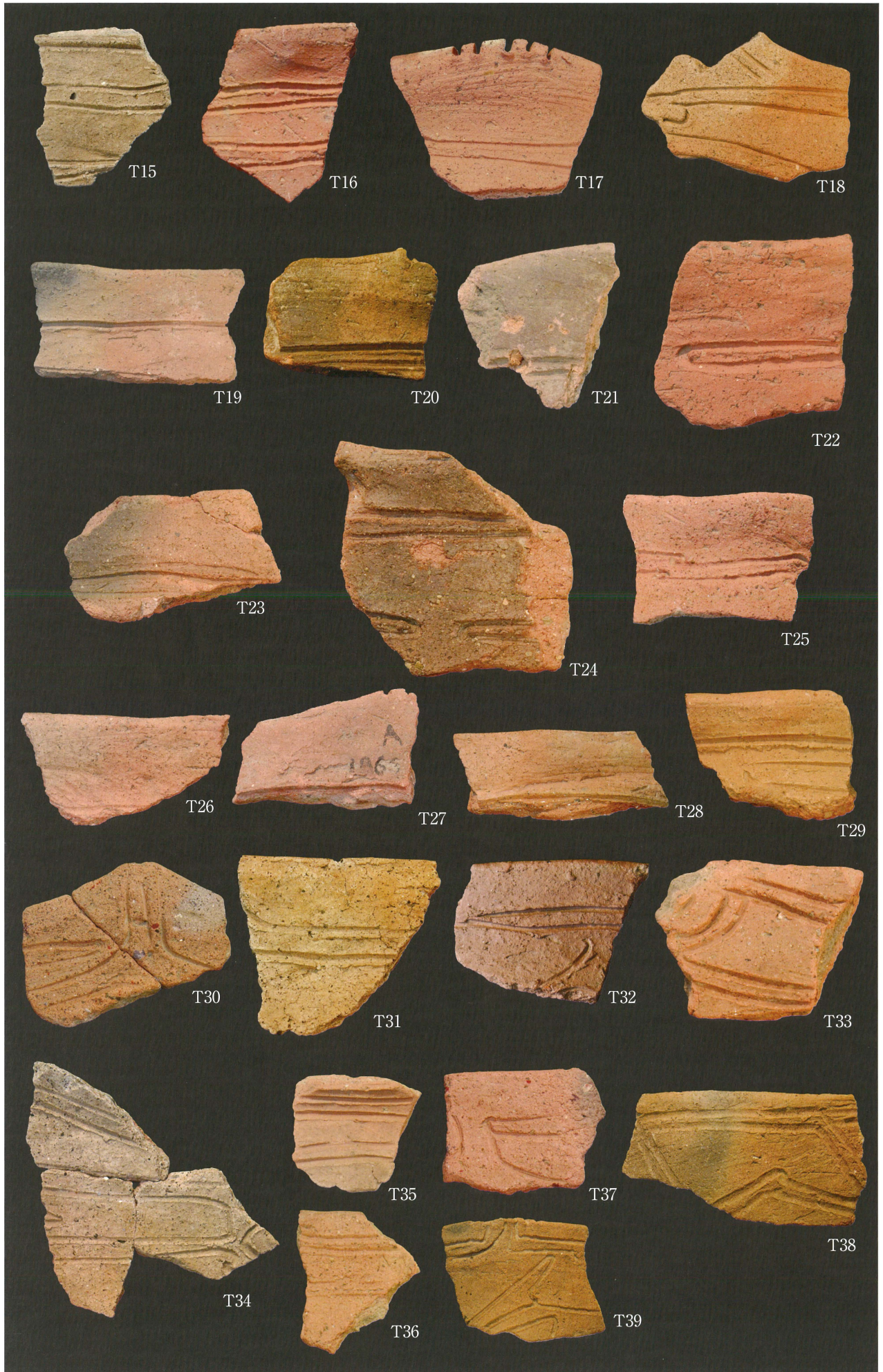


大正7・8年の橋牟礼川遺跡調査風景

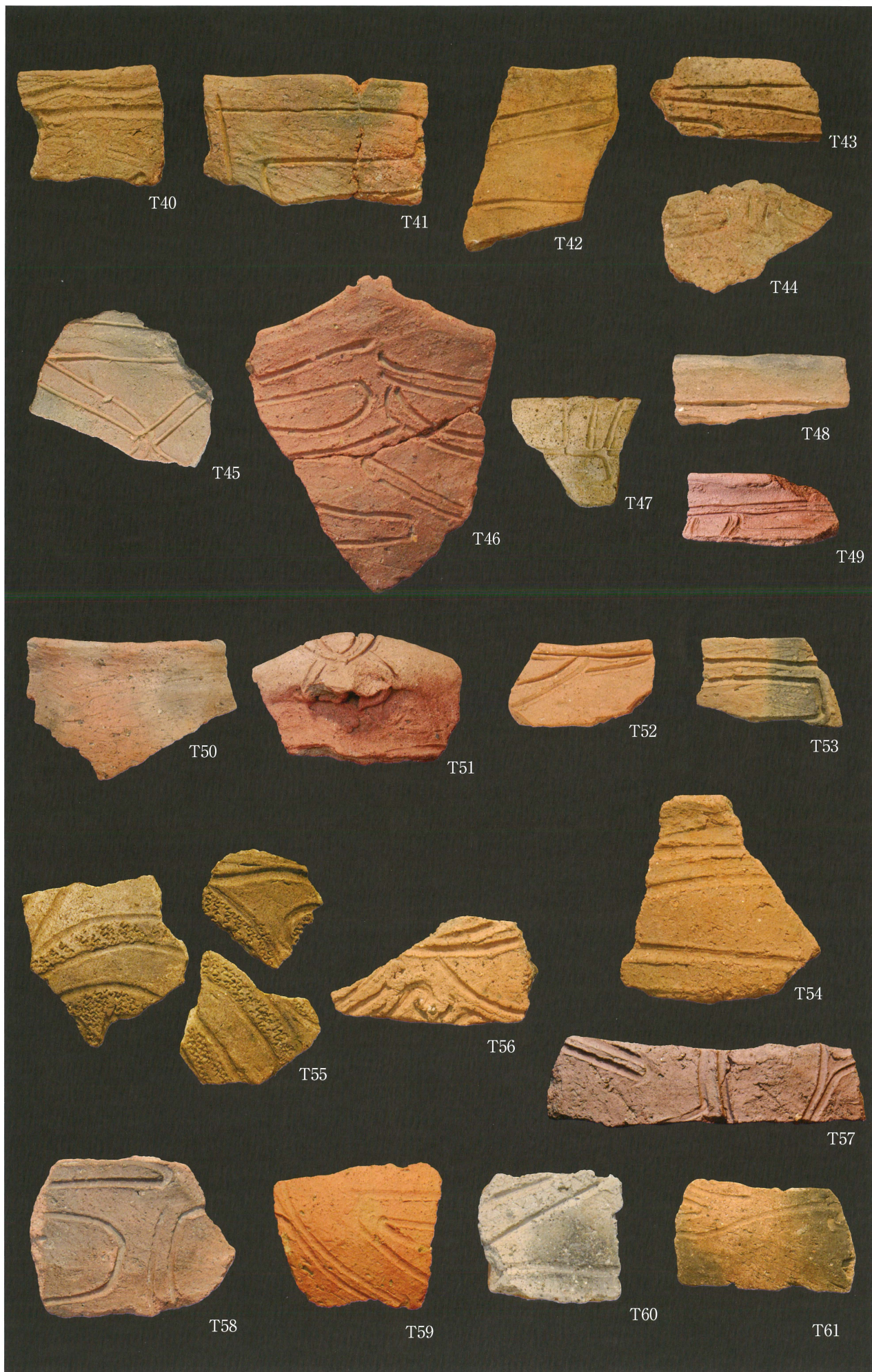




图版 2









图版 4









图版 6













### 第3章 橋牟礼川遺跡の調査履歴

橋牟礼川遺跡の調査履歴は表3のとおりである。本報告書に掲載する橋牟礼川遺跡における発掘調査の内容及び検出した遺構遺物等に関しては、表3に表記した調査区名を用いた。

なお、本報告書で便宜上用いた調査区名については、下記のように付している。

- ・I区～XⅢ区：昭和54年度～平成6年度の指宿駅西部土地地区画整理事業(以下「都市計画事業」)及び博物館建設に伴う調査
- ・下水①～下水⑳：平成2年度～平成3年度の下水道敷設に伴う発掘調査
- ・年度+T番号：大正年間以降に橋牟礼川遺跡及び隣接遺跡での確認調査及び緊急調査(T:大正、S:昭和、H:平成を示す)

西暦	和暦	調査時期・期間	調査主体等	調査の概要	本報告書調査区名
1917	大正6		山崎五十麿	喜田貞吉の依頼で、縄文土器と弥生土器が出土する地点を確認。	
1918	大正7	1月	京都帝国大学	京都帝国大学による学術調査が行われ、縄文土器が弥生土器よりも古い時代の土器であることが日本で初めて実証される。	T7・8A～F
1919	大正8	4月	京都帝国大学	京都帝国大学による学術調査によって、「日本のポンペイ或いはサントリン」と報告され、日本で最も早く火山災害遺跡であることが認識される。	
1926	大正15		史跡名勝天然記念物調査委員(山崎五十麿)	濱田の調査を要約	
西暦	年度	調査時期・期間	調査主体等	調査の概要	本報告書調査区名
1948	昭和22	昭和23年2月	鹿児島県	鹿児島県国立公園候補地学術調査が行われ、縄文土器、弥生土器の包含層に加え、古墳時代の貝塚が発見される。	
1974	昭和48	昭和49年2月25日～3月11日	指宿市教育委員会	史跡指定現状変更許可申請に伴う発掘調査が行われ、平安時代の土壌墓から幼児骨など5体が発見される。	S48I～IV
1975	昭和49	昭和50年2月3日～2月18日	指宿市教育委員会	史跡指定現状変更許可申請に伴う発掘調査が行われ、縄文時代から平安時代に至る各時代の文化層、火山灰層が確認される。また、縄文～弥生期の竪穴住居跡、古墳時代の土器集中廃棄所などが発見される。	S49V～VII
1979	昭和54	10月22日～12月1日	指宿市教育委員会	都市計画事業に伴う確認調査が行われ、遺跡の広がり10ha以上に及ぶことが確認される。	S54T1～T18
1983	昭和57	昭和58年2月21日～3月31日	指宿市教育委員会	国指定史跡の整備事業に伴う確認調査が行われ、古墳時代の竪穴住居跡や貝塚が発見される。	S57T1～T7
1986	昭和61	5月6日～6月30日	指宿市教育委員会	国指定史跡の整備事業に伴う確認調査が行われ、古墳時代の竪穴住居跡やV字溝、鍛冶に伴う遺物が出土する。また、平安時代の鉄器、須恵器、土師器などが出土する。	S61T8～T10
1986	昭和61	7月10日～昭和62年3月20日	指宿市教育委員会	都市計画事業に伴う発掘調査が行われ、貞観16年(西暦874年)の開聞岳噴火に伴う土石流で埋め尽くされた旧河川が発見される。	Ⅶ区
1987	昭和62	6月1日～平成元年1月30日	指宿市教育委員会	都市計画事業に伴う発掘調査が行われ、国指定史跡内で発見されている古墳時代の竪穴住居跡と同時期の住居群が確認される。	Ⅵ区
1988	昭和63	7月4日～1月30日	指宿市教育委員会	都市計画事業に伴う発掘調査が行われ、貞観16年(西暦874年)の開聞岳噴火で埋没した建物跡が発見される。また、古墳時代の手持勾玉が出土する。	V区
1988	昭和63	4月25日～5月20日	指宿市教育委員会	温泉源移転に伴う確認調査が行われ、古墳時代の集落の広がり確認される。	X区
1989	昭和63	平成元年1月8日～1月28日	指宿市教育委員会	個人住宅建設に伴う発掘調査が行われ、貞観16年(西暦874年)の開聞岳噴火で倒壊・埋没した建物跡の一部が発見される。	XⅣ区

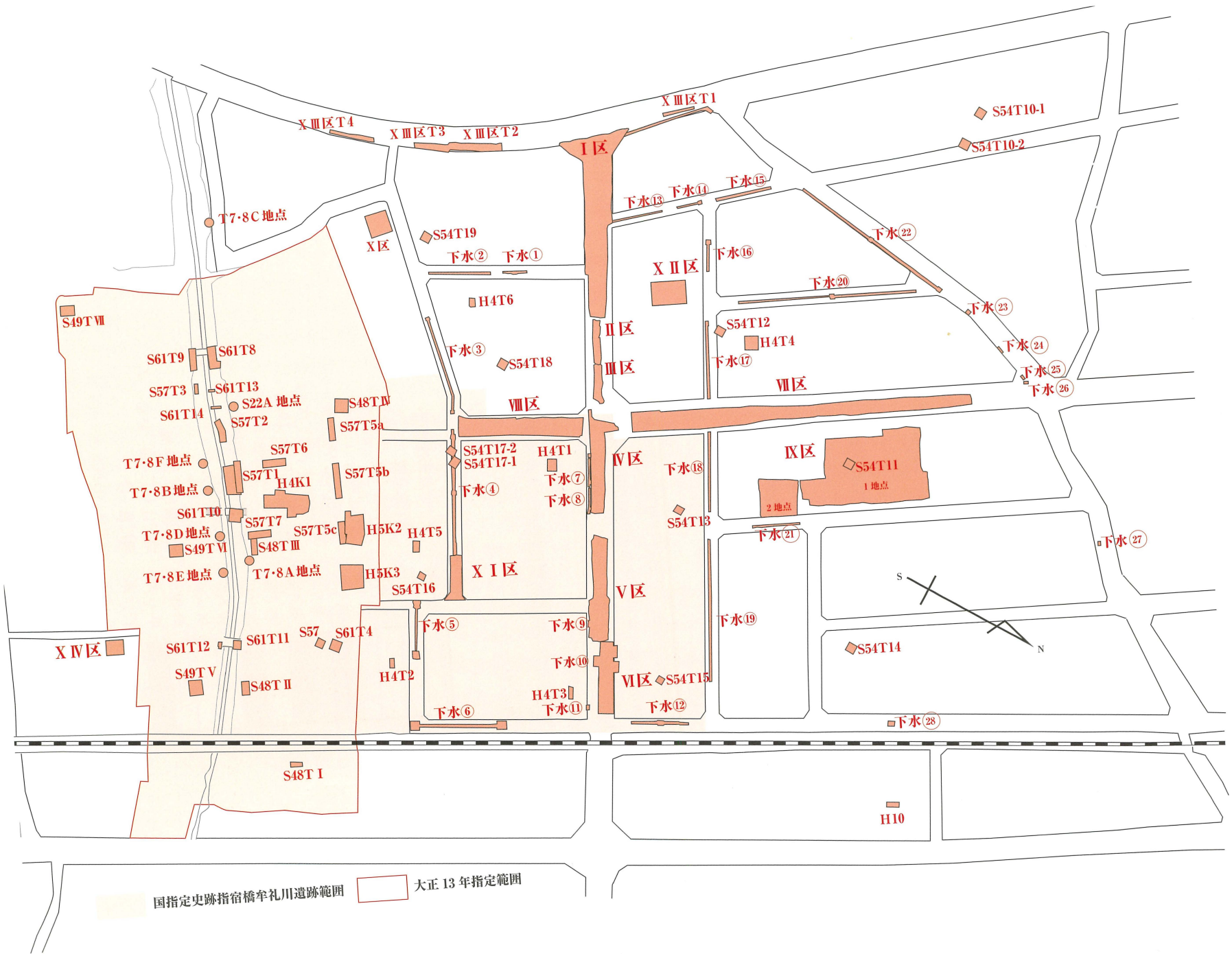
表3 橋牟礼川遺跡調査履歴 1



西暦	年度	調査時期・期間	調査主体等	調査の概要	本報告書調査区名
1989	平成元	4月20日～ 6月30日	指宿市教育委員会	都市計画事業による温泉源移転に伴う確認調査が行われ、貞観16年(西暦874年)の開間岳噴火で埋没した樹木跡が発見される。	X区
1989	平成元	4月20日～平成2年 3月29日	指宿市教育委員会	都市計画事業による発掘調査が行われ、貞観16年(西暦874年)の開間岳噴火に伴う上石流跡を確認、日本三代実録の「河水砂和」を実証する。	II区・III区
1989	平成元	10月5日～ 12月10日	指宿市教育委員会	都市計画事業区内個人住宅建設に伴う発掘調査が行われ、平安時代の畠跡、建物跡、古墳時代の竪穴住居跡などが発見される。	XII区
1990	平成2 平成3	平成2年5月1日～ 平成3年7月30日	指宿市教育委員会	都市計画事業に伴う発掘調査が行われ、古墳時代の集落跡、土器集中廃棄所、道跡、平安時代の畠跡、建物跡などが発見される。	I区
1990	平成2 平成3	7月4日～平成3年 9月17日	指宿市教育委員会	下水道事業に伴う発掘調査が行われ、古墳時代の集落、平安時代の畠地が広範囲にあることが確認される。	下水①～28
1991	平成3	6月7日～11月30日	指宿市教育委員会	都市計画事業に伴う発掘調査が行われ、貞観16年(西暦874年)の開間岳噴火で埋没した畠跡に隣接して、高床倉庫跡、道跡、柵列跡などの関連する遺構が発見される。	VIII区
1991	平成3	9月27日～11月30日	指宿市教育委員会	都市計画事業による発掘調査が行われ、古墳時代の竪穴住居、馬骨が出土する。	XIII区
1992	平成4	平成5年2月20日～ 3月31日	指宿市教育委員会	重要遺跡範囲確認調査によって、平安時代の畠跡、道跡等が発見される。	IX区
1992	平成4	8月17日～平成5年 1月26日	指宿市教育委員会	重要遺跡範囲確認調査によって、平安時代の畠跡、古墳時代の土器集中廃棄所等が発見される。	H4T1～T5
1992	平成4	10月21日～平成5年 3月20日	指宿市教育委員会	国指定史跡の整備事業に伴い確認調査が実施され、平安時代の竪穴住居跡2基が発見される。	H4K1
1992	平成4	7月1日～ 平成5年3月31日	指宿市教育委員会	指宿市考古博物館建設に伴う発掘調査が実施され、旧河川の続きと平安時代の畠跡が発見される。	IX区
1993	平成5	4月1日～ 平成6年3月31日	指宿市教育委員会	指宿市考古博物館建設に伴う発掘調査が実施され、平安時代の畠跡、古墳時代の馬鍬状工具痕跡、弥生時代の土器集中廃棄所等が発見される。	IX区
1993	平成5	10月1日～平成6年 3月31日	指宿市教育委員会	国指定史跡の整備事業に伴い確認調査が行われ、平安時代の竪穴住居跡2基が発見される。	H5K2・K3
1994	平成5	平成6年1月17日～ 3月31日	指宿市教育委員会	重要遺跡範囲確認調査(片野田地点)によって、中世の畠跡、平安時代の道跡が発見される。	H5
1994	平成6	4月1日～5月31日	指宿市教育委員会	指宿市考古博物館建設に伴う発掘調査が実施され、縄文時代後期の柱穴群が確認される。	IX区
1994	平成6	7月15日～平成7年 3月31日	指宿市教育委員会	重要遺跡範囲確認調査(片野田地点)によって、中世～近世の墓、古墳時代の柱穴等が発見される。	H6
1995	平成7	9月17日～平成8年 3月31日	指宿市教育委員会	重要遺跡範囲確認調査(向吉地点)によって、弥生時代終末～古墳時代の祭祀遺構が発見される。	H7
1996	平成8	11月8日～平成9年 3月31日	指宿市教育委員会	市道拡幅工事に伴い発掘調査が行われ、古墳時代の遺構・遺物が発見される。	-
1996	平成8	12月1日～平成9年 3月31日	指宿市教育委員会	重要遺跡範囲確認調査によって、貞観16年(西暦874年)の開間岳噴火で埋没した樹木跡が確認される。	H8
1997	平成9	7月1日～平成10年 3月31日	指宿市教育委員会	重要遺跡範囲確認調査(南丹波地点)によって、古墳時代の柱穴が確認される。	H9
1998	平成10	7月1日～平成11年3 月31日	指宿市教育委員会	重要遺跡範囲確認調査によって、平安時代の畠跡、古墳時代の柱穴が確認される。	H10
1999	平成11	7月26日～平成12年 3月31日	指宿市教育委員会	重要遺跡範囲確認調査によって、平安時代の畠跡、道跡が確認される。	H11

表3 橋牟礼川遺跡調査履歴2

第27图 橋牟礼川遺跡調査区配置図





## 第4章 橋牟礼川遺跡の層序

### 第1節 橋牟礼川遺跡標準層位と各層序の概要

橋牟礼川遺跡の地層は、基本的には池田カルデラ噴出物と開聞岳噴出物とそれらに挟まれる扇状地堆積物から形成される。ここでは、今回の発掘調査において確認された層序を橋牟礼川遺跡の標準層位(指宿市教育委員会 1992)を基に述べる。

#### 第1層 黒褐色土層(表土)

耕作土である。都市計画事業によってシラスや砂利、礫層がある場合がある。また土地利用の履歴により第1層の厚さや性状に差異が認められる。重機による掘削痕跡が下層に及ぶ場合がある。現代の層である。

#### 第2層 暗灰色土層

近代～現代に至る遺物が包含されている。旧耕作土でもある。

#### 第3層 黒灰色土層

近代～現代に至る遺物が包含されている。旧耕作土でもある。

#### 第4層 黒色土層

中世(鎌倉～室町時代)の遺物包含層である。黒ボクのような腐植土が発達している。厚さは20cm～50cmと厚く、宋代の青磁・白磁や糸切り底の土師器が出土する。内黒土師器も出土していることから、上限は平安時代後期まで遡る可能性がある。紫コラ(貞観16年、仁和元年の開聞岳噴出物)の堆積後の生活が再開される時期を考える上で重要な層と考えられる。

#### 第5層 a 紫灰色火山灰層(紫コラ)

平安時代開聞岳噴出物堆積層である。平安時代の旧地表面を覆う火山灰層の上位に存在することから、下位の火山灰層を貞観16年に、上位の第5層 a を仁和元年の開聞岳噴出物に対比させる説もあるが、近年の地質学的調査の成果から下位と上位の噴出物は一連の火山活動に伴うものであるとする考えがある。

#### 第5層 b 紫灰色火山灰層二次堆積物

紫灰色火山灰堆積物 第5層 c (874年開聞岳噴出物)の二次堆積層で、水流作用で生成されたものと考えられ砂が多く混在し、クロスラミナが発達する。



第28図 橋牟礼川遺跡層位模式柱状図

#### 第5層 c 紫灰色火山灰層(紫コラ)

紫灰色火山灰層(紫コラ)。874年の開聞岳噴火に伴う噴出物堆積層に比定されている。極めて強く固結し、フォー  
ル・ユニットが認められる。第5層cの最下部には、2cm以下の礫が2～5cmの厚さで堆積するが、これは貞観16  
年の火山活動に伴う最初の降下物とみられる。第5層cの厚さは、約30～80cmであり、場所によっては一次堆積物  
を侵蝕して、クロスラミナを形成する堆積層が観察されることがある。

#### 第6層 暗オリーブ褐色土層

奈良～平安時代遺物包含層で、その上面は、874年開聞岳噴出物層に直接被覆され、旧地表面の地形をそのままに  
留めている。第6層は標準層位ではa、b、cの3分層が可能である。a層は腐食が進行しており、特に畠跡周辺で  
は黒色が強くなる。b層はオリーブ褐色を呈するが河川跡付近では砂層となる場合がある。c層は7層青コラの二次  
堆積物層である。

#### 第7層 青灰色固結火山灰層(青コラ)

7世紀後半に比定される開聞岳噴出物層で、下部には火山活動の初期に降下したと考えられるスコリアが2～5cm  
程度堆積する。さらに、暗橙色土層を5～10cm程度挟み1～2cm程度のスコリア堆積が部分的に見られる場合があ  
ることから、火山活動の小休止期があったと考えられている。

#### 第8層 橙色土層

古墳時代に相当する扇状地堆積物層であり、5cm～30cm程度堆積する。層中には、スコリアのブロック(開聞  
岳の7世紀後半の噴出物堆積層と休止期を挟んで下位に存在する初期の噴出物)や、砂層、池田湖起源の噴出物のブ  
ロック、池田湖降下軽石等を含む。古墳時代土器などのローリングを受けたものが検出される。

#### 第9層 暗褐色土層

古墳時代の遺物包含層である。小礫や池田カルデラ降下軽石を若干含む、やや粘質であり、厚さは50cm～1m程  
度である。第9層中から遺構が掘りこまれた場合は土色などからの判別が困難であり、下位層の第10層に達している  
場合は第10層上面で検出できる。第9層の形成は、出土須恵器から5世紀から6世紀代の集落形成による地層の攪乱  
と、複数回の河川の氾濫などによる堆積などの要因が複合しているとみなされている。

#### 第10層 赤橙褐色粘質土層

弥生時代中期～後期の遺物包含層で、いわゆる山ノロ式土器などが出土する。基本的には扇状地堆積物で、池田湖降  
下火山灰のブロックを含む。第10層の中位から砂層ブロックが検出されることがある。第9層から掘り込まれた遺構は、  
通常、第10層に到達するため、第9層中に混在する弥生土器は第10層に包含されていたものがあると考えられる。

#### 第11層 暗紫色火山灰層(暗紫コラ)

弥生時代(山ノロ式土器段階)に降下した開聞岳噴出物堆積層である。強く固結せず、ブロック状に堆積しているこ  
とが多い。層厚は0～5cm程度である。山ノロ遺跡、成川遺跡など、この火山灰が山ノロ式土器を被覆していた事  
例がある。

#### 第12層 明褐色土層

弥生時代前～中期にかけての遺物包含層で、第13層と色調は類似するが、粘性が強く粒度は小さい。

#### 第13層 暗褐色小石混シルト質土層

主に、刻目突帯文土器を包含する層で、小石が混ざる。

#### 第14層 赤褐色小石混シルト質土層

主に、縄文時代晩期の遺物を含む。黒川式土器が主体となる。

#### 第15層 赤褐色砂粒混シルト質土層

主に、縄文時代晩期の遺物を含むが、縄文時代後期の遺物出土することがある。

#### 第16層 黒褐色樽色パミス混シルト質土層

主に、縄文時代後・晩期の遺物を含む。縄文時代後期の上加世田式土器、市来式土器などが確認されている。第14層か  
ら第16層までは、場所により欠落する場合があるが、第16層はコンスタントに確認することができる。

#### 第17層 暗青灰色火山灰層(黄コラ)

縄文時代後期の開聞岳噴出物で、上半は黄色細粒火山灰、下半は黒灰色スコリア及び粗粒火山灰の二層から構成さ



れる。ブロック状に残存し、当時低い部分には10～15cm程度の層厚を確認することができる。成川遺跡などでは、「指宿式土器」を被覆していた事例がある。

#### 第18層 灰褐色砂質土層

縄文時代後期遺物包含層で「指宿式土器」を主に包含するが、同層より「阿高式土器」が出土している(第30図1-1)。下部は、池田湖降下軽石を含む砂層に変化し、池田湖火山灰層の二次的な堆積層となる。

#### 第19層 池田湖火山灰層

灰色～黄灰色を呈する層で、約5,700年前の池田カルデラ形成期の火山活動に伴い堆積したものである。軽石を多く含み、軽石には角閃石が多く含まれる。同層が、この地域の地形基盤を成すものと考えられ、発掘調査では、現在のところ同層を除去した事例はない。指宿市の北部の横瀬遺跡では2m以上の層厚を呈する。橋牟礼川遺跡付近では池田火砕流堆積物は30m以上に達すると考えられている。

(文献)

指宿市教育委員会 1992 『橋牟礼川遺跡Ⅲ』 指宿市埋蔵文化財調査報告書(10)

## 第5章 昭和・平成における橋牟礼川遺跡の調査成果

### 第1節 縄文時代

#### 第1項 遺構

##### ① ピット群

橋牟礼川遺跡における縄文時代の遺構の検出事例は、ピット等にとどまっている。指宿市内においても縄文時代に帰属する建物遺構等の検出事例はない状況である。しかしながら、縄文時代に帰属するピットに関しては、群を形成するような検出状況が橋牟礼川遺跡地内であり、建物の造営に伴う遺構である可能性も捨象できないところである。

縄文時代に帰属するピットが検出されたのは、昭和48年度史跡指定地現状変更許可申請に伴う確認調査区(第一次)が初例である(図版10-5)。Ⅳトレンチの縄文時代包含層において柱穴が検出され、縄文晩期と後期における住居址の存在が推定されている。さらに、縄文後期の「14層」に浅いが若干の石組をした炉址らしいものが確認され、周りには灰層が検出されている。遺構が検出された「14層」は暗茶褐色層とされ、指宿式土器・市来式土器・磨消縄文土器片が出土している。この14層は、土色や出土遺物からは橋牟礼川遺跡標準層位16層に該当するとみられる。「13層」はパミス混入の茶褐色粘質層とされ、縄文晩期の夜臼式土器や黒川式土器の出土が報告されている。土色や出土遺物からは橋牟礼川遺跡標準層位14層あるいは15層に対比できる。標準層位第16層と標準層位14層・15層との土色差は明瞭であり、当時の報告書の写真からは、縄文晩期相当層の標準層位13層を埋土としたピットである可能性がうかがえる。

また、昭和57年度史跡整備事業に伴う確認調査区2トレンチでは、縄文後期に帰属する石組・土坑と考えられる遺構が確認されている。

##### ・Ⅸ区:平成4・5・6年博物館調査区(第29図、図版10-4)

Ⅸ区南側において、橋牟礼川遺跡標準層位13層(縄文晩期後半の刻目突帯土器期該当層)に達して掘削を行い、ピット80基を検出した。

残存する深さが概ね20cmを超えるものを中心にプランの推定を試みた。例えば、No.35-No.29-No.38-No.46やNo.66-No.46-No.34-No.31-No.18-No.13など直線上に並ぶものが見受けられる。明らかに建物跡と断定しうるものはなかったが、可能性の範囲として以下の組み合わせが考えられる。

No.54-(No.53)-No.51-(No.46)-No.39-(No.40)-No.38、No.19-No.20-No.15-(No.8)-No.7-No.4-No.24。

このように、縄文時代晩期とみられるピット等の遺構は確実に確認されているが、その性格に関しては現段階では不明である。一方、遺物に関しては、縄文時代中期から後期、晩期に帰属する土器等の出土がある。

#### 第2項 遺物(第30図、図版19)

1-1は阿高式土器深鉢の口縁部から胴部にかけての破片である。昭和48年度史跡指定地現状変更許可申請に伴う確認調査区Ⅳトレンチ最下層の「16層」粘質パミス混入赤褐色層(橋牟礼川遺跡標準層位18層に該当)で出土した。口縁部は直立する部分と外反する部分がある。口縁部から胴部上半に凹線文を施すが、口唇部には文様は施されない。凹線文は横方向に大きく3本を単位とした間延びした流水状の文様であり、部分的に鉤手文状を呈する部分がある。これに複数の短凹線を組み合わせている。復元口径は25.4cm、胴部最大径は27.2cmである。

1-2・1-3・1-4は、昭和61年度国指定史跡確認調査区10トレンチ深堀調査区で出土した阿高式系統の凹線文土器である。

1-5・1-6は指宿式土器である。それぞれ、昭和61年度国指定史跡確認調査区8トレンチ、10トレンチで出土した。出土層位は橋牟礼川遺跡標準層位17層黄コラ火山灰層の上位である。1-6は波状口縁の頂部を含めた破片であり、口縁は外反し、内面に稜を持つ。内外に二重沈線で施文し、波状頂部には沈線によるキザミを施し、直下に渦巻文を施す。波状頂部直下に渦巻文を施すものは大正時代に出土した指宿式には見られない。

1-9は浅い凹線文の間に二枚貝腹縁による刺突で擬似縄文を施文する磨消縄文系土器である。出土層位は橋牟礼川遺跡標準層位17層黄コラ火山灰層の下位である。

1-7・1-12は草野式系統の土器である。昭和61年度国指定史跡確認調査区10トレンチの黄コラ火山灰上位で出土し



た。外面に横方向の凹線と列点文が施される。1-12は口縁部径13.5cmを測る小型の深鉢形土器である。外面は板状工具による縦方向のケズリが行われ、波状口縁の頂部には4つのキザミを施す。

1-8・1-10は松山式土器である。1-8は10トレンチ深堀調査区の黄コラ火山灰上位で、1-10は昭和61年度国指定史跡確認調査区8・9トレンチで出土した。1-8は平口縁の深鉢形土器であり、口唇部に横方向3本単位の沈線文と縦方向の沈線文を施す。

1-11は、昭和61年度国指定史跡確認調査区8・9トレンチで出土した市来式土器である。口縁部下文様帯に凹線を施し、その上下に連続刺突文を施す。

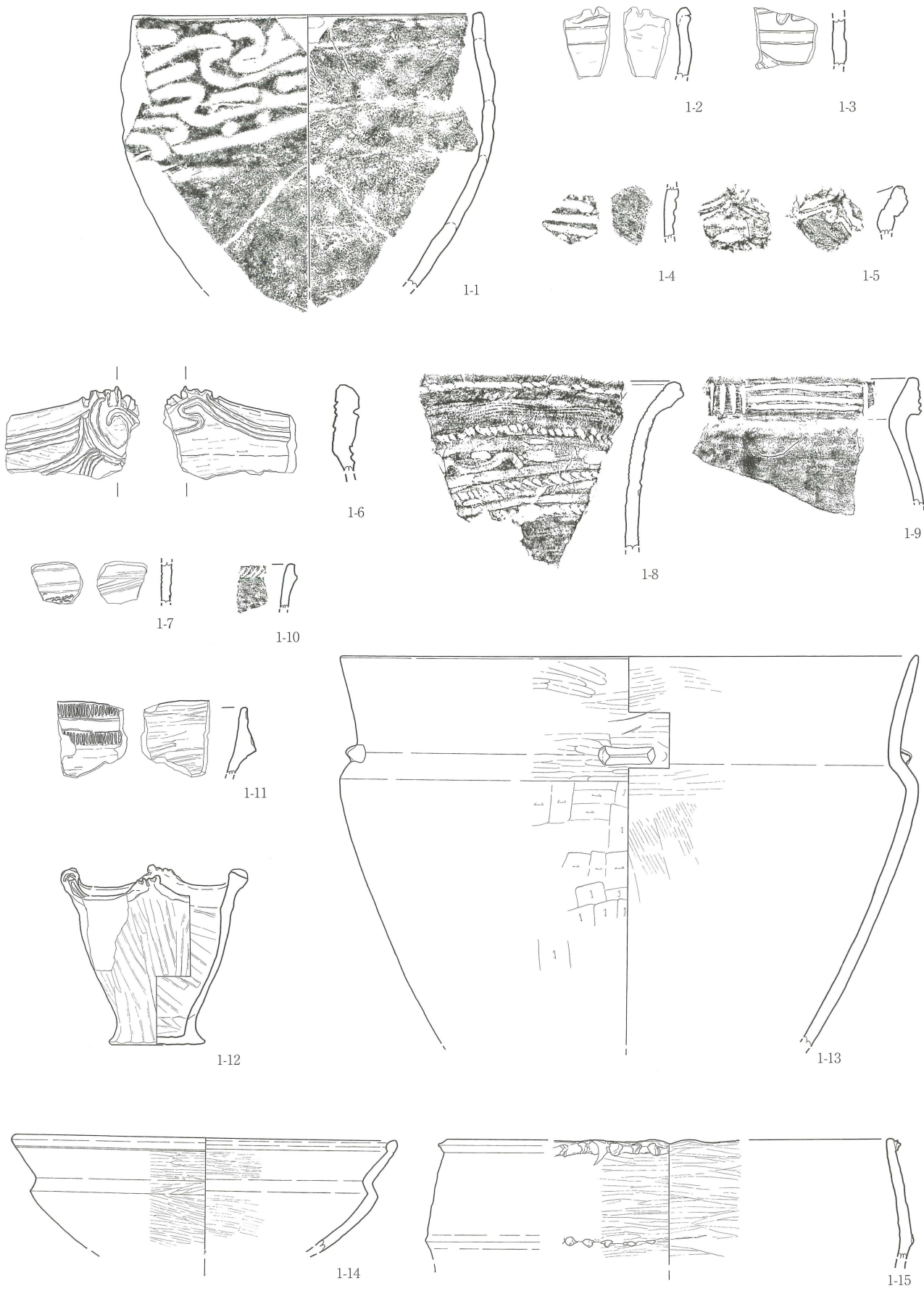
1-13は黒川式土器粗製深鉢である。平成元年度湯源移設に伴いX区で出土した。想定口径が42cm程度と大型の個体である。胴部屈曲部にリボン状突起が貼り付けられる。

1-14は黒川式精製浅鉢である。昭和54年度都市計画事業に伴う範囲確認調査区19トレンチで出土した。外面口縁直下に沈線を一条巡らす。口縁部内面は丸く膨らみ、玉縁状を呈する。外面を黒色磨研で仕上げる。復元口径は27.5cmである。

1-15は刻目突帯文土器深鉢である。昭和61年度国指定史跡確認調査区8・9トレンチで出土した。口縁端と胴部屈曲部に三角突帯を貼付け、工具によるキザミを施す。内外面とも荒いナゲ調整を施す。復元口径は33.6cmとなる。



第29図 X区 縄文時代遺構配置図(平成4・5・6年度博物館調査区)(S=1/160)



第30図 縄文時代遺物実測図(S=1/3)



### 第3項 縄文時代の調査のまとめ

大正時代における橋牟礼川遺跡の調査は、橋牟礼川の流下によって削られたV字谷を側面から掘削することで、各時代の遺物包含層を確認できたところであった。

その他の地点においては状況が異なる。橋牟礼川遺跡では、縄文後期以降の開聞岳の噴火のうち4回分の火山灰層の堆積が確認されている。加えて、遺跡周辺が火山性扇状地地形であり、例えば古墳時代に帰属する8層のように山間部からの土石流等が供給源となった扇状地堆積物層が確認されている。こうしたことから、地表面から縄文時代包含層までに、複数の火山灰層と土石流堆積物層、そして遺物包含層を含めた厚い堆積物が見られる状況である。例えば、Ⅸ区においては、地表面から縄文晩期遺物包含層までの深さは約3.5mであった。したがって、面的に縄文時代包含層を調査する機会は限られている。数少ない調査例としては、大正時代の調査区に近い、橋牟礼川の土手付近で実施された昭和48・49年度、昭和54年度、昭和61年度等の調査がある。これらはいずれも深堀調査区を設けての調査であることから、遺構を面的に捉えることは困難ではあったが、昭和48年度の調査では縄文時代後期に帰属する土坑等が検出されている。一方、面的な調査が実施されたⅨ区では、縄文晩期に帰属すると考えられるピット群が検出されている。

遺物の出土状況に関しては、Ⅸ区では13層をある程度面的に調査したにもかかわらず、出土遺物が極めて少ない状況であるが、大正時代の調査区の所在する国指定史跡内では、縄文時代中期以降の遺物がある程度まとまって出土する傾向がある。橋牟礼川遺跡周辺の大まかな地形は、橋牟礼川の北側に北流する王子田川付近が北向きの緩斜面であり、国指定史跡付近が東向きの緩斜面となっている。したがって、Ⅸ区は北方向の緩やかな傾斜面に位置し、Ⅸ区の南側にあるV・Ⅵ区から国指定史跡、そしてその南側にかけての地域が一带の最高点となっている。地形的には、縄文時代の遺跡中心部はⅨ区より南側の国指定史跡を含めた部分であった可能性も考えられるところである。

## 第2節 弥生時代

### 第1項 遺構

#### ① ピット群

橋牟礼川遺跡における弥生時代に帰属する竪穴建物の検出事例はないが、東側に隣接する南丹波遺跡においては、弥生時代後期末から古墳時代初頭に帰属する竪穴住居14基の検出事例があり(第99図)、弥生時代終末期における集落中心部が橋牟礼川遺跡の東側であった可能性が指摘されている。橋牟礼川遺跡地内においては、弥生時代包含層(標準層位10層・12層)を面的に調査したのがⅨ区(平成4・5・6年度の博物館建設予定地調査)のみであり、さらに古墳時代の集落中心部を形成するⅠ区やⅤ・Ⅵ区付近については、弥生時代包含層までの調査が実施されていない状況である。したがって、弥生時代集落の分布域に関しては依然として不明瞭な状況である。

Ⅸ区については、第31図にあるように土坑のほかに、ピットが251基検出されている(第31図/図版10-6)。ピットの法量は、最小径で9.5cm、最大径で39.5cm、最小深6cmで、最大深106cmである。概ね径20cm、深さ30cm程度のサイズである。Ⅸ区北側の1地点では河川跡の東側にピットが集中して分布するように見受けられるが、河川跡の西側は、古墳時代の馬鋤痕跡を確認したレベルで遺構の保存を鑑み掘り下げなかったため、下位の状況は不明である。なお、土器集中廃棄所の周辺にピットが点在するが、プランをなすものは見られなかった。

Ⅸ区南側の2地点については、残存する深さが概ね20cmを超えるものを中心にプランの推定を行った。明らかに建物跡と断定しうる可能性の範囲として、以下の組み合わせが考えられる。

・No.107-No.87-No.152-No.21-No.147-No.158、もしくはNo.107-No.87-No.147-No.158

・No.128-No.16(またはNo.133)-No.136-No.127-No.134(調査区外に延びる可能性)

・No.3-No.5-No.7-No.20-No.29-No.28(調査区外に延びる可能性)

・No.5-No.20-No.130-No.28-No.14(調査区外に延びる可能性)

・No.87-No.84-No.82-No.71-No.64-No.49-No.150-No.52

・No.120-No.72-No.67-No.123-No.54-No.117-No.75-No.63-No.70

・No.70-No.68-No.66-No.117-No.75-No.163

なお、昭和48年度史跡指定地現状変更許可申請に伴う確認調査区(第一次)Ⅲトレンチにおいては、弥生時代に帰属するピットの検出例もあり、建物遺構との関連を窺わせるとの記述もある。

#### ② 大型土坑(第31・32図/図版10-9)

Ⅸ区河川跡東側の10層中位以下において土坑が12基検出されている。このうち、大型土坑1については、長軸4.13m、短軸3.72mを測るややゆがんだ隅丸方形の平面であり、他に比較しても規模が大きかった。土坑の検出面から上部には、弥生土器集中廃棄所の一部が重複しており、遺構の検出は、弥生土器集中廃棄所の遺物取り上げ中に実施した。

大型土坑1は下位の14層上面付近まで掘削が及ぶもので、断面形状は、概ね緩やかに落ちこむ播鉢状を呈する。土坑底面の中央付近には、南北方向に長さ1.65m、東西幅0.57mの長楕円形の土坑と、その南側に接して長軸0.65m程度の不整形の土坑、東側に接して長軸0.7m程度の長楕円形の土坑が検出された。土坑の立ち上がり部分と底部に赤褐色のブロックが密着して検出されたことから、焼土の可能性を疑ったが、土坑埋土や底部にカーボンがほとんど検出されていないことや、土坑が達している10層b中等に鉄分が沈着し固結したブロックが包含されていることから、赤褐色ブロックは焼土である可能性が棄却された。大型土坑の底部や埋土中で弥生土器が出土したが、遺構の用途に関しては不明である。

#### ③ 土坑(第31図/図版10-10)

前述の大型土坑の周辺の1・2地点では、長軸46cm～112cmの小型の土坑が12基検出された。土坑2・4・5は直線的に並ぶ。土坑12からは略完形の壺形土器が底部から浮いた状態で出土した。

#### ④ 土器集中廃棄所(第33図/図版10-7・8)

Ⅸ区河川跡東側の10層中位以下に弥生土器が大量にまとまって出土する箇所が検出され、土器集中廃棄所と呼称し



た。検出されたのは大型のもの1基(A)と、小型のもの2基である。第10層中には保存状態が良い土器片の出土例が多いが、それらの中でも土器集中廃棄所で出土した土器に関しては、量や完形率の高さで他を圧倒している。

土器集中廃棄所Aは長軸約9m、短軸約8mの約42㎡の範囲に土器が分布しており、隣接する大型土坑1の上面にも重複していた。出土した土器は、破片からほぼ1個体に復元可能な関係率の高いものまで含め約600点を越える。

大型の土器集中廃棄所における土器の堆積状況は、最も土器が集中する中央部分で、土器の分布が上下2層に分かれていた。10層上半には、開聞岳噴出物である暗紫コラの火山礫が部分的に薄く堆積しているが、遺物の分布と暗紫コラとの明確な関係性は把握できず、また、分布上下での時期差も明確にできていない。

出土土器は弥生時代中期後半に帰属する2-1・2-2・2-3・2-4・2-5・2-6・2-7・2-8・2-9・2-11・2-12・2-13等の山ノ口式土器が中心であり、弥生時代中期に形成されたものと言えるが、壺形土器2-10等のように成川式土器中津野式段階に帰属する遺物も出土している。したがって、大型の土器集中廃棄所Aの形成時期については弥生時代中期から古墳時代初頭にかけての時期幅があることがわかる。

なお、山ノ口遺跡においては、山ノ口式土器が暗紫コラで被覆され発見された事例があるが(河口 1981)、橋牟礼川遺跡では土器集中廃棄所Aで出土した壺形土器2-8(弥生時代中期前半)に暗紫コラ火山礫が付着した状態であった。

(参考文献)

河口貞徳 1981 「山ノ口遺跡」『河口貞徳先生古稀記念著作集』上巻 河口貞徳先生古稀記念著作集刊行会

## 第2項 遺物 (第34図～第36図、図版20)

2-1から2-13はⅨ区の土器集中廃棄所出土の土器である。弥生中期後半の山ノ口式土器の範疇であるのは、2-1・2-2・2-3・2-4・2-5の甕形土器、2-9の壺形土器、2-6・2-7の無頸壺である。甕形土器は口縁部が外反し、内面に稜を持つ。胴部に3条の突帯を巡らすものがある。無頸壺も3条突帯を巡らす。2-8は弥生中期前半の入来Ⅱ式に帰属する壺の口縁部である。2-11は壺形土器の肩部であり、ボタン状の浮文が貼付される。2-12・2-13は鉢形土器である。2-10は胴部に刻み目を施す突帯を一周巡らす弥生後期末から古墳時代初頭の中津野式段階の壺である。2-10と2-11は胴部に線刻が施されるがモチーフは不明である。

2-14・2-15は大甕である。2-14はⅨ区出土である。口径32.6cm、胴部最大径33cmを測る。2-15はⅣ区出土である。口径42.8cm、胴部最大径45.6cmを測る。いずれも口縁部は外反し、内面に稜を持つ。胴部に一周する突帯は、はね上げたような形状を呈する。いずれも中園聡氏の編年では高付式の範疇に含まれ(中園聡 1997)、弥生時代後期に帰属する。

2-16から2-19は包含層出土の磨製石鏃である。いずれも粘板岩製である。2-18と19は幅が2.6cm、3cmと大型の石鏃であり、基部に茎をはめ込むための溝が設けられる。この形態の磨製石鏃は南摺ヶ浜遺跡において、弥生終末期から古墳時代初頭の中津野式段階の土器等と共に出土しているため(鹿児島県立埋蔵文化財センター 2009)、その時期を上限とするものと考えられる。

(文献)

鹿児島県立埋蔵文化財センター 2009 『南摺ヶ浜遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(144)

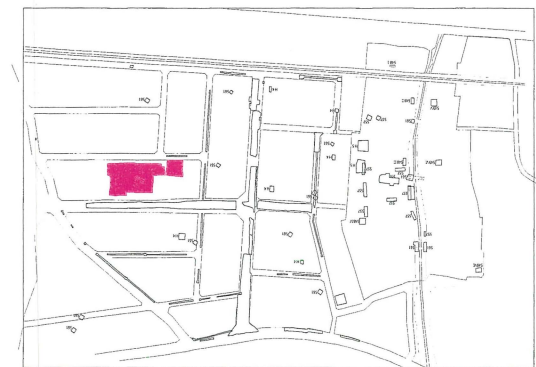
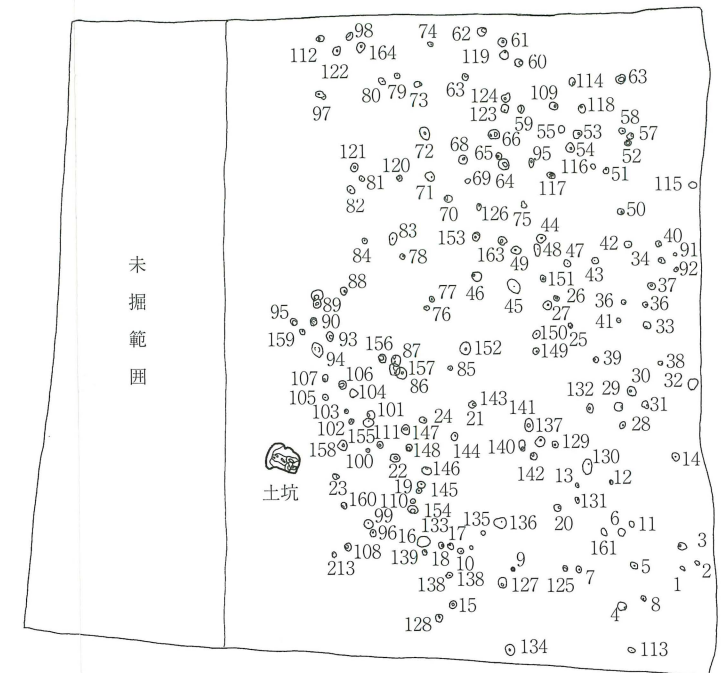
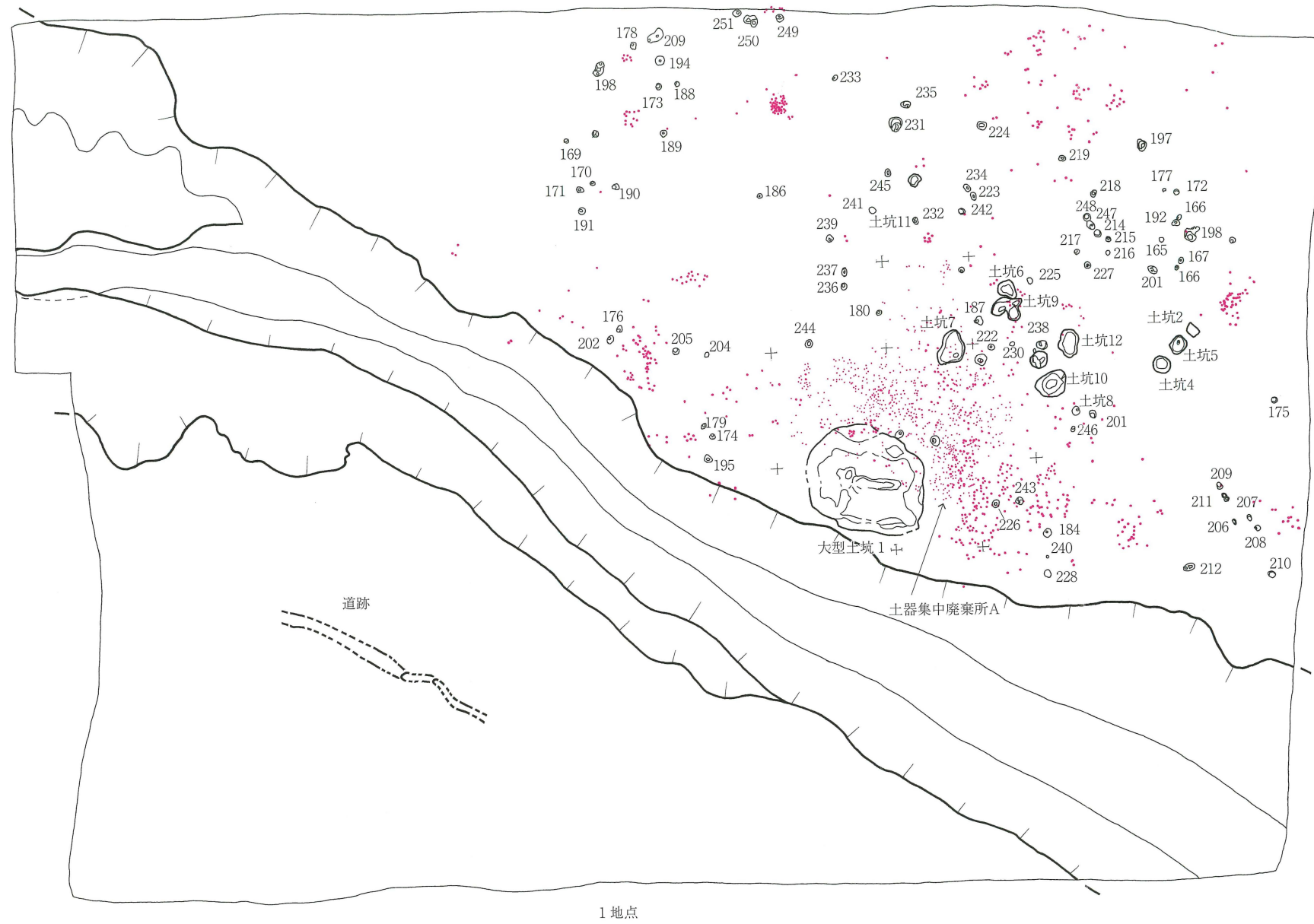
中園 聡 1997 「九州南部地域弥生土器編年」『人類史研究9』 人類史研究会

## 第3項 弥生時代の調査のまとめ

周知の埋蔵文化財包蔵地橋牟礼川遺跡の範囲においては、弥生時代の集落を構成する竪穴住居等の遺構検出事例は現段階ではない。これは、弥生時代の遺物包含層である10層に達して面的調査が実施されたのが、Ⅸ区(平成4・5・6年度の博物館建設に伴う調査区)のみであり、他についてはトレンチ内の深掘調査のみであるためと考えられる。

Ⅸ区においては、弥生時代中期から古墳時代初頭にかけての土器集中廃棄所が検出され、出土遺物は約600点にのぼっている。このことは、近隣に同時期の集落が所在したことを示していると考えられる。土器集中廃棄所の周辺にはピットが多数検出されていることは、さらにこれを補強する。

また、時期的にもⅨ区の土器集中廃棄所は弥生時代中期から古墳時代初頭にかけて形成されたものであり、土器等の廃棄行為の結果として土器集中廃棄所を形成する行動様式は、古墳時代のそれと共通する行動様式と捉えることも可能



第31図 IX区 弥生時代遺構配置図(平成4・5・6年度博物館調査区)(S=1/200)



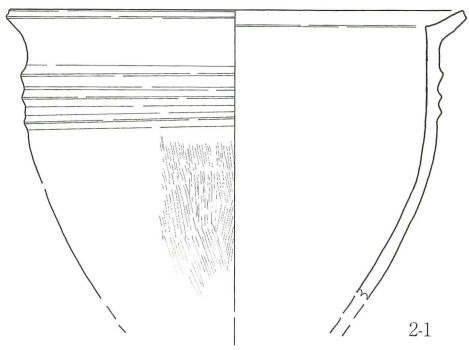


第32図 IX区 弥生時代大型土坑1 (平成4・5・6年度博物館調査区)(S=1/40)

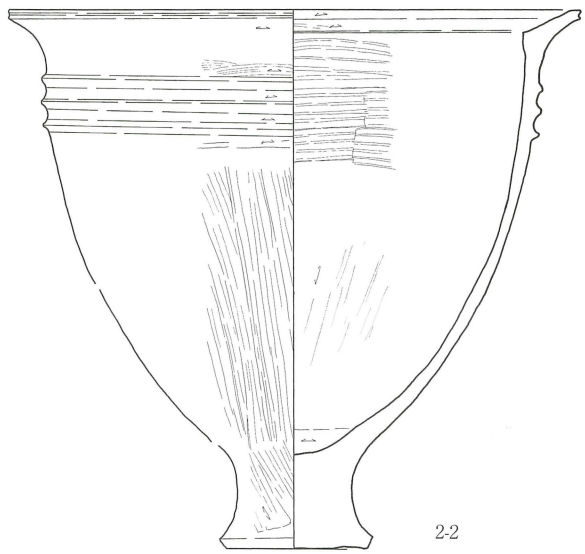


第33図 Ⅸ区 弥生時代土器集中廃棄所A (平成4・5・6年)(S=1/40)

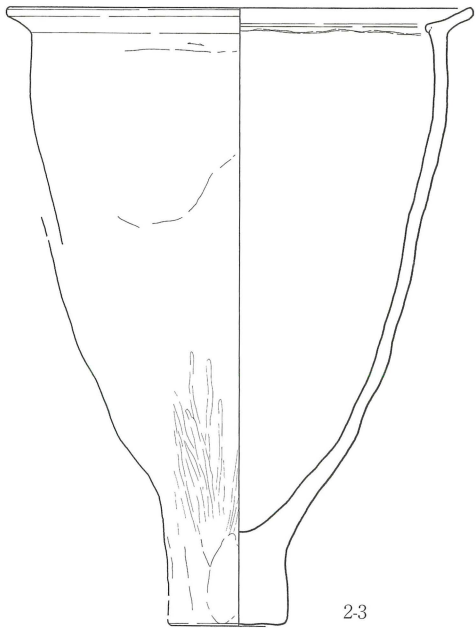




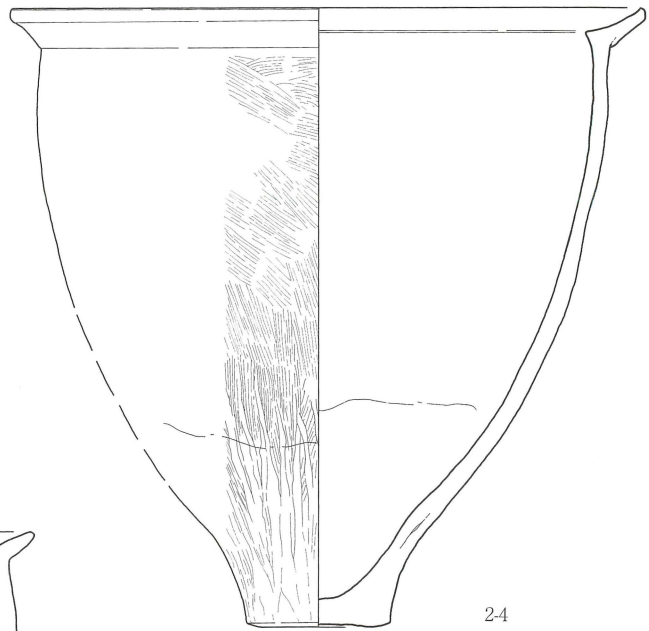
2-1



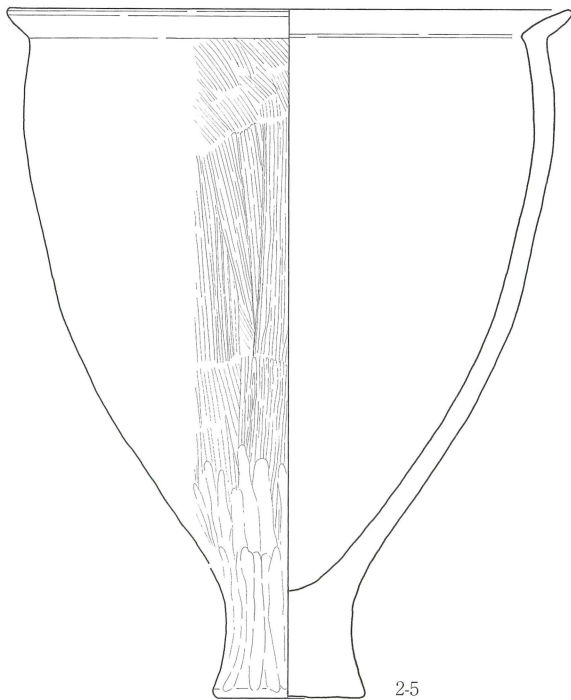
2-2



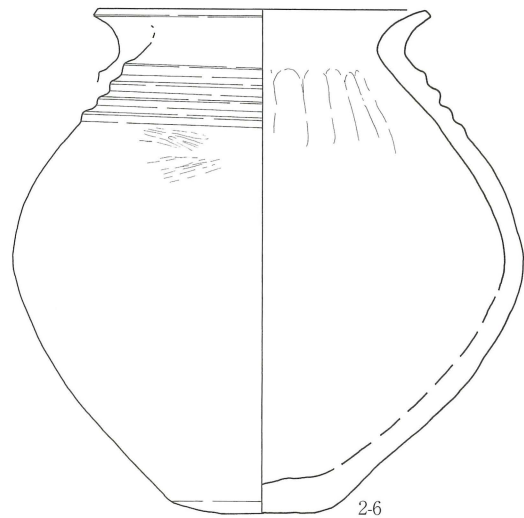
2-3



2-4



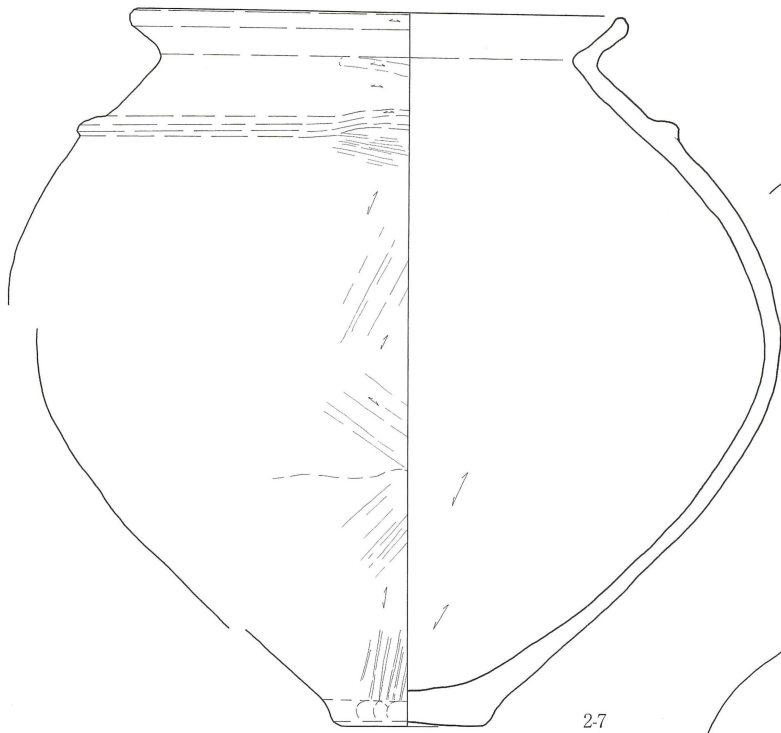
2-5



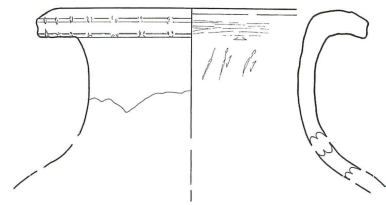
2-6

第34図 弥生時代遺物実測図1 (S=1/4)

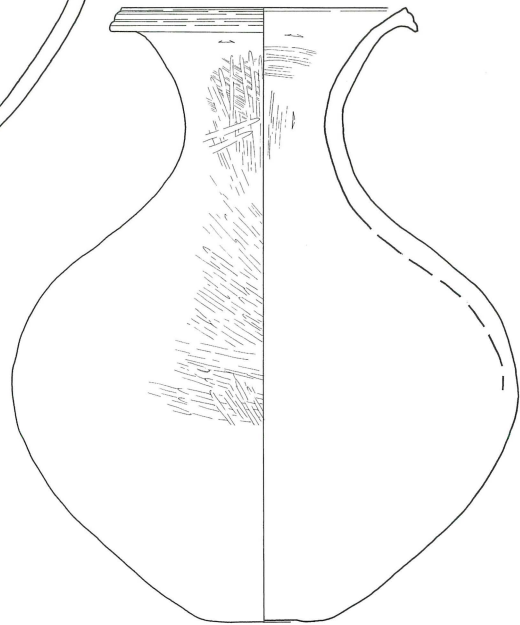




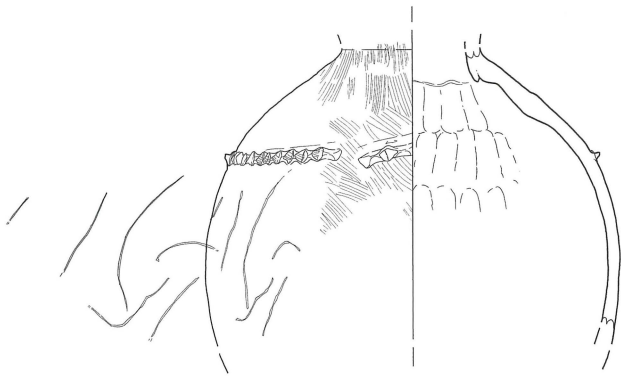
2-7



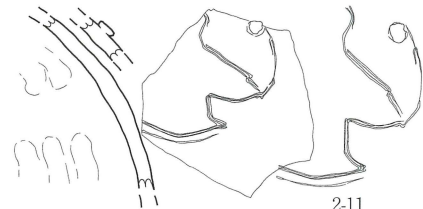
2-8



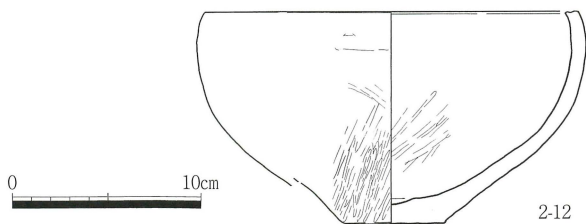
2-9



2-10

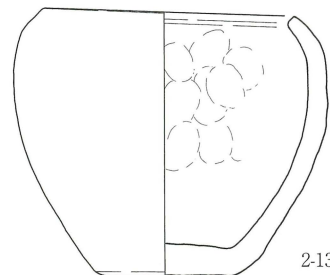


2-11



2-12

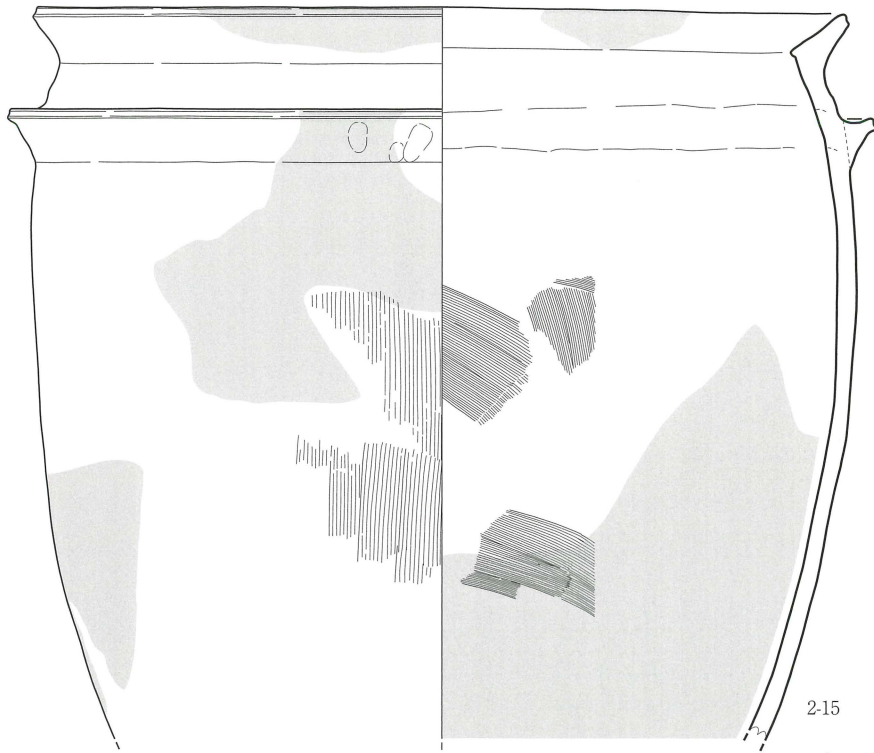
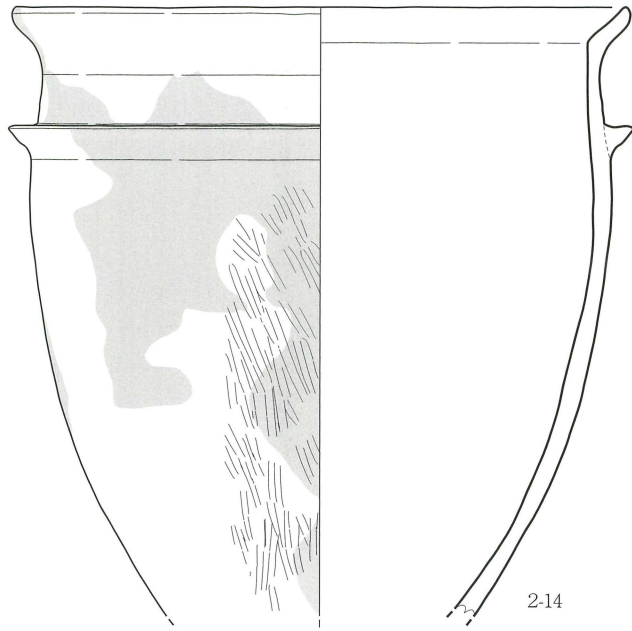
0 10cm



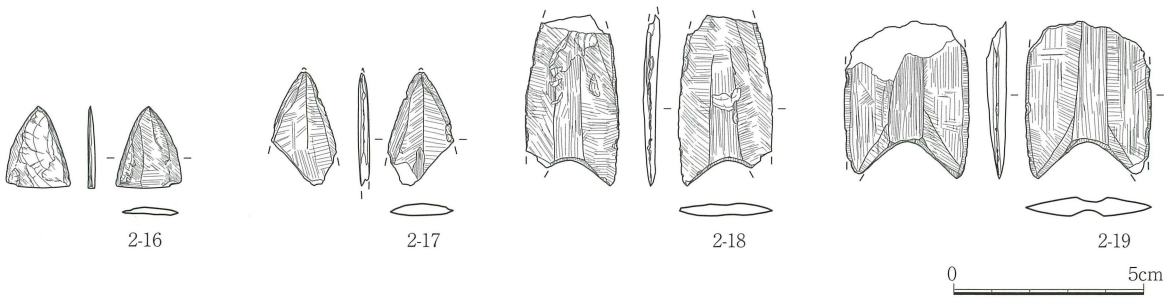
2-13

第35図 弥生時代遺物実測図2 (S=1/4)





0 10cm



第36図 弥生時代遺物実測図3 (小児棺:S=1/4、石器:S=1/2)

である。古墳時代に集落の近隣に土器集中廃棄所が形成されていた事実からは、Ⅸ区の近隣に集落が形成されていた可能性をさらに高めるものと考えられる。

なお、Ⅸ区で検出された河川については、河川側面の10層の傾斜状況から、弥生時代には存在した河川と判断できる。第6章でも触れるが、橋牟礼川遺跡の東側に隣接する南丹波遺跡において、弥生時代後期以降の竪穴住居群が検出されていることを合わせると、弥生時代中期以降において、この一帯がある程度の規模の居住域であった可能性を示唆しているものと考えられる。



## 第3節 古墳時代

### 第1項 遺構

#### ① 住居遺構

橋牟礼川遺跡においては、現在まで古墳時代の竪穴住居が150基以上検出されている。検出数が卓越するのは、I区とV区・VI区である。I区とV区・VI区の間には河川が横たわっていることから、河川を挟み集落中心部分が大きく2カ所にまとまるものと考えられる。以下、集落中心部と考えられる調査区について述べる。

#### ・I区 平成2年度都市計画事業に伴う幹線道路調査区(第37図/図版11-11)

I区においては古墳時代に帰属する竪穴住居が34基検出された。34基は竪穴同士が著しく切り合った状態で検出されたが、住居の切り合い状況は調査区の西端にかけてより著しい状況であり、1号住居を最も東側に位置する住居として、それより東側における住居の検出はない。したがって、I区西端で検出された住居群は、この地点から西側に広がる住居集中部分の東端部分に当たるものと考えられる。

I区の東端には河川があり、河川に向かう斜面には土器集中廃棄所②が、そして住居群に近い場所には土器集中廃棄所①とこれに伴う道跡が検出されている。この調査区では河川と集落との位置関係と、その間にどのような施設が置かれたかを示している。

I区で検出された竪穴住居は、切り合いで全体形が不明なものに関しても、直角のコーナーが検出されており、ほぼすべてが方形プランのものと考えられる。主な住居では、1号は4m×3.8mで床面に柱穴が2あるいは3基である。壁際に土坑があり、その部分が張り出しとなっている。埋土からは蛇文岩製鍔飾品3-101が出土した。2号は4m×4mで、床面に柱穴が2基ある。壁際に土坑を設け、床面に炉が設けられる。4号は3.2m×3.1mで、床面に柱穴が3基あり、床面に炉が設けられる。6号は4m×3.5mで、壁際に土坑が設けられる。9号は4.2m×3mで、床面中央に焼土が残る。床面に柱穴が3基設けられている。住居の帰属時期に関しては、29号床面から辻堂原式土器の甕が出土しており、5～6世紀代と考えられる。また、住居群に関連する土器集中廃棄所①からは、辻堂原式段階から筐貫式段階の土器が出土しているため、I区の住居群はこの時期に造営されたものと考えられる。

#### ・V区 昭和63年度都市計画事業に伴う幹線道路調査区(第38図/図版11-15～図版12-19)

V区においては古墳時代に帰属する竪穴住居が50基検出された。50基は竪穴同士が著しく切り合った状態で検出されたことから、一定期間において建物の造営が同一地点で繰り返し行われた結果である。上述のI区においても、竪穴住居が集中して検出されているが、これと比較してもV区の竪穴の切り合い状況率は格段に高く、V区周辺が集落の中心部分であったことが伺える。

建物の平面プランは、方形プランとみられるもの43基、方形プランの内部に張出部が付く円形の落ち込みを伴うもの1基(3号)、円形とみられるもの2基(12号・19号)、張出部が付く円形プランのもの3基(10号・48号・49号)である。方形とみられるものには、舌状の張り出し部を有するものが1基ある(21号)。

竪穴の法量は、方形プランの主なものは21号が4.5m×4.1m、34号が3.8m×3.6m、41号が3.3m×3.2mである。方形プランの内部に円形の落ち込みを伴う3号が1辺約5.8m、円形プランの12号が直径3.9m、張出部が付く円形プランの48号が長軸5.4m・短軸4.7mを測る。方形プランの建物は数量的に卓越するが規模は比較的小さく、方形の内部に円形の落ち込みを伴うものが少数であるが、他と比較して規模が大きい。なお、張出部を有する円形の48号竪穴住居は、柱穴と見られるピット3基が、竪穴の上端に接して設けられている。3基のピットが主柱であるとする、床面は円形竪穴の外側に広がると考えられる。このことから、このプランの建物は、本来は「方形+円形」プランであった可能性が考えられる。3号住居と同比率で方形竪穴を復元した場合は、48号住居の規模は8m×7m程度となることが推定できる。

柱穴の数と配置に関しては、明瞭なものが少ないが、方形プランの21号住居は柱穴3基が三角形に配されている。また上述のように、柄鏡形の48号住居も主柱穴とみられるピットが3基ある。

建物の付帯遺構としては、-1号・26号・38号・41号・42号で床面に焼土及びカーボンが広がる範囲があり、その内部に土坑炉が検出されている。また、34号は床面に焼土及びカーボンのみが広がる範囲があり、地床炉と考えられる。一方、カマドの検出例はない。